筑波大学博士（言語学）学位請求論文

韓国人日本語学習者の初対面接触場面における自己開示の研究

吳　晛榮

2018 年度

目次

第 1 章　研究の背景と目的

1.1 研究の背景 1

1.2 研究の目的 3

1.3 本論文の構成及び概要 5

第 2 章　先行研究と本研究の位置づけ

2.1 コミュニケーションにおける不確実性の理論 9

2.2 自己開示の研究 11

2.2.1 自己開示の研究のアプローチ 11

2.2.2 自己開示の研究範囲 13

2.2.2.1 自己開示の次元 13

2.2.2.2 自己開示の測定法 16

2.2.3 自己開示の研究概観 17

2.2.3.1 奥山(2005) 日・韓初対面会話における質問及び自己開示の研究 18

2.2.3.2 全(2010b) 自己開示の内容分類による日・韓対照研究 19

2.2.4 本研究での自己開示の定義 20

2.3 初対面接触場面の研究 23

2.4 話題に関する研究 26

2.5 本研究の位置づけ 28

第 3 章　本研究のデータと研究方法

3.1 資料収集の方法 30

3.1.1 会話データの協力者の属性 30

3.1.2 会話データの調査手順と実施日 32

3.1.3 会話データの内容 33

3.1.3.1 韓国語母語場面会話 33

3.1.3.2 日本語母語場面会話 35

3.1.3.3 日本語接触場面会話 36

3.1.4 文字化 38
3.2 自己開示の発話分析における認定基準 41
3.2.1 自己開示の単位認定基準 41
3.2.2 自己開示の開示状況の認定基準 43

第 4 章　自己開示の発話量の比較と表現の特徴

4.1 はじめに 45
4.2 研究の対象と範囲 45
4.2.1 記述的自己開示 46
4.2.2 評価的自己開示 47
4.3 自己開示の発話の出現数 47
4.3.1 自己開示の出現割合 47
4.3.2 場面別出現数の比較 49
4.4 内容の分類による自己開示の発話出現数 51
4.4.1 内容分類における KJ と J の比較 51
4.4.2 内容の分類による自己開示の接触場面と母語場面の比較 52
4.5 会話実例に見られる自己開示の表現の特徴 54
4.5.1 自分の評価に対して率直な返答 54
4.5.2 感情や考えの具体的な述べ方 56
4.5.3 直接的な表現の使用 58
4.6 KJ と J の自己開示に関わる意識と問題 60
4.6.1 記述式質問紙調査の目的と方法 60
4.6.2 回答コメントの内容 61
4.6.2.1 KJ の初対面に対する意識 61
4.6.2.2 KJ の接触場面と母語場面における自己開示に対する回答内容 61
4.6.2.3 J の初対面に対する意識 62
4.6.2.4 J の接触場面と母語場面における自己開示に対する回答内容 62
4.6.3 KJ と J の回答における考察 63
4.7 本章のまとめ 64

第 5 章　自発的自己開示と相手からの質問による自己開示

5.1 はじめに.....66
5.2 研究の対象と範囲.....67
5.3 KJ と J の開示状況別出現数の接触場面と母語場面の比較.....68
5.4 自己開示の内容の差から見た開示状況別の KJ と J の比較.....71
5.5 自己開示の内容の差から見た開示状況別の接触場面と母語場面の比較.....75
5.6 本章のまとめ.....78

第 6 章　自己開示後の受け手の発話

6.1 はじめに.....80
6.2 研究の対象と範囲.....80
6.2.1 受け手の定義.....81
6.2.2 受け手の分類基準.....82
6.3 KJ と J の受け手の発話出現数の比較.....85
6.3.1 KJ と J の受け手の発話出現数の比較.....86
6.3.2 KJ と J の受け手の発話の接触場面と母語場面の比較.....87
6.4 受け手の発話項目別の結果と考察.....89
6.4.1 情報受容.....89
6.4.2 情報交換.....91
6.4.3 情報共感.....95
6.5 KJ と J の受け手としての意識と問題.....102
6.5.1 記述式質問紙調査の目的と方法.....102
6.5.2 回答コメントの内容.....102
6.5.2.1 KJ の母語場面に対する回答内容.....102
6.5.2.2 KJ の接触場面に対する回答内容.....103
6.5.2.3 J の母語場面に対する回答内容.....104
6.5.2.4 J の接触場面に対する回答内容.....104
6.5.3 KJ と J の回答における考察.....105
6.6 本章のまとめ.....106

第 7 章　話題展開に見られる自己開示

7.1 はじめに.....108

7.2 研究の対象と範囲.....109

7.2.1 初対面場面の話題の研究.....109

7.2.2 話題の展開に関する研究.....110

7.2.3 定義と認定基準.....112

7.2.3.1 話題の定義.....112

7.2.3.2 話題導入の認定.....112

7.2.3.3 話題導入後の自己開示と質問.....114

7.2.3.4 話題の内容分類.....115

7.2.3.5 話題の構造パターンのコーディング.....116

7.3 話題導入方法と内容の特徴.....117

7.3.1 KJ と J の母語場面における話題導入と内容の特徴.....118

7.3.2 KJ と J の接触場面における話題導入と内容の特徴.....122

7.4 KJ と J の話題別に区切った自己開示のパターン出現数.....125

7.4.1 話題展開のパターン.....125

7.4.2 KJ と J の母語場面と接触場面における話題展開パターンの出現数.....128

7.5 本章のまとめ.....132

第 8 章　本研究のまとめと今後の課題

8.1 本研究のまとめ.....134

8.2 今後の課題.....138

参考文献.....140

各章と既発表論文及び学会発表との関連.....151

添付資料.....152

第 1 章　研究の背景と目的

本章では、本研究の背景と目的、そして、各章の内容について述べる。

1.1　研究の背景

日本語学習者が日本語母語話者と接する場面では、正しい文法や発音などの言語知識だけではなく、文化の差や社会規範まで踏まえたコミュニケーションを取ることが最も望ましいと考えられる。しかし、異なる文化背景を持つもの同士が言語を介してコミュニケーションを行うことで、誤解や摩擦が生じる可能性があることが数多く報告されてきた(倉地 1998、任 2009、三牧 2016)。そのため、母語話者同士の会話を手掛かりに、コミュニケーションスタイルの相違を明確にして、その上で、日本語学習者の特徴を明らかにする必要がある。これらの現状を踏まえてから、母語話者を目標とする日本語学習者にとっては、日本語母語話者との接触場面は非常に重要な場面であり、その一側面を明らかにする研究が必要とされるのである。

日常生活において、コミュニケーションを取ることは欠かせない行為である。その中でも特に、初対面の場面ではどのような話題について話せばよいのか、あるいはどのように話せば失礼にならないかなどは同国の相手との会話でもしばしば悩まされる。初対面の人との会話では、様々な工夫をして会話をなり立たせている。お互いに相手の情報を持たないため、どの程度自分について話すのか、どのような質問をするかなど、相手に否定的な印象を与えないための配慮が予想されるのである。初対面の接触場面を対象とした研究には、学習者のストラテジーや特定の現象に焦点を当てた研究が多い。例えばフォリナートーク(鎌田 1993、筒井 2008)や、スタイルシフト(メイナード 2001、大津 2007、申 2007)、言語調整(俵山 2008、筒井 2010)など。しかし、会話中に行う特定のストラテジーだけではなく、内容面からも考察することは、学習者の特徴を明らかにする上で重要な手がかりになると考えられる。接触場面におけるコミュニケーションは、

母語場面と異なる振る舞いを見せる(ネウストプニー1995)。そして、初対面接触場面で相互にどの程度意識されコミュニケーションに影響を及ぼすのかを見るためには、母語場面と接触場面との比較が欠かせない(三牧 2016)。そこで、本研究では接触場面と母語場面における、初対面同士の会話を中心に分析する。

初対面の状況では、相手との距離を縮めるために言語を用いて互いの情報を交換し合い、緊張感を和らげつつ会話に取り組んでいく。対人コミュニケーションにおける自分について「相手に自己に関する情報を、言語を介して伝達すること(全 2010b : 126)」を自己開示と言う。深田(1997)は、自己開示によって、開放領域を拡大することにより、互いが共有する「私」と「相手」の情報が増え、親密感とともに信頼感も高まって対人関係が進展していくことになると指摘している。よって、初対面の間柄において自己開示は必要不可欠なものと言えよう。しかし、「適切な自己開示はより良い人間関係の形成と維持をもたらすものである一方、不適切な内容で自己開示を行うと相手に否定的な印象を与える(全 2010b:124)」。

多くの研究から自己開示は異なる文化間で差があることが指摘されてきた(豊前・大渕・中村他 1990、西田 1998、全 2010b)。自己開示は言語行動として捉えられ、異文化間において互いの社会文化的知識が異なれば、誤解が生じる場合がある。日本語学習者にとっても、異なる言語を介してのコミュニケーションは文化の違いに関する知識がなければ非常に困難である。異文化間コミュニケーションにおける誤解のほとんどは、相手のコミュニケーションスタイルを、自文化のそれに当てはめて自分の尺度で、相手を解釈することから生じると指摘されている(任 2009)。したがって、自己開示の文化の差を明らかにすることも重要だが、日本語学習者が実際に日本人との接触場面で、どのような内容で相手との相互行為を行っているかを分析することも有意義である。日本語学習者にとっても、日本に留学する際は、初対面の人と会うことが多く、その後の人間関係の構築に重要と考えられるため、日本語学習者を対象にした研究が必要であると考えられる。

本研究では、人間関係の初期段階である初対面場面の特徴を捉えることを目的に、「自己開示」の言語行動から異文化間での会話スタイルの相違を明らかにする。実際の発話データを基に自己開示の言語行動の特徴を分析するとともに、多角的にその特徴を明らかにすることで総合的に描き出すことを目指す。

1.2　研究の目的

以上で述べたように、自己開示は初対面の相手と遭遇する時、互いの情報基盤がないためほとんどの会話内容で自己開示をすることが多い。そこで「対人関係において、適切なタイミングで適度な自己開示をすれば、相手との関係を円滑に保つことができる(徳井・桝本 2006：7)」ことから、本研究では特に韓国人日本語学習者を取り上げて、初対面場面での学習者と日本語母語話者の自己開示の相違点及び類似点を多角的に検討することを試みる。

全(2010b)では、日・韓の自己開示の発話と内容を 2 つに分けて発話の総量を比較している。その結果、韓国語母語話者はより自己開示の量が多く、客観的内容[1]よりは、主観的内容[2]が多いと指摘している。しかし、異文化間のコミュニケーションの相違を明らかにするためには、母語話者同士の比較だけでは十分検討できないため、接触場面と母語場面の比較が必要と考えられる(課題 1)。また、従来の自己開示研究では質問紙による研究が多くなされてきたが(豊前・大渕・中村 1990、Chen1995、西田 1998、顧 2010)、質問紙調査だけでは、自発的に開示したか相手からの質問により開示したかまでは把握できない。小川(2000)は、互いに同程度の開示をして、同じくらい質問をし合うと、相手に対して好印象を抱くことを述べている。よって、発話の総量だけでは把握できない開

[1] 客観的内容は、情報、事実、経験などの内容を示す。
[2] 主観的内容は、感情、気持ち、評価などの内容を示す。

示状況[3]を分析することで、自己開示がどのような状況で出現するかが明らかにできるとその結果から、自己開示を同程度になされているか、同程度に質問をして相手の自己開示を引き出しているかが明らかになろう(課題 2)。また、会話は 2 者間で行うことから、参与者が互いに影響をし合っているいることが予想される。よって、相手の自己開示に対する反応から、どのように自己開示を受け止めるのかという点に関する相違を明らかにできる(課題 3)。最後に、会話を進行する中で、互いに自己開示を通して情報を交換したそのまとまりが話題になるが、そこで自己開示がどのような働きをして会話を進行させているか見ることで、初対面場面における情報収集と話題形成のそのプロセスが明らかにできる(課題 4)。

以上を踏まえて、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面会話をもとに、以下のように具体的な課題を設定する。

(1)課題 1：接触場面と母語場面の比較から、これらの場面によって自己開示の発話量には変化が見られるかを考察する。また内容の表現における特徴を明らかにする。［第 4 章］

(2)課題 2：自己開示の開示状況別に総量を分析して、開示状況による自己開示の量の差とその量には返報性[4]が見られるかを明らかにする。［第 5 章］

(3)課題 3：会話は参加者同士がお互いに影響を受けるため、自己開示をどのように受けて相手に示しているか、自己開示後の発話を分析して自己開示の受け手としての発話の類似点と相違点を明らかにする。［第 6 章］

(4)課題 4：話題導入時の自己開示の役割および、話題展開にどのような働きをしているか、そしてパターンがあるか、会話内容全体から自己開示に焦点を当てて分

---

[3] 本研究での開示状況は、自発的に自己開示をしたか、相手からの質問により自己開示をしたか 2 つの状況を示す。

[4] 自己開示の内面性のレベルに応じて自分も自己開示をしようとする傾向のことを自己開示の返報性あるいは相互性と呼ぶ(榎本 1997)。

析して、自己開示の働きにおける話題導入、展開と構造を明らかにする。[第7章]

本論文では、実際の会話を収集し「自己開示」の発話を中心に分析を行う。対象にする場面は基本的に初対面の間柄の会話場面である。自己開示の開示数、内容、開示した状況、話題の変化と自己開示の機能及びパターンについて量的分析を行う。母語場面と接触場面の比較を行うため、1人の会話協力者が母語を使って1回、日本語を使って1回、合計2回会話を録音している。自己開示の定義は、全(2010b)の定義に沿い「相手に言語を介して、自己の情報を与えること」とする。「自己開示」の定義は、第2章の2.2.4節、自己開示の単位認定基準については、第3章の3.2節で詳しく見る。「自己開示」という言語行動は、相手が普段親しい人でも初対面の人でも、自身が意図して自己開示をするのではなく、日常で多かれ少なかれ頻繁に行われているといえよう。一般に自己開示は相手との関係の進展によって徐々に個人的な話に進む傾向がある。そして、自己開示をして相手の情報を集めるにあたり、内容だけではなく開示の量や、誰から開示をするか、相手とどのように情報を集め両者の間を近づけていくか、そのあり方を左右するものには様々な要因があると思われる。そこで、本研究では、関係形成の第1歩である初対面場面に焦点を当てて「自己開示」を捉えるものである。

以上のような内容を含め、課題を達成するために、各章ではどのような分析を行うか、その内容について1.3節で述べる。

1.3　本論文の構成及び概要

本研究は本章を含め以下、8章から構成されている。

第1章　研究の背景と目的

第 2 章　先行研究と本研究の位置づけ

第 3 章　本研究のデータと研究方法

第 4 章　自己開示の発話量の比較と表現の特徴

第 5 章　自発的自己開示と相手からの質問による自己開示

第 6 章　自己開示の受け手の発話

第 7 章　話題展開に見られる自己開示

第 8 章　本研究のまとめと今後の課題

第 2 章では、先行研究の紹介と、本研究の分析項目である「自己開示」の発話の定義を示す。そして、本研究の位置づけを行う。

第 3 章では、研究方法として、データの収集方法と、文字化の方法を示す。そして、自己開示の発話の単位認定基準を提示する。

第 4 章から第 7 章までは、「自己開示」の発話に関する会話データを分析する。

第 4 章[**課題 1**]では、まず、母語場面と接触場面に分けて韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自己開示の全体的な出現量を分析する。そして、出現した自己開示の発話内容を客観的内容と主観的内容の 2 つに分け出現量を比較する。最後に、韓国人日本語学習者に見られた自己開示の特徴を見る。そして、記述式質問紙調査からその原因を探る。韓国人日本語学習者は、開示量も多く、開示内容も主観的内容が見られ、その表現にも特徴があることをこの章では主張する。

第 5 章[**課題 2**]では自己開示を、自発的に開示したか、相手からの質問によって開示したか、という 2 つの状況に分けて分析する。開示状況の全体的な傾向と、開示内容を 2 つに分けて見た量の差、接触場面と母語場面別に見た開示状況の量の差を分析する。初対面の人と自発的に開示をすることは共通しているが、韓国人日本語学習者は自己開示を自発的にして相手との関係を深めようとすること、日本語母語話者は相手の自己開示量の多少にかかわらず一定な距離を保ち開示することをここでは主張する。

第 6 章[**課題 3**]では、自己開示後の受け手の発話に注目する。会話は 2 者間で行われるものであるため、自己開示後の返答や反応も次の自己開示に影響を及ぼす。よって、受け手の発話を分類し比較する。そして、接触場面と母語場面での受け手としての発話の変化を分析する。最後に、記述式質問紙調査からその原因を探る。そこから自己開示の受け手の発話として、韓国人日本語学習者は自分の考えや感想で伝えようとすること、日本語母語話者は、言葉よりあいづち詞で自己開示を受け止めることを主張する。

第 7 章[**課題 4**]では、自己開示と密接な関係にある話題を考察する。話題導入と話題の種類と内容を母語場面と接触場面で比較する。そこから話題の導入時の自己開示の機能、話題を展開する中での自己開示の働きを分析する。そして、自己開示が出現する箇所に注目してそのパターンを分析する。韓国人日本語学習者は話題の導入のために自己開示を行う一方、日本語母語話者は 1 つの話題を派生させるため自己開示を使用すること、相手と親密になる過程で、韓国人日本語学習者は相手との距離を急速に縮めようとするのに対して、日本語母語話者は徐々に進展させていこうとすることを主張する。

第 8 章では、各章の分析をまとめ、本研究を総括し、日・韓異文化コミュニケーションと日本語教育を関連させながら本研究の持つ意義を記述するとともに、今後の課題について言及する。

第 1 章　序論

研究の背景と目的

第 2 章　先行研究と本研究の位置づけ

[理論的背景]コミュニケーションにおける不確実性理論、自己開示研究のアプローチ・研究範囲・測定法

[先行研究]自己開示、初対面接触場面、話題の研究

第 3 章　会話データと研究方法

会話収集方法、会話協力者の属性、文字化の方法、自己開示の発話単位認定

第 4 章　自己開示の発話量と表現

[研究 1]量的調査

第 6 章　自己開示の受け手の発話

[研究 3]量的調査

第 5 章　自己開示の開示状況

[研究 2]量的調査

第 7 章　自己開示の機能とパターン[研究 4]量・質的調査

⇓

第 8 章　総合的まとめ

図 1-1　本論文の構成

第 2 章　先行研究と本研究の位置づけ

本章では、関連する先行研究を紹介し、本研究の位置づけを行う。2.1 節では、コミュニケーションにおける不確実性理論を紹介する。2.2 節では、自己開示の研究における既存のアプローチと自己開示の研究について紹介し、本研究で見る自己開示の範囲と対象について述べる。2.3 節では、初対面接触場面の研究と接触場面の規範について紹介する。2.4 節では、自己開示と密接な関係にある話題に関連する研究を紹介する。2.5 節では、本研究における自己開示の定義を行い、関連する先行研究と比較しながら本研究の位置づけを示す。

2.1　コミュニケーションにおける不確実性の理論

本研究におけるデータは、初対面場面を対象にしている。初対面の人とコミュニケーションを行うとき、我々は不安を抱き不確実性を感じる。「不確実性の理論の主要概念の 1 つは予測である(西田 2001：3)」。特に、初対面の間柄は、互いの情報量が少ないため予測ができないので、不確実性を感じやすい場面になる。

不確実性を減少させる行為の 1 つである自己開示は、同一の文化内で一定のルールがあることが明らかになっている(Berger & Bradac1982)。そこで、初対面の相手とコミュニケーションを取る時、どのような段階を経るか、どのような支障が生じるのか、そして自己開示がどのような役割をするか、Berger & Bradac(1982)によって提唱され、西田(2001：5-7)が翻訳した公理を紹介する。

公理 1. エントリーのステージ[5]には高い不確実性が存在するが、出会った 2 人の間に言葉によるコミュニケーション量が増加すれば、不確実性は減少する。不確実性

[5] 知り合ってばかりの状況、初期交流を示す。

が減少するにつれ、ことばによるコミュニケーションの量は増加する。

公理 2. 非言語による好意表出が増加すれば、初期交流における不確実性は減少する。不確実性の減少は、非言語による好意表出の増加につながる。

公理 3. 高い不確実性は情報[6]収集の行動を増加させる要因となる。不確実性が減少するにつれて、情報収集の行動は減少する。

公理 4. 人間関係の高い不確実性はコミュニケーションコンテクストの親密度を低くさせる要因になる。低い不確実性は高い親密度を生じさせる[7]。

公理 5. 高い不確実性は高い頻度のレシプロシティ[8]を生じさせる。低いレベルの不確実性は低いレシプロシティを生じさせる。

公理 6. 2 人の間の類似は不確実性を減少させる、一方非類似性は不確実性を増加させる。

公理 7. 不確実性の増加は行為の減少を生じさせる。不確実性の減少は行為の増加を生じさせる。

不確実性理論は、初対面の間柄のみならず、異文化間の間柄でも検証されている。Berger & Gudykunst(1991)は、公理 3 以外はハイコンテクストの文化における初期交流及び親密な人間関係に当てはめることができると指摘している。日本と韓国はハイコンテクストに相当する。このように、初対面場面では不確実性が存在し、お互いに会話を通して情報交換をしつつその不確実性をなくしていく。初期交流のコミュニケーションを説明する目的で構築された不確実性理論によれば、相手に関する情報を増加させて不確実性をなくしていく。そのためには、互いに尋ね、答え、自己開示を行っていくこ

---

[6] 情報は、相手に関する情報の意味であり、質問する回数を意味する。

[7] 低いレベルほど不確実性が低いことを示す。

[8] レシプロシティは、対人的なメッセージの相互交換の関係をいう。知り合ってばかりのステージは、1 人が 1 つのことを開示すれば、もう 1 人もそれに見合うことを開示する。情報の量に偏りが出ないよう、互いに尋ね、答える。

とが必要となる。よって、本研究では、不確実性を減少させていくために、情報を増やしていく行為である「自己開示」から、初対面における韓国人日本語学習者と日本語母語話者の相違点及び類似点を記述していく。

2.2　自己開示の研究

2.2.1 自己開示の研究のアプローチ

自己開示の観点から初対面場面に対するアプローチには、心理学の各分野、異文化間コミュニケーション、社会言語学・談話分析など多くの分野で研究されてきた(三牧2013)。榎本(1997)は、心理学の各分野では、これは次のような 3 つに分けられると述べている。

①パーソナリティ心理学には、性差、文化差、年齢などの団体差、自己開示と性格特性の研究がある。

②社会心理学には、自己開示の返報性、対人認知親密化過程の研究がある。

③臨床心理学には、自己開示の治療効果、治療者の自己開示の研究がある。

これらの心理学の研究は、初対面の相手に対する自己開示を扱うものではあるが、特定の他者に対して、「自己」をどこまで見せるかというところに焦点が置かれている。研究方法としては、Jourard & Lasa-kow(1958)によって開発された自己開示尺度(JSDQ)を中心に、大量のデータを基に統計的に論じる方法がある。「自己開示はパーソナリティの領域で主に個人差の観点から検討された(榎本 1997：83)」。

異文化間コミュニケーションアプローチは、ことばによるコミュニケーションの本質をコンテクストの中に求めながら、同文化内のコミュニケーションと異文化間のコミュニケーションではどのような「ずれ」があるかを考察する研究が行われてきた(重光2003)。異文化間コミュニケーションを対象にした研究には、質問紙法を用いるものが多い。質問紙による大量の調査からは異なる文化における傾向を把握することができるが、それが実際の言語行動と常に一致するとは限らない。このような点から、質問紙調査だ

けでは実態を把握することに限界がある。

また、社会言語学・談話分析のアプローチによって自己開示の様相を明らかにしようとする研究がある。社会言語学は、言語と社会の関係から言語を捉えようとする研究である。社会言語学の射程は広く多様であるが、その中で語と文化社会の相関の研究、語の運用(談話分析、会話分析を含む)の研究が挙げられる(井出 1988)。方法としては、会話を録音し、分析する手法を採用しているため、談話分析の分野に多く貢献している(重光 2003)。談話分析は、ことばの機能を談話のレベルで分析することであり、「参加者や話題など言語形式以外の要素も取り込んで考察することは社会言語学の特徴を共有している(橋内 1999：3)。」

本研究では以下の方法を用いて自己開示の在り方を明らかにすることを目指す。すなわち、自己開示の文化差を扱った「パーソナリティの心理学」の視点を援用したアプローチを試みる。また、異文化間コミュニケーションを質問紙法ではなく、社会言語学・談話分析の手法を取り入れて、実際の会話データの量的な調査を行う。よって、本研究のアプローチを以下の構成図 2-1 に示す。

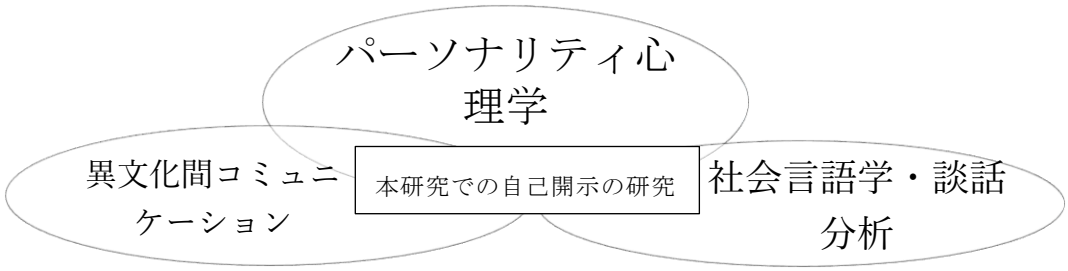


図 2-1　本研究のアプローチ

本研究の「自己開示」の分析においても、「パーソナリティ心理学」、「異文化間コミュニケーション」、「社会言語学・談話分析」それぞれのアプローチを援用する。本研究の対象からは、パーソナリティ心理学のアプローチが参考になる。また、異文化間のコミ

ュニケーションにおける「自己開示」の発話を量的調査により比較分析して、言語間の相違や類似点を捉えることは、異文化間コミュニケーションのアプローチとして考えられる。そして、実際の会話をデータと記述式質問紙調査を基に分析するため、社会言語学の手法が用いられる。また、自己開示のパターンや機能に談話の視点からアプローチしているため、談話分析の手法も用いられる。このような、研究目的に適したアプローチに基づく分析を本研究では試みる。

2.2.2 自己開示の研究範囲

本項では、自己開示の研究範囲と、測定法について説明する。そして、自己開示の研究を概観し、本研究と最も関わる先行研究である全(2010b)と奥山(2005)を紹介する。

2.2.2.1 自己開示の次元

自己開示の次元には開示された内容の「広がり」と「深さ」の 2 次元がある。図 2-2(Derlega,V.J. & Chaikin,A.L.,1975a:104)のように、話題には浅い話題と深い話題がある。初対面の間柄では浅い話題が多く現れ、相手との関係が深まることで話題も深くなっていく。そして、自己開示の幅つまり、内容の広がりがある。

自己開示の幅

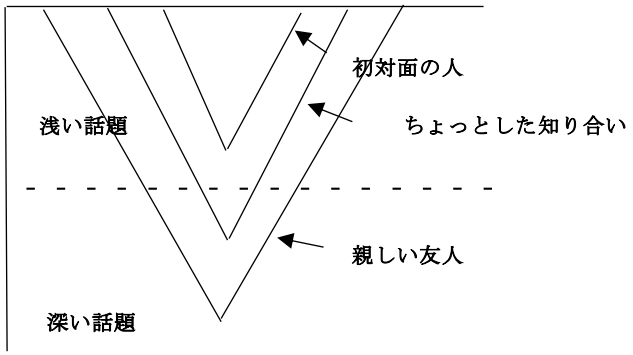


図 2-2　人間関係の進展の 3 つの段階に対応する自己開示の広がりと深さ
(Derlega & Chaikin,1975a:104 が Altman & Haythorn,1965：413 を修正したもの)

榎本(1997：3)は、自己開示の深さに関する見解を以下のように提示している。

①特定の状況下の個々の行動の開示より、性格特性のようなより普遍的な傾向の開示が深い

②独自な内容の開示ほど深い

③行動や実際の出来事よりも、動機・感情・空想のような目に見えない側面の開示ほど深い

④自分の弱点に触れる内容の開示ほど深い

⑤社会的に望ましくない側面の開示ほど深い

⑥強い感情を伴う開示ほど深い

以上のように、自己開示には浅い話題と深い話題が存在し、開示する内容によって深さが存在する。次に、自己開示の測定次元[9]を紹介する。図 2-3 は、(榎本 1997：8)により作成された次元の図である。自己開示の次元には、大きく分けて、深さ、量、広がり、比率、動機、柔軟性の 5 つがある。そのうち、深さ、量、広がりには下位分類がある。深さには、内容面と形式面があり、形式的深さはどれだけ感情がこもっているかを示している。量は、自己開示の数と、それに冷やした時間に分けられる。広がりは、内容的広がりから 4 つの下位分類と、時間的広がりに分けられる。内容的広がりからは、話題数、肯定的か否定的かで広がりが分けられ、また事実、感情で内容の広がりが分けられる。比率は、話す量と自己開示とみなせる部分の割合を意味する。動機は、例えば「胸の中にしまっておきたくないから」のように、どのような理由で開示するかを意味する。柔軟性は、相手や状況に応じて自己開示の水準を調整する能力を示している。開示意向と開示量の規範の一致が高いと自己開示の柔軟性が高く、社会的期待されている形で自己開示ができる。

[9]自己開示は実験や観察、質問紙法など様々な側面から観測することができる。その際に、各方法によって観測できる自己開示の次元は多元的なものとなる。

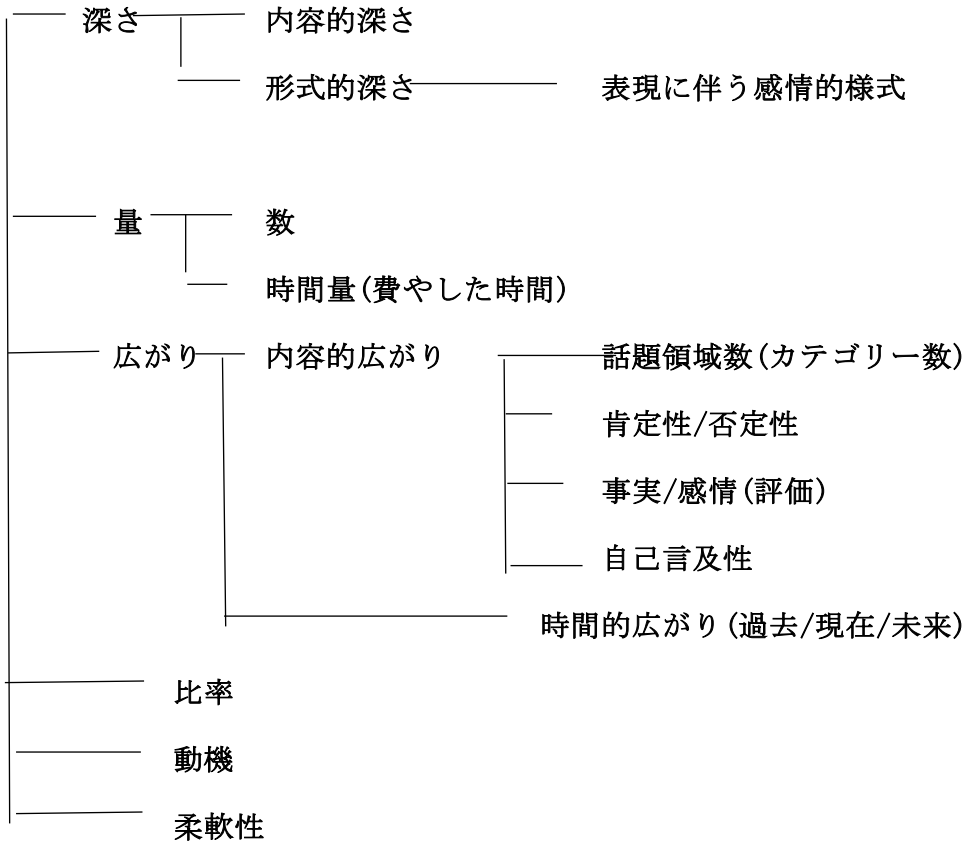


図 2-3　自己開示の次元(榎本 1997:8)

自己開示の量は、自己に関してどの程度他者に話すかという開示量であり、自己開示の数(回数)を測定する。深さは、内容の面からみると内面的で深いものと周辺的で表面的なものがある。肯定性よりは否定性の内容が深い開示に含まれ、事実よりは感情の内容が深い自己開示になる。以上の自己開示の次元から、本研究では自己開示の量と深さと、広がりを中心に論じていく。榎本(1997)は自己開示の次元に、深さと量、広がりの3つが中心になり、実験的会話は内容的深さと頻度の2つが中心になると指摘している。そこで本研究では、2 つの次元を中心に内容の深さと量から自己開示の傾向を見ると共に、広がりから内容的特徴と話題の領域を分析する。

2.2.2.2 自己開示の測定法

自己開示の研究には、大きく 3 つの測定方法がある。榎本(1997)の見解を参考に各測定の内容と目的について以下、表 2-1 で紹介する。

表 2-1　自己開示の測定法

	目的	方法	特徴
自己報告法	大量のデータからある程度傾向を示すことが可能	Jourar が開発した JSDQ と榎本により開発された ESDQ など、質問紙による調査法	日常生活における自己開示行動を客観的にとらえることは不可能
観察評定法	自己描写の広がりや深さが評定可能	第 3 者あるいは開示の受け手が評定するもの	日常の自然な場面での自己開示傾向を捉えるのは難しいが、条件を統制できるという長所がある
客観的計量法	実際の自己開示行動を評定可能	自己描写文を書かせたり、実際の会話を録音したりする	客観的な基準で評定可能、自己開示の深さの印象や感情の込め方は測定出来ない

以上のように自己開示を測定するには、目的に合わせて 3 つの方法がある。その中で、本研究は実際の会話を録音し、基準に沿って自己開示の量を測定するため、客観的計量法を用いる。

2.2.3 自己開示の研究概観

自己開示の研究は、心理学の領域で多くなされてきた。多くの研究は質問紙による量的研究である。その初期である 1960 年代には自己開示と関連しているパーソナリティ特性の検討、1970 年代に入ると自己開示に影響を与える状況的要因の研究が行われて来た(榎本 1997)。その後、言葉と環境が異なる異文化の人同士の社会文化的要因と自己開示の関係を解明するための研究が始まった Chen(1995)、西田(1998)。異文化間の要因を扱った研究としては、豊前他(1990)、横田(1991)、西田(1998)、奥山(2005)、顧(2010)、全(2010a)、一二三(2013)などが挙げられる。

豊前他(1990)は、日本人学生 116 人と留学生 57 人を対象に、自己開示の動機項目と対象人物を挙げて開示量を比較している。主な結果としては留学生の方が日本人より開示しやすい傾向が見られた。しかし、対象人物には同性の友人、異性の友人と家族が含まれているため、留学生と日本人との間における友人関係の差は明らかにできていない。

横田(1991)は、留学生 128 人と日本人学生 238 人を対象に、日本人学生と留学生の友人関係と自己開示の相関を質問紙で調査している。しかし、留学生の出身国については統一が取れていない。調査により、留学生は、留学生に、日本人学生は日本人学生に対し、より自分に関する情報を開示するという結果を得た。

西田(1998)は、日本人 241 人とアメリカ人 152 人を対象に、話題に着目して日米の自己開示を比較した。研究方法としては、開示量と開示順序を質問紙で調べている。その結果として、日本人はアメリカ人より圧倒的に少ない話題で話をすると指摘している。

顧(2010)は、日本人大学生 534 人、中国人大学生 350 人を対象に、自己開示の動機と適切さに関する日中の比較を目的として、質問紙調査を行った。中国人は心にため込んでいる感情を自己開示によって発散するが、日本人は自己アピールのために自己開示をすることを指摘している。

一二三(2013)は、日本人学生 28 人と中国人留学生 28 人を対象に質問紙と会話両方の調査を行っている。親しい間柄での自己開示の特徴を内容面と心理面の関連性から見た、

日中対照研究である。実際の会話と質問紙の 2 つの調査で、開示される側面、開示中の配慮、開示後の精神的効果を分析した。日中比較の主な相違点としては、意見、評価、助言など応答的自己開示の配慮に違いがある。応答的自己開示の配慮に対して、日本人は相手のネガティブ・フェイスを侵害するものではなく楽しいものと考えているのに対し、中国人は相手のネガティブ・フェイスを侵害する恐れのあるものと捉えていることを報告している。そして、自己開示を通して精神的効果が高まるのは、日本人は率先して相手に開示するときであり、中国人は相手から共感的自己開示を得た時であることが明らかになった。

2.2.3.1 奥山(2005) 日・韓初対面会話における質問及び自己開示の研究

奥山(2005)は、韓国人日本語学習者 24 人 12 組と日本人大学生 14 人 7 組を対象に、会話の時間的経過に伴う質問と自己開示の変容の比較を行った。その結果、韓国人は日本人より話題が 3 倍多く現れた。また、日本人は相手が自己開示をしてくるのを待つ傾向があった。話題の内容は以下のように分類されている。韓国語の和訳は筆者による。

①中間的自己開示：私は国際関係学部

②意見：個人旅行とかは危ないですもんね

③心情：전 처음 막이거 한다그래서 조금 긴장했거든요

(私は最初ちょっと緊張していました)

④否定的自己開示：저도 장학금하고는 좀 관계가 없는데요 하하

(私も、奨学金とは縁がないですよ　はは)

⑤態度：말 놓고 해요 (ため口で話しましょう)

⑥肯定的自己開示：今、4 年生で今年就職する、できるかもしれないんです

⑦肯定＆否定的自己開示：일어는 저 외국어 공부하는 대개 좋아하거든요 근데 공부 때문에 일어는 조금하다가 말았어요

(日本語は、私外国語勉強するの好きなんですよ。でも、勉

強のためにちょっとやってやめました。)

⑧第三者の情報開示：うそ！お姉ちゃんが住んでる！

奥山(2005)は上述の話題における自己開示の分類に基づいて、韓国人に多く現れた項目と、日本人に多く現れた項目についてそれぞれ分析を行っている。その結果、韓国人、日本人共に身上調査的な中間的自己開示の割合が高いことが分かった。会話の進展に沿って身上調査的内容の客観的内容から意見、心情の主観的内容の開示が多くなるという奥山(2005)の結果を参考に、本研究では、初対面場面の状況を考え客観性と主観性を中心に考察して行く。また奥山(2005)では、ポライトネスの理論を基に質問の形式と自己開示の性質の関連性から分析を行っている。これによると、韓国人は相手に質問することによって相手が誇れる話題を探して、「相手を無視せず関心を示す」ことがポジティブ・ポライトネスのストラテジーと考え、日本人は「相手に負担をかけさせない」ように自発的に自己開示を行い、盛り上がりそうな話題を探すネガティブ・ポライトネスのストラテジーを使っていることが示唆された。

以上の結果を踏まえ、本研究では、自己開示の発話を中心に韓国人日本語学習者と日本語母語話者における会話スタイルの相違点及び類似点を分析し、研究を進めて行く。

2.2.3.2 全(2010b) 自己開示の内容分類による日・韓対照研究

異文化間の差と内容に焦点を当てた研究としては、全(2010b)が挙げられる。全(2010b)は韓国語母語話者と日本語母語話者を対象に、初対面場面における自己開示の全般的な出現傾向と内容の特徴を比較している。韓国語母語話者の自己開示の頻度は日本語母語話者の 2 倍近く現れた。また、自己開示の内容が客観的か主観的かに分け、開示内容を分類し比較している。その結果、韓国語母語話者には、母語からの影響に見られる言語表現があることが示唆された。

また、日韓共に初対面の相手に対しては、客観的内容の自己開示を主観的自己開示より多く行う傾向があることが分かった。さらに韓国語母語話者は具体的な内容で開示を

行う傾向が見られた。身上関連の記述的自己開示であっても年齢、家族の構成について詳しく述べ、学生生活に関する話題では、浪人経験、休学経験などの内容が現れた。自己開示の内容を見ることで、同じ話題であっても、どれだけ私的な話をするというような違いは話題選択の種類や範囲では明らかにできないことが分かった。また、評価的自己開示[10]の内容からは、日本語母語話者は好み・能力の評価に限定されるのに対して、韓国語母語話者は好みや自分の性格に対する評価、進路への悩み、人間関係の悩み、家族との不和と不満など、悩み・不満の内容が多く現れたと全(2010)は述べている。韓国語母語話者の自己開示に見られる表現は多様であり、特に直接的な表現や感情を激しく打ち明けることが分かった。最後に、自己開示に関する意識には日韓の差が見られた。日本語母語話者は初対面場面に対する意識が強く、距離を一定に保ったまま会話を進めて行き、韓国語母語話者は初対面場面であることをさほど意識してないことが分かった。また、プライバシーに関する概念・自己開示の許容範囲など、文化の差による相違も明らかになった。フォローアップインタビューでは、母語の影響を対人関係に対する日韓の規範及び行動様式の相違から解明している。しかし、日韓の自己開示の特徴や傾向にとどまらず、異文化間のコミュニケーションの解明には接触場面を対象にした日本語学習者の分析も必要があると考えられる。

以上の内容を踏まえた上で、本研究では時間の経過と共に身上調査的内容の客観的内容から、意見、心情のような主観的内容の開示が多くなる(全 2010)を参考に、自己開示の内容の分類を行い、研究を進めて行く。

2.2.4 本研究での自己開示の定義

自己開示の定義は研究者によって少々異なるが、自分自身に関する情報の提示であることは共通している。Jourard(1971 : 6)は、「自分自身をあらわにする行為であり、他者

[10] 評価的自己開示は、感情、気持ち、感想、評価などの自己の主観的な内容を示す。

が知覚しうるように自身を示す行為」と定義している。榎本(1997:2)は、「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」と定義している。安藤(1986：97)は、「特定の他者に関して、言語を介して意図的に伝達される自分自身に関する情報」と定義している。Jourard、榎本、安藤は、「自分自身をあらわにする」、「他者が知覚しうるように」、「自分がどのような人物か」、「意図的に伝達する」のように、自分に間して相手に意図的に伝えているようにも捉えられる。しかし、本研究では、会話の中でのやり取りを見るため、自分自身について述べた情報を含む発話の意図性までは把握できないと考えられる。また会話では、必ずしも「自分がどのような人物か」を表すために自己開示をしているかまでは把握できない。よって、Jourard、深田、安藤の定義は開示の動機や意図性が設定できる質問紙調査に適していると考えられる。

また、Cozy(1973：73)は、「人物 A が人物 B に、自分自身に関する情報を言語を介して伝達すること」と定義している。しかし本研究では、初対面場面を対象にしており、会話の相手が決められているため、全(2010b：126)の定義に従い、**「相手に言語を介して、自己の情報を与えること」**と定義する。

全(2010b)は、自己開示の研究を実際の会話から捉えている。「自己開示」の「自己」に該当するものが何であるか、「自己開示」の研究にあたり重要な手掛かりになるため、具体的な例が必要とされる。従って、自己開示の会話データを対象にした研究(全 2010b)を参考に「自己」を次のように捉える。①自分自身に関すること②自分と関連している者に関すること③所属の一員としての自分のことである。以上の「自己」の範囲を基に自己開示の出現数をカウントする。実際の会話では、1 人の発話者が発話時に 1 回のみ開示をする場合もあるが、複数回開示が現れる可能性もあるため、出現ごとに区切り全てを計算する。以下の例文は、上記の自己の定義を示すものである。例文、「/」は開示ごとに区切った分割線である。例文は、本研究の会話データから抜粋した。

①自分自身に関すること

例）私は、「大学名」大学からきました/交換留学生です[11]。

例①のように、自分に関する情報を全て自己開示とみなす。身上調査的内容がその例になる。すなわち、自己紹介で話す内容や、自分自身に関する情報がこれに該当する。さらに、以下の例②のように自分と関連している者と関係することも含まれる。例②は、ある人物の研究室の人について自己開示をしている例である。

②自分と関連している者に関すること

例）うちの親は私に対して厳しくて

また、例③のように、自分が所属している一人として、自分のことやその所属に関わることも含まれる。例③は、所属している部活の特徴を開示して、自分自身がその所属の人としてどのようにしているか開示をしている例である。

③所属の一員としての自分のこと

例）うちの部活って結構厳しくて、私も挑戦精神もってやってます。

例②と③は、類似しているように見られるが、例②は自分と関係している人、つまり家族や友人などを示し、③所属の一員は社会の中での自分について述べることを示す。上記の 3 分類は、それぞれに当たる自己開示を分類するのではなく、「自己」の範囲を示すものである。

上記の例のように、自分自身の経験に直接言及すること、自分自身に関すること、自

[11] 私は、「「大学名」大学からきました/交換留学生です。」の発話から、どこの大学から来たかと今交換留学生をしている。という 2 つの情報が出現している。よって自己開示が 2 回出現したとカウントした。

己の主観的な内容である感情や考えなど自分と関連した発言が自己開示に相当するのであり、「夜は暗い」「夏は暑い」などの外的な事柄や、第三者的に伝える話、例えば、自分自身が聞いて見たことでも、ニュースの話や、「今週学会があるようです」のような伝達の発話は自己開示に含まれない。以上の定義と判断基準から、自己開示の発話をカウントした。

「自己開示」の言語行動は、具体的な例から自己開示を測定するより、ある話題について自己開示をするか、その自己開示をどのような人物、つまり、家族、友人あるいは初対面の人などに開示するかを基準に見ることが多い。大学生の初対面の間柄の話題に多く現れる(三牧 1999)「授業」については、同じ話題であっても、客観的内容[12]の自己開示、例えば、「月曜日に授業がある」と主観的自己開示[13]、例えば、「その授業は、難しくてあまり聞きたくない」に分けることができる。このように、同じ話題に関する自己開示でも、内容によっては主観的な自己開示にも客観的なそれにもなり得る。よって、質問紙ではなく会話から自己開示を捉える重要さが見えてくる。また、一般的に文化によってあまり好まれない話題を用いて自己開示をすることは望ましくない自己開示になる。そして、友人や家族には共有される悩みや、深刻な話の自己開示であっても、初対面の人とは共有できる範囲が異なることが予想される。その時、話題としては初対面の間柄で適切だとしても、その内容によって不適切な自己開示になる可能性がある。

以上のことから、本研究では、会話に現れる実際の自己開示を中心に研究を進める。

2.3　初対面接触場面の研究

接触場面とは、外国語話者と母語話者とのコミュニケーション場面である(ネウストプニー1982)。一般に、外国語話者と母語話者の相互交渉と母語話者同士の相互交渉とでは、

---

[12] 3.2.1 節と 4.2 節で詳しく説明する。

[13] 3.2.1 節と 4.2 節で詳しく説明する。

その過程が異なっているといわれている。つまり、初対面における接触場面で自己開示をする際は、母語話者同士の場面とは異なった配慮をしているのではないかと考えられる。日本語学習者を対象にした初対面の接触場面の研究には、接触場面における学習者のストラテジー、スピーチスタイルシフト、話題選択など、特定の現象に焦点を当てた研究が多くなされてきた(佐々木 1998、三牧 1999、申 2007、全 2009、田所 2013)。その中で自己開示と密接な関係がある話題選択の研究には、佐々木(1998)、三牧(1999)、全(2009)がある。

佐々木(1998)は、初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話を発話全体、時間の経過、話題転換から観察している。日本人が日本人に対する時と、アメリカ人、中国人に対する時の場面の差を比較している。その結果、異文化の人との場合に比べ同文化の人と会話する場合の方が話題も長く続きやすく、話題を探すのも早いということが明らかになった。

三牧(1999)は、初対面会話における話題選択の方法を明らかにしている。具体的には、話題選択のスキーマの存在が確認され、また話題選択ストラテジーとして 6 種類を認定し、話者は意識的に話題を選択することが示唆された。また、話題選択は、日本語学習者には非常に難しい課題であり、各文化及び接触場面における話題選択研究が重要であることも示唆された。

全(2009)は、初対面における韓国人日本語学習者と日本語母語話者の 16 会話を分析対象とし、話題開示の傾向をポライトネスの観点から比較した。プライバシーに関する話題は相手に近づき距離を縮める働きがあると捉えることができるが、この比較からは日本語母語話者は留学生に対して主に生活や学校生活について聞くことで相手に配慮と興味を示していることが分かった。

田所(2013)は、初対面の会話で日本人と日本語学習者の相違点を明らかにするのではなく、両者が実際の会話において何を難しいと考えているのかを調査している。調査の結果としては、日本語母語話者も日本語学習者も話題選択を選んだ。

岡崎(2003)は、接触場面を言語・文化の異なるそれぞれの参加者が自己のリソースを活用しながら、ともに存続を図って行く共生の場として捉えている。

Neustupny(1985)は、会話参加者は無数ともいえる規範のすべてを常に使用しているわけではなく、そのうちのいくつかを選択して、それぞれの場面の基底規範[14]を形成していると指摘している。そして、会話参加者は場面に適していると思われるような規範を取り出して基底規範を構築している。

日本語使用の接触場面における言語規範[15]について Neustupny(2005)では、以下の 6 項目を挙げている。

①母語規範：言語使用者の母語に関する言語規範を示す。接触場面では、相手の言語を使用していても、母語の規範を用いて使用する場合も見られる。

②相手規範：日本語学習者の立場から、相手の国の規範を示す。

③接触規範：接触場面に参加している参加者のどちらの規範でもない場合を示す。

④二重規範：学習者の母語規範及び相手の日本語規範両方を示す。

⑤共通規範：参加者の持っている規範が共通している規範を示す。

⑥普遍規範：参加者のどちらかの言語に依存するものではなく、言語に普遍的に存在する規範を示す。

加藤(2006)では、以上の言語規範に関する事例を次のようにまとめている。

「母語規範」は、英語教育学を専攻している日本人大学院生は英語に慣れていて、オーストラリア人の指導教員とも英語でやりとりをする。しかし、指導教員を呼ぶ時、ファーストネームを使うことに抵抗感があって、日本風にして「センセー」を付けようとす

---

[14] 加藤(2006)は、Neustupny(1985)の基底規範について以下のようにまとめている。1 人の人間がもっている規範は膨大であり、それぞれの規範は、ある場面では活性化され、別の場面では活性化されないということが起きる。初めての相手と接触場面で話時、最初は言語的規範を正確に使用しようと常に規範を活性化させているが、相手や場面になれてくれば多少ブロークンでも全く気にしないようになる。

[15] 規範は認識の受けとる 1 つの社会的性格であり、我々が社会的な関係で規定されながらもさらに社会的な関係を発展させるために作り出す、意志の 1 つの形態である(加藤 2010)。

る。

「相手規範」は、敬語体系がない国の外国人が敬語を使わないサービス業の日本人に対して厳しく批判する場合があり、このことは日本語の相手規範が働いたといえる。

「接触規範」は、日本人の規範でもなく、相手の規範でもなく、接触場面から生じる新たな規範に基づいて行うことを指す。例えば学習者は、「私たちはどうせ日本人ではないので花見の後に 2 次会のカラオケに行かなくてもいいのでは」、日本人の立場から「外国人なのに思ったよりも日本人とあまり変わらないと」のようにどちらの規範でもないことである。ここでは接触場面から生じる新たな規範に基づいて参加者の評価が行われる。

「二重規範」は、両方の規範を同時に適用する。日本人とオーストラリア人のパーティー場面で握手とお辞儀を一緒に交わすような例である。

「共通規範」は、学習者と母語話者に共通した部分は少ないながらも存在する。国によって依頼や、勧誘の言語行動はポライトネスのシステムが異なるが、好まれる傾向が類似する国もあることを挙げている。

「普遍規範」は、自然言語なら普遍的に存在する規範であり、日本語に関してはあいづちを含む話順番取りのメカニズム、依頼などの言語行動におけるポライトネスのシステムなどの事例を挙げている。

このように、接触場面では、母語場面とは異なる規範が働く。そして、本研究でも接触場面を分析しているので、対話者によって変化する発話を捉えるため、Neustupny (2005)の挙げた言語規範の分類は重要な手掛かりになる。

2.4　話題に関する研究

田所(2013)は、日本語母語話者と非母語話者を対象に質問紙調査を行ったところ、会話中最も難しいと彼らが考えたのは話題選択であったことを指摘している。話題を選択

することは学習者のみならず母語話者にとっても難しい項目と考えられる。初対面を対象にした話題研究は母語話者同士の研究(メイナード 1993、宇佐美・前田 1995、中井 2003a)や文化差(中井 2004、奥山 2005、楊 2007)を持つ人同士の研究など多くなされてきた。韓国人を対象にした研究では、話題の導入、提示、転換の仕方やどのような話題を選択するか回避するかのストラテジーの研究を中心になされている。

全(2009)は、日本と韓国の初対面場面における話題回避に関する意識調査を行い、共通点と相違点を調べた。その結果、取り上げる項目に関する意見や初対面場面、初対面の相手に関する意識において、日韓両者に類似性があることを明らかにしている。他方で初対面会話の配慮の仕方、プライバシーに関わる話題とその取り上げ方に日韓の意識の相違があることを指摘している。

奥山(2004)は、日本と韓国の男性と女性の大学生を対象に、初対面での話題選択の内容とその時間配分に関する質問紙調査を行った。日韓の初対面会話における話題選択の相違点は、日本語母語話者は「話題として選択しない」項目が非常に多いことを指摘している。また、話題を選択したとしても、韓国人側より会話の後半の時間帯に選択している場合が多いことが特徴的であるとも述べている。特に「意見・態度の表明」「宗教などに関する自己開示と質問」「歴史問題に関する話題」において、その特徴が顕著であると述べている。

熊谷・石井(2005)は、日本人と韓国人を対象に会話の話題選択に関する意識調査と面接調査を行った。その結果、日韓どちらにも見られた話題選択の方法に大きく 2 点①話題を盛り上げ、展開させていくこと②相手の私的部分に立ち入りすぎないことがあると指摘している。

話題は 1 つの発話から成り立つものではなく、複数の発話が集まり 1 つのまとまりになる。自己開示は、1 つの発話で完結するものでもあるが、類似している内容を 2 者間でやり取りをすることで大きなまとまりが話題になる。よって、何を話題にするかは自己開示と密接な関係があると考えられる。話題選択、回避には日韓の間に差があり、自

己開示を行う際どのような内容で開示するかと関連していることが分かる。

2.5　本研究の位置づけ

本研究では、実際の会話を収集し「自己開示」の発話を中心に分析を行う。従来の研究は、実際の会話であっても言語間の比較にとどまっていたが、本研究では接触場面も取り入れ、母語場面との差を比較する。

自己開示の研究は、大きく質問紙による研究と実際の会話データを対象にした研究に分けられる。しかし、質問紙による研究はあらかじめ開示する項目を定めており、実際の会話とは異なる。よって、実際の会話でも質問紙調査で回答したように行われるかは疑問であるため、本研究では実際の会話データを対象に分析する。

また、自己開示の開示量、開示傾向、動機など文化の差に焦点を当てた研究が多くなされてきたが、自己開示を言語行動と捉え、言語面から調査を行うことも必要と考えらえる。どのような内容で、どのようなことばを使い自己開示をしているのかを分析することで、より人間関係の構築のプロセスやコミュニケーションスタイルの相違を明らかにできると考えられる。従って、自己開示の内容に現れる言語面にも注目する。

そして、初対面の会話において日本語学習者には様々な困難があるが、これについて従来の研究では特定の現象から類似点や相違点を見出しており、データが断片的に扱われている。自己開示と密接な関係がある話題の先行研究から日本語学習者が初対面の会話において、何を困難と考えるかを明らかにした点は高く評価できるが、本研究では実際の会話でどのようなことを意識して相互行為が行われているか、発話に現れる内容全体を焦点にして更に詳しく考察する。

Barnlund(1975)は、同じ話題でも、どれだけ私的な考えや情報を述べ、どの程度の自己開示を行うことを適切と考えるかは、文化によって異なりうるという。つまり、自己開示をする話題だけではなく、話す量やその内容の深さを見ることが欠かせないことだ

と考えられる。そして、自己開示は一方的に発話するものではなく、相手とのやり取りによって行うものであるため、自己開示の受け止め方によって次の自己開示にも影響することが推察される。また、数や内容だけではなく、自己開示が会話の中でどのように会話を成り立たせているか、話題導入をする際、そこにどのようなパターンがあるのかなど談話全体を視野に入れる必要もある。

相手との文化の差による誤解を起こさないためには、自文化との相違点や類似点を明らかにすることが重要である。日本人同士と異文化の関係同士では要因間の関係が異なる可能性があり、親密な対人関係形成において考え方のズレが生じ、接触場面で誤解が生まれる可能性が考えられる。そのため、文化差を検討する必要があると考えられる。「文化の分析は言語の分析を手掛かりにする(井出 1998：65)」ことから、異文化間の会話及び母語話者同士の会話を研究することは、有意義だと考えられる。

本論文では、自己開示がどの程度出現するか、数とその内容と表現の特徴(4 章)、自己開示は状況によって出現して、その出現量は変わるか(5 章)、自己開示後の受け手の発話(6 章)、そして、自己開示は話題導入時と展開の時どのような機能が働いているのか、談話全体から話題別に区切って自己開示のパターンについて分析する(7 章)。

第 3 章　本研究のデータと研究方法

韓国人日本語学習者と日本語母語話者の会話から自己開示の発話を分析するため、本研究では会話を収集した。3.1 節では、会話協力者の属性、会話収集の手続き、会話資料の概要と文字化の方法について述べる。3.2 節では、自己開示の認定基準と開示状況の認定法を示す。なお、自己開示の内容の分類は第 4 章、自己開示後の受け手の発話の分類については第 6 章で説明する。

3.1　資料収集の方法

本研究では初対面の会話場面を収録し、母語場面及び接触場面における自己開示の発話を分析対象とした。母語場面と接触場面を比較するため、1 人当たり 2 回、会話録音に参加してもらった。1 人の話者が母語場面の時と接触場面の時にどのような変化があるのか考察するため、日本語母語話者(J)2 名と韓国人日本語学習者(KJ)2 名、合計 4 人を 1 つの構成とした。具体的には、日本語母語話者対日本語母語話者(4 組)、韓国人日本語学習者対韓国人日本語学習者(4 組)、接触場面(8 組)、合計(16 組)である。

3.1.1 会話データの協力者の属性

日本語母語話者の平均年齢は 24 才、韓国人日本語学習者の平均年齢は 26 才である。韓国人日本語学習者の日本滞在歴平均は 4 年で、上級者を対象とした。その理由としては、日本語の誤りで会話の流れに支障を起こさないためである。自己開示は、相手が異性か同性かで影響を受ける可能性があるため、全て女性を対象とした。表 3-1 は日本語母語話者の会話参加者属性と会話の組み合わせであり、表 3-2 は韓国語母語話者の会話協力者属性と会話の組み合わせである。表 3-3 は、日本語接触場面での会話の組み合わせである。

表 3-1　日本語母語話者の属性と会話の組み合わせ

資料番号	参加者記号	性別	年齢	学年
日本語母語場面①	J1	女	25	大学院
	J2	女	20	3 年
日本語母語場面②	J3	女	28	大学院
	J4	女	23	大学院
日本語母語場面③	J5	女	21	4 年
	J6	女	26	大学院
日本語母語場面④	J7	女	25	大学院
	J8	女	21	4 年

表 3-2　韓国人日本語学習者の属性と会話の組み合わせ

資料番号	参加者記号	性別	年齢	学年	日本滞在歴
韓国語母語場面①	KJ1	女	21	3 年	1 年
	KJ2	女	22	大学院	4 年
韓国語母語場面②	KJ3	女	24	大学院	4 年
	KJ4	女	27	大学院	5 年
韓国語母語場面③	KJ5	女	33	大学院	7 年
	KJ6	女	21	4 年	4 年
韓国語母語場面④	KJ7	女	28	大学院	3 年
	KJ8	女	33	大学院	6 年

表 3-3　日本語接触場面の組み合わせ

資料番号	参加者記号	資料番号	参加者記号
日本語接触場面①	KJ1	日本語接触場面⑤	KJ5
	J1		J5
日本語接触場面②	KJ2	日本語接触場面⑥	KJ6
	J2		J6
日本語接触場面③	KJ3	日本語接触場面⑦	KJ7
	J3		J7
日本語接触場面④	KJ4	日本語接触場面⑧	KJ8
	J4		J8

3.1.2 会話データの調査手順と実施日

調査は、2015 年 5 月に会話録音室で行った。会話録音室は、屋内の静かな会話録音室で実施した。話題は自由で、会話は 1 組当たり合計 20 分行った。会話の録音時に Ic レコーダー2 台を用意し録音した。会話収録の前に、協力者に今後も付き合いがあることを前提に会話をしてもらうよう指示した。会話開始 20 分後に筆者が会話時間の終了を知らせ、終了とした。最後に、会話終了後、会話収集の目的には言及せず、会話後感じたことについて簡単な記述式質問紙調査[16]を行った。

表 3-4 は、会話データの収録実施日である。収録は 2015 年 5 月に行われたものである。

[16] 添付資料 p.152 参照

表 3-4　会話収録実施日

構成	場面	実施日
J1,J2	日本語場面　1	2015 年 5 月 11 日
KJ1,KJ2	韓国語場面　1	2015 年 5 月 12 日
J1,KJ1	接触場面　1	2015 年 5 月 13 日
J2,KJ2	接触場面　2	2015 年 5 月 13 日
J3,J4	日本語場面　2	2015 年 5 月 14 日
KJ3,KJ4	韓国語場面　2	2015 年 5 月 14 日
J3,KJ3	接触場面　3	2015 年 5 月 15 日
J4,KJ4	接触場面　4	2015 年 5 月 15 日
J5,J6	日本語場面　3	2015 年 5 月 18 日
KJ5,KJ6	韓国語場面　3	2015 年 5 月 19 日
J5,KJ5	接触場面　5	2015 年 5 月 20 日
J6,KJ6	接触場面　6	2015 年 5 月 21 日
J7,J8	日本語場面　4	2015 年 5 月 25 日
KJ7,KJ8	韓国語場面　4	2015 年 5 月 26 日
J7,KJ7	接触場面　7	2015 年 5 月 27 日
J8,KJ8	接触場面　8	2015 年 5 月 27 日

3.1.3 会話データの内容

会話の流れを概観するため、会話データ 16 組の大まかな会話内容を以下にまとめる。

3.1.3.1 韓国語母語場面会話

韓国語母語場面①　KJ1 KJ2

自己紹介をした後、すぐに共通の知人について話が始まる。そして、今の生活につい

て互いに語りあう。専攻の話になって、異なる時期に 2 人とも受講したことがある授業の話をする。そして、KJ2 が今の専攻に至るまでの人生について語る。最後に、KJ2 の話と関連する韓国の運動選手について語り合い、日本人との関わり方について考えを話し合う。

韓国語母語場面②　KJ3 KJ4

名前について話が始まり、KJ3 の名前が韓国の歌手と同じであることから互いに好きな歌手について話す。その後、互いに好きなアイドルについて話し合って、時代ごとに好きだった歌手や好きになった経緯を語りあう。それから、共通の知人の話に移す。共通の知人の話から、現在所属している専攻の話になり、卒業の苦しさを互いに話して、卒業条件の話と専攻からの支援金について話し合う。

韓国語母語場面③　KJ5 KJ6

学年と専攻を言い合って、どのような経緯で留学したか互いに話す。その後、どのように生活をしているか、学校生活以外の時間について互いに話し合い、KJ5 が研究の話をして卒業の難しさについて話す。その後、互いに卒業後どうするか、何をするのか、について話し合う。そして、現在両者が住んでいる場所について不便さを話し合い、KJ5 が自殺に関する話を語る。

韓国語母語場面④　KJ7 KJ8

名前を言い合ってから、専攻の話しになる。どのような研究をしているか、共通知人がいるか話をする。その後、指導教員の話になり、研究のトレンドや書き方について話し合う。そして、日本の生活の話、地震の経験談について互いに話して、どのように乗り越えたか互いの考えを語り合う。

3.1.3.2 日本語母語場面会話

日本語母語場面①　J1 J2

名前、所属について自己紹介をした後、住まいの話になり、学校の寮について話し合う。その後、J2 の専攻と部活について語る。J1 が J2 の部活について興味を抱き、情報を交換する。部活の話が終わり、J1 と J2 は互いの専攻について話し合い、どのような生活をしているか共有する。

日本語母語場面②　J3 J4

名前と所属の話で自己紹介をして、互いの研究室の人数、雰囲気を話す。そして、研究している内容と方法について互いに語る。研究していて何が難しいか、話し合う。最後に、どのように生活をしているか、学校に行く方法や研究室の使い方について互いに話し合う。

日本語母語場面③　J5 J6

名前と所属を言い合って専攻の話になると互いに同じ場所に留学をしたことに気づく。その後、留学先の場所について互いの経験談を話す。その後、留学先の国の人について互いに話す。そして、その留学先の政策について話が進む。

日本語母語場面④　J7 J8

名前と所属を互いに言い、互いに専攻を決めた理由を話し合う。その後、出身地の話しになる。一人暮らしの良さと、悪さに対するエピソードを語り合う。その後、将来どのようなことをしたいか J8 は、先輩から聞いた話をして、J7 は友達から聞いた話をして、互いに語り合う。

3.1.3.3 日本語接触場面会話

日本語接触場面①　KJ1 J1

互いに自己紹介をした後、J1 が KJ1 に対して日本での生活について聞き、なぜ日本に来たか、どのように日本語を勉強したか KJ1 が話をする。その後、J1 の生活と留学経験の話をする。次に、KJ1 の日本生活と試験に関する話が続く。最後に、韓国の食べ物の話になり、互いに語り合う。

日本語接触場面②　KJ2 J2

まず名前などの基本的な情報を交換する。次に、KJ2 がどのように日本語を学んだかの話になる。日本語の話が終わると、KJ2 と J2 が互いに専攻について語り合う。KJ2 と J2 は、食べ物について話し始め、どのようなお店に行ってみたか、情報共有をする。その後、KJ2 が今の専攻を選んだ理由を語る。また、どのように英語を学んできたか、＜運動のくだり＞について、話す。

日本語接触場面③　KJ3 J3

名前について話しているうちに、KJ3 がなんと呼ばれたいか話が始まり、なぜそう思うのか語る。そして、韓国ではどのように名前を呼ぶかについて話す。そこから、KJ3 が研究室にも同じ名前の人が多いことを話し、互いに研究室の人や研究について話し合う。

日本語接触場面④　KJ4 J4

名前に関する漢字について話し合う。そして住所や通学法について互いに話し合う。出身地の話が出て方言について話す。次に、専攻について話し合い、KJ4 が日本に来たきっかけと、J4 が留学した話をして、両者が行ったことがあるヨーロッパについて話す。

その後、互いの研究について話し合い、どのような研究をしているか互いに語る。

日本語接触場面⑤　KJ5 J5

名前と所属について話して、住んでいるところについて互いに話す。J5 の出身地について話が出て、どのようなところか話す。続いて、KJ5 が現在住んでいるところについて何が不便か、どのような人が住んでいるか話す。その後、韓国男性について話し合う。次に研究の話になって互いの研究を紹介する。そして、好きな食べ物について話をする。韓国語について話が出てから KJ5 は研究の話をして、続いて J5 が就職活動について話す。

日本語接触場面⑥　KJ6 J6

名前と所属について話した後、KJ6 がなぜ留学に来たか、留学したきっかけと方法について話す。そして、J6 が留学の経験について話す。その後、日本語と J6 の留学先の言語について互いに話し合う。留学の話から、留学先の食べ物と韓国の食べ物について何が好きか、どのような食べ物があるか話し合う。その後、J6 が韓国に留学した友達の話をして、韓国の就職の難しさと KJ6 の将来について話す。

日本語接触場面⑦　KJ7 J7

名前と所属、学年を聞いた後、論文についてどのように書いた内容について話し合う。その後、指導教員の話と学会について情報交換をする。KJ7 が指導教員とのやり取りに関する苦悩を話し、J7 もどのようなところが難しいか話をする。

日本語接触場面⑧　KJ8 J8

名前について互いに言い、発音の難しさと漢字の難しさについて話し合う。住まいについて話した後、生活習慣が悪くなる環境にいる、などと互いに悩みを話し合う。その

後、よく行くところや、何を食べに行くかなど、普段の生活の話をする。その後、J8 のバイト先の話になり、バイト先で売っている飲み物について話し合い、どのようなところに旅行をしたか話す。その後、J8 が日本に来たきっかけを話し、バイト先であった体験談を話す。

3.1.4 文字化

収録した会話は、全て文字化した。文字化には、宇佐美(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System For Japanese、BTSJ)」を用いた。たとえば本研究で扱った発話内容の記述に関する記号と例文は、表 3-5 の通りである。

「発話文」の定義は、会話という相互作用の中における「文」とする。そして、以下のように認定する。基本的に、ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるものを「1 発話文」とする。しかし、自然会話では、いわゆる「1 語文」や、述部が省略されているもの、あるいは、最後まで言い切られない「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。そのような場合は、話者交替や間などを考慮した上で 「1 発話文」であるか否かを判断する。つまり、「発話文」の認定には、「話者交替」、「間」という 2 つの要素が重要になる(宇佐美 2007)。

表 3-5　文字化の記号

記号	内容
。	［全角］1 発話文の終わりにつける。 例)研究室の人たちと仲がいいです。
,,	発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、その後改行して相手の発話を入力する。 例)難しいですね。覚えることが多いので,,

	でも、ハングルを覚えられれば、たぶん覚えられますよ。
、	①［全角］1 発話文および 1 ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。 例)うちの部活って結構厳しくて、私も挑戦精神もってやってます。
?	疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?、」をつける。 例)どこですか?、
??	確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。 例)無意識中にこの人が私のことをよく考えてくれる??
[↑][→][↓]	イントネーションは、特記する必要のあるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いる。 例)あ[→]へえ[→]
/少し間/	話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。 /沈黙 秒数/1 秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は 1 発話文として扱い 1 ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。 例)やってなくて…今/少し間/つうか学部にいた時もやってなかったんです

= =	改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2 つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。 例)無意識中にこの人が＝＝,,私のことをよく考えてくれる
< >{< >{>}	同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に{< >、{>}をつける。 例)全然ああいう見せるなんか綺麗なスポーツとかなんか＜やったことないんで>{< >、{>}
< >	笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に記入する。笑い自体が何かの返答になっているような場合は 1 発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。 例)試験の時だけ勉強して＜笑い、、＞
…	文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。 例)あんまり固くならないように毎日…
「 」	トランスクリプトを示すにあたり、固有名詞など、被験者のプライバシー保護のために明記できない単語を表すときに用いる。 例)「大学名」大学からきました交換留学生です。

3.2　自己開示の発話分析における認定基準

本研究では会話データを基に分析しているため、会話の特徴を考慮しつつ自己開示の集計の基準を示す。3.2.1 では、自己開示の単位認定基準、3.2.2 では、自発的自己開示の相手からの質問による自己開示の認定基準を示す。

3.2.1 自己開示の単位認定基準

自己開示の認定基準は、全(2010b)を参考に出現数を以下のようにカウントする。自己開示は、1 つの発話につき 1 回のみとは限らず、複数回出現する場合もある。以下の会話例は本論文で扱われたデータから取り出した一部である。

[会話例 3-1 日本語接触場面① 自己開示が 1 回のみ現れた場合]

01　J1：お名前お聞きしてもいいですか？

02　KJ1：はい。私は「名前」と申します。

1 回

会話 3-1 の例は、下線の部分が自己開示に当たり、自己開示を 1 回行ったと認定する。

[会話例 3-2 日本語接触場面① 自己開示が複数回現れた場合]

01　KJ1：私は、交換留学生で

1 回

02　J1：はいはい。

03　KJ1：「所属名」に所属しています。

2 回

04　J1：あ[→]へえ[→]

会話例 3-2 は、KJ1 の 1 つの発話に自己開示が 2 回出現した例である。このように、1 つの発話に 2 回以上自己開示が出現した場合は全てをカウントする。

次は、自己開示を内容ごとに区切った時の認定基準である。内容は、全(2010b)を参考[17]に、身上調査的内容の客観的内容(情報、事実、経験)である記述的自己開示と、意見・心情の主観的内容(感情、気持ち、評価)である評価的自己開示に分けた。会話文の例は以下の通りである。会話例 3-3 は、KJ2 と J2 の会話である。2 人は互いに学類について質問し、それぞれの質問に答えている。02 行と 05 行目で自分が所属している学類を自己開示している。このように、客観的内容の自己開示を記述的自己開示とみなす。そして、1 つの発話に複数出現する場合、先に述べたように全てカウントする。

[会話例 3-3 日本語接触場面② 内容の分類による自己開示(記述的自己開示)]

01 J2：学類はどこですか？

02 KJ2：<u>「学類名」学類です。</u>

03 J2：「学類名」学類･

04 KJ2：どこですか？

05 J2：<u>私「学類名」学類です。</u>

会話例 3-4 では、03 行目、J7 の発話の中で、下線部分が主観的自己開示に当たる。下線部分は開示している情報が自分の感情という主観的内容であるため、評価的自己開示としてみなす。このときも上と同様に、1 つの発話に複数評価的自己開示が現れる場合、開示ごとにすべてカウントする。

[17] 記述的自己開示と評価的自己開示の分類に関しては、第 4 章の 4.2 節で詳しく述べる

[会話例 3-4 日本語接触場面⑦ 内容の分類による自己開示(評価的自己開示)]

01 J7：明日発表があるんですけど,,

02 KJ7：あ[→]

→03 J7：そっちの方がもっと緊張します{<>{>}<笑い>

04 KJ7：(お忙しい)ですね。

3.2.2 自己開示の開示状況の認定基準

実際の会話は、質問紙調査が示す結果とは異なり、自発的に自己開示をする場合もあれば、相手からの質問により開示をする場合もある。自発的開示は相手からの質問によるものではなく、自ら開示をすることであり、相手からの質問による自己開示は質問により開示することを示す。自発的に自己開示をした場合と相手からの質問による自己開示の会話例である。開示状況の分析は、第 5 章で行う。

[会話例 3-5　日本語接触場面⑥ 自発的に開示をした場合]

01　KJ6：あのそこらへんはなんていうか、コンビニとか近いしバス停も歩いて 2 分ぐらいで

→02　J6：あ[伸ばす]なんかそこ便利なとこだったなって私も　**(自己開示)**

[会話例 3-6 日本語接触場面⑤ 相手から聞かれて開示した場合]

01　KJ5：卒業はいつですか？

→02　J5：あと、2 年ぐらいです。**(自己開示)**

以上の認定基準から、自己開示の発話を分析する。詳細な分析方法は、各章で述べる。本章では、会話の収集方法や会話データの概要と文字化を示した。そして、「自己開示」

の発話の単位認定基準を提示した。第 4 章からは、KJ8 名 J8 名の母語場面と接触場面の会話場面を 3.1.4 節の文字化を基に、会話に現れた「自己開示」を中心に分析する。

第 4 章　自己開示の発話量の比較と表現の特徴

4.1　はじめに

自己開示の研究は質問紙によるものが多くなされてきた。質問紙調査からは多くの人のデータが得られ、それによって多くのデータを基に一般化することができると思われる。しかし、質問紙に含まれた自己開示の内容以外の、開示される内容までは把握できないと考えられる。

そこで第 4 章では、実際の会話に見られる「自己開示」の韓国人日本語学習者と日本語母語話者の相違点及び類似点を明らかにする。そのために、初対面の場面における実際の会話データを用いて、自己開示がどれぐらい出現するのか、またその内容が客観的内容か主観的内容かによって記述的自己開示と評価的自己開示の 2 つに分類する。そして、その内容に見られる表現の特徴について分析する。

まず 4.2 節では、関連する先行研究を紹介するとともに、自己開示の内容を分類するための基準を設定する。次に 4.3 節では、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自己開示の発話出現数を示す。そして、出現した発話数の結果を比較する。続く 4.4 節では、出現した自己開示の発話を、客観的内容か主観的内容かに分け、比較分析する。また 4.5 節では、出現した自己開示の発話の内容から、表現の特徴を明らかにする。4.6 節では、会話後に行われた記述式質問紙の回答から、自己開示に関する意識の差について記述する。最後に 4.7 節では、総合的まとめを述べる。

4.2　研究の対象と範囲

全(2010b)は、韓国語母語話者と日本語母語話者を対象として、会話データを基に自己開示の内容を客観的内容か、主観的内容かで分類して両文化の差を明らかにしている。

Derlega & Chaikin(1975a)は、友人に対する深い自己開示は好まれ、見知らぬ人に対する深い自己開示は好ましくないと指摘している。このように、自己開示の内容はその適切さと関連する。自己開示の内容を分類するための方法に、浅い自己開示と深い自己開示(加藤他 2006)、客観的内容と主観的内容(Morton1978、西田 1998、奥山 2005、全 2010b)がある。初対面の間柄では、親しい間の会話と異なり、時間の経過と共に身上調査的内容の客観的内容から、意見、心情のような主観的内容の開示が多くなる(西田 1998、奥山 2005)。よって本研究では、西田(1998)、奥山(2005)を参考に、初対面場面の状況を考えて、客観性と主観性を中心に考察していく。そのために、初対面場面に適していると考えられる Morton(1978)を基に作成され、全(2010b)が修正したものを参考に分析した。全(2010b)の分類には、客観的な内容を含む情報、事実、経験などの記述的自己開示と、主観的内容を含む感情、気持ち、感想、評価などの主観的自己開示がある(全 2010b)。自己に関する情報だけではなく、自分の感情や考えを表す情報もあるため、記述的自己開示(「私は大学院生です」)と評価的自己開示(「大学の授業はとても大変です」)の 2 つの開示した次元は異なると考えられる。開示内容を 2 つの分類に分け、分析した理由としては、自己開示の出現種類より、どちらの次元の内容が出現して、開示しているか、傾向を中心に考察する方法が本研究の目的に適しているためである。また、内容の分類は、自己開示の全般的出現数ではなく、自己開示の内容の分類による差を分析する時のみ用いる。具体的内容の例は以下の通りである。

4. 2. 1 記述的自己開示

記述的自己開示は、次の 3 つのような内容のものをいう。「「学部名」学部の 4 年生です(J5 情報)」や、「あ、日本語は高校の時から母国で勉強していました。(KJ6 事実)」、「私この間行ってきました。その「大学名」大学の海外研修があって(J6 経験)」がある。

このように、記述的自己開示の内容は、客観的な自己の情報になる。しかし、「あ、日本語は高校の時から母国で勉強していました。」のような内容は、事実の表明だが、同時に母国で勉強をした経験の内容にもなる。しかし本研究では、自己開示の出現内容を分

類することが目的ではなく、自己の情報のどの範囲を開示していくかを見ることが重要な分析視点となっている。以上のことから、記述的自己開示は、自己の情報であるか、事実であっても､感情や考えが含まれていない物､そして経験のことを指すものとする。

4.2.2 評価的自己開示

評価的自己開示は「日本に来て本当によかったです。(KJ1 感情)」や「すごく好きな先生(KJ2 感情)」のような感情を開示したり、「最近テーマの悩みで大変です。(KJ4 気持ち)」、「私もすごく恥ずかしいんですけど(J4 気持ち)」のような気持ちを表す物、「ダメな精神がすごいねづいちゃって(J2 評価)」評価や、「無意識中にこの人が私のことをよく考えてくれる??なんかそういう感じがするんですよ(KJ4 感想)」のように、記述的自己開示とは異なって、自己に関する感情や、気持ちや感想など内面的な内容の情報を示す。

以上を踏まえて、本章では、初対面場面の会話データを基に、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の母語場面と接触場面における自己開示の発話と、開示内容を 2 つに分けて分析する。そして、会話終了後に実施した記述式質問紙調査[18]の回答における結果について考察する。

4.3　自己開示の発話の出現数

4.3 では､KJ と J の自己開示の出現数を接触場面と母語場面で比較する。4.3.1 では、自己開示の出現割合を示す。続いて 4.3.2 では、自己開示の出現数の結果を示す。

4.3.1 自己開示の出現割合

本研究で扱った会話データは 1 組当たり 20 分ではあるが、話すスピードは人によっ

[18] 調査に使われた質問紙は、本研究の添付資料 p.152 を参照

て異なるうえに、1 つの発話であっても長短が存在し、1 つの発話に複数の自己開示が出現する場合もあれば、全く出現しない場合もある。そのため、分析に入る前、総発話数を基に自己開示の出現数の割合を出した。

総発話数は、日本語の場合、文節で区切る。文節は、文を実際の言語としてできるだけ多く区切った最も短い一区切り(橋本 1948)である。例えば、「机の上にかばんがある。」は、次のように分けられる「机の/上に/かばんが/ある。」この例文は、4 つの文節で成り立っている。

次に韓国語の場合は、日本語の「文節」に当たる単位で数えた。語節とは「文を構成している各節。文の最小単位であり、文節の間に分ち書きがそれに相当する(標準国語大辞典 1999:4227) 筆者訳」韓国語の文を語節で分けると次のようになる。「책상／위에／가방이／있다.」(「机の/上に/かばんが/ある。」(筆者訳)。この例文は 4 つの語節に分けられている。日本語の訳は、上記の日本語の例文と同様の内容である。このように、日本語の文節と韓国語の語節の分け方は非常に類似しており、総発話数を区切る方法として最も適していると考えられる。なお語節と文節は、総発話数を数える時のみ用いて自己開示の発話を数える単位ではない。

表 4-1 は、KJ と J の自己開示の発話出現数を各会話協力者の母語場面と接触場面を合わせた総発話数から見た割合と、出現数を示した結果である。

表 4-1　KJ と J の自己開示数と割合

	自己開示数	総発話数
KJ	1106(9.8%)	11248(語節)
J	813 (7.8%)	10376(文節)

韓国人日本語学習者の結果は、総発話数 11248 回のうち、自己開示の出現数は合計 1106 回、1 人当たり平均 138 回自己開示をしているということであった。割合から見た

全般的自己開示は、9.8%であった。次に、日本語母語話者の総発話数は、10376 回のうち、自己開示の数は合計 813 回、1 人当たり平均 101 回である。韓国人日本語学習者の自己開示の出現数は日本語母語話者より約 1.3 倍多い結果であった。また、日本語母語話者の自己開示の平均割合は 7.8%であり、韓国人日本語学習者が日本語母語話者より約 2 ポイント上回る結果である。

自己開示の出現数は、筆者と韓国語母語話者 2 名、日本語母語話者 2 名に協力してもらって判定した。4 人には、認定基準と例文を提示し、分析法を説明した後、文字化したスクリプトと音声を渡して「自己開示」の発話を判断してもらった。手順は、自己開示の発話を判定させた後、判断された自己開示が記述的自己開示になるか、評価的自己開示になるか分類させる、というものであった。判断の結果、日本語のデータの場合一致率[19]が 90%、韓国語のデータの場合 93%であった。判断が一致しない部分においては、筆者と協力者の間で意見交換をして決めた。

4.3.2 場面別出現数の比較

本節では、KJ と J の自己開示の出現数を接触場面と母語場面で比較する。図 4-1 に、接触場面と母語場面を分けた結果を示す。その結果から、比較考察を行う。

[19] 一致率=一致数/(一致数＋不一致数)x100

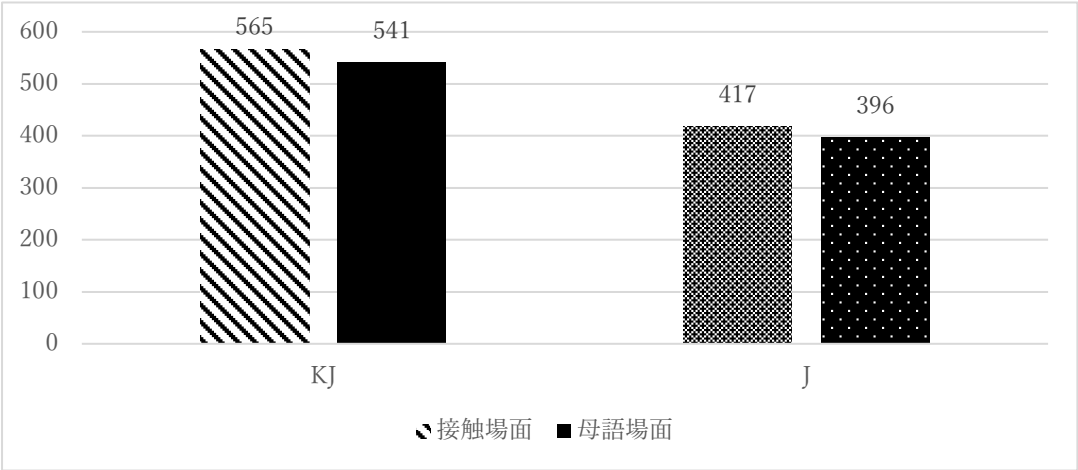


図 4-1　KJ と J の自己開示の場面別の出現数

接触場面と母語場面の差を見るために、KJ の接触場面と母語場面の対応のある t 検定[20]を行ったところ、有意傾向が見られ、母語場面より接触場面でより開示された($t(7)=2.12, p<.10$)。同じく、J の接触場面と母語場面の対応のある t 検定を行ったところ、有意傾差が見られ接触場面で母語場面より開示した($t(7)=2.85, p<.05$)。KJ、J 両方とも、母語場面より接触場面で自己開示が多く現れ、異国の相手に開示しやすい傾向がある。しかし横田(1991)は、留学生は留学生に、日本人は日本人に対してすべての開示項目が多く現れたと指摘している。横田(1991)は本研究と異なり質問紙調査による結果を踏まえた研究であり、また留学生の出身国が不一致であったためだと考えられる。自己開示の発話は、同国の相手に比べ互いに共通する情報を持たないため、異国の相手に対してより自らを開示して、情報を交換し合う傾向があると考えられる。また、自己開示は「1つの情報と発話」ではなく、ある話題とその一部と考えられる。三牧(1999)は、話題選択は日本語学習者には非常に難しい課題であると指摘している。しかし、話題を選択し、その内容に沿って自己開示をするのは日本語学習者だけの困難ではないと考えられる。

[20] 本章では、項目の使用順と項目ごとの関係ではなく、各項目の KJ と J の平均の差から論じるため、それぞれの項目に関する t 検定を行った。

佐々木(1998)は、異文化の人と会話する時より、同文化の人との時の方が、話題を探すのも早く、話題の存続も長く続いたと指摘している。よって、接触場面では共通する話題を探すため情報交換が増えたため、それと伴って自己開示も多く現れたと考えられる。

4.4　内容の分類による自己開示の発話出現数

4.4.1 では、KJ の接触場面における記述的自己開示と評価的自己開示、母語場面における記述的自己開示と評価的自己開示、J の接触場面における記述的自己開示と評価的自己開示、母語場面における記述的自己開示と評価的自己開示に分けて分析する。

続いて 4.4.2 では、KJ 対 J で、接触場面における記述的自己開示と評価的自己開示、母語場面における記述的自己開示と評価的自己開示の差を分析する。

4.4.1 内容分類における KJ と J の比較

図 4-2 は、場面別に分けた KJ の結果である。そして、図 4-3 は、J の結果である。

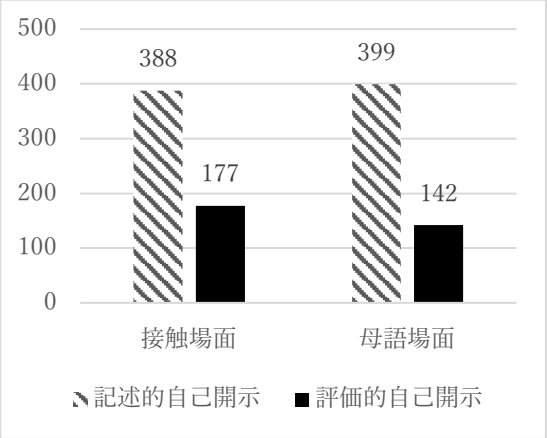


図 4-2 KJ の開示内容別出現数の比較

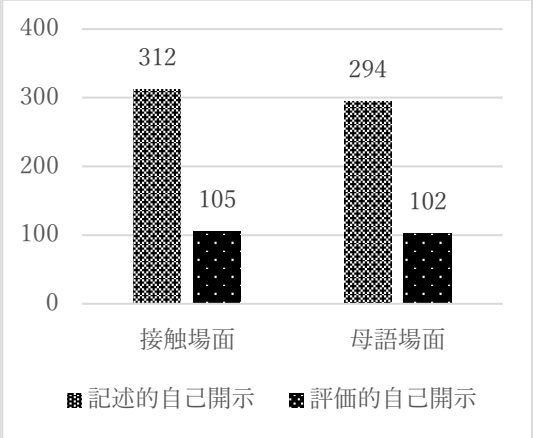


図 4-3 J の開示内容別出現数の比較

まず、接触場面における、記述的自己開示と評価的自己開示、母語場面における記述

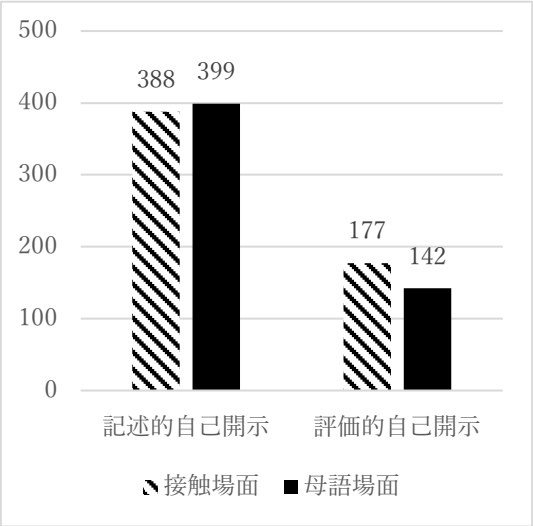
的自己開示と評価的自己開示の出現数の差を見る。KJ の接触場面の記述的自己開示と評価的自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が見られ、記述的自己開示がより多く出現する傾向であった($t(7)=3.51, p<.05$)。そして、KJ の母語場面における記述的自己開示と評価的自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が見られ記述的自己開示がより出現する傾向であった($t(7)=3.52, p<.05$)。

同じく J の接触場面における記述的自己開示と評価的自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意な差が見られ、記述的自己開示が多く現れた($t(7)=5.71, p<.01$)。母語場面における記述的自己開示と評価的自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が認められ、記述的自己開示が多く現れることが明らかになった($t(7)=3.87, p<.01$)。KJ、J どちらも、場面に関係なく記述的自己開示が多く現れていて、自己開示の内容による差は、場面に影響しないことが言える。

記述的自己開示は、自己の客観的内容であり、初対面の間柄では身上調査的内容が多く現れる(奥山 2005、全 2010b)。よって、場面の影響は受けず、評価的自己開示より記述的自己開示を使うことが考えられる。

4.4.2 内容の分類による自己開示の接触場面と母語場面の比較

KJ と J の内容の分類による記述的自己開示と評価的自己開示の出現数を場面の差から分析をする。次に、内容を 2 つに分け、出現数を場面に分けて比較する。図 4-4 は KJ の結果、図 4-5 は J の結果である。



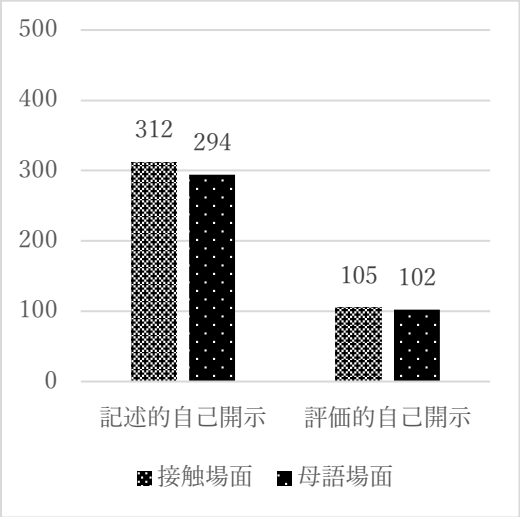


図 4-4　KJ の内容の深さから見た場面別の結果　　**図 4-5　J の内容の深さから見た場面別の結果**

まず、場面の差による統計的有意差を確認するため、KJ の接触場面と母語場面における記述的自己開示の対応のある *t* 検定を行ったところ、有意差は認められなかった($t(7)$＝-951,n.s.)。同じく KJ の接触場面と母語場面における評価的自己開示の対応のない *t* 検定を行ったところ、有意差が認められ、評価的自己開示においては母語場面より接触場面で出現する傾向があることが分かった($t(7)$＝2.55,p＜.05)。

そして、J でも同じく場面の差を見るため、接触場面と母語場面における記述的自己開示対応のある *t* 検定を行ったところ、有意な差が見られなかった($t(7)$＝-1.93,n.s.)。また、接触場面と母語場面における評価的自己開示の対応のある *t* 検定を行ったところ、有意差が認められなかった($t(7)$＝-210,n.s.)。

Derlega & Chaikin(1976)は、相手が初対面の人である場合には被験者の自己開示の深さが相手の自己開示の深さに左右されると指摘している。今回の結果からも、KJ は相手が同国の人か、異国の人かで評価的自己開示に量の差が見られた。よって、共通話題を探すため、情報量が増えた接触場面では、評価的自己開示で自己を現そうとしたことが考えられる。それに比べ、J は場面の影響がなく、相手によって記述的自己開示も評

価的自己開示も量には変化があまり見られなかった。日本人は初対面の相手とほどほどの距離を保つことによって礼儀を示そうとする(大崎 1998)。出現数からも窺えるように、J は自他の感情の働きに敏感に気を配る(中山 1989)ことから、相手に自分の感情や考えを押し付けないことを好むことが考えられる。よって、KJ は評価的自己開示に量の差が現れ、J は相手に左右されず量の変化が現れないことが考えられる。

4.5　会話実例に見られる自己開示の表現の特徴

自己開示の発話出現数及び内容の分類による出現数の結果から、初対面の間では、KJ、J ともに客観的内容である身上に関する自己の情報を多く開示することが分かった。これは先行研究の論述を裏付ける結果である(奥山 2005、全 2010b)。しかし、自己開示の数だけでは、会話に現れる具体的な特徴までは、明らかにできないと考えられる。

全(2010b)では、自己開示の内容から韓国語母語話者に見られた特徴を明らかにしている。韓国語母語話者は、心情を激しく開示していて、表現も直接的であると指摘している。本研究では、韓国人日本語学習者を対象にしているが、ここでも同様の特徴が見られ、直接的表現を好みはっきり物事をいうという特徴が見られた。他方で、先行研究から見られない特徴も見られた。例えば韓国人日本語学習者は考えを具体的に述べ自己開示をしている。よって、本節では、実際の会話例から、韓国人日本語学習者の自己開示において表現における特徴の事例を紹介する。以下、実際の会話例である。矢印(→)になっている発話が該当する例である。

4.5.1 自分の評価に対して率直な返答

下記の会話例は、自分の評価に対して率直に言い自己開示をしている会話例である。[会話例 4-1]は、趣味に関する話をしている。J2 が KJ2 の話を聞き、02 行目で体が柔らかそうという評価に対し、03 行目で率直に自分に関する自己開示をしている。次に、[会

話例 4-2]では、KJ4 が日本に来て以来、日本語が上達した話をしている。02 行目の、J4 の評価に対する KJ4 の発話からは、全(2010b)が指摘する韓国人の特徴、つまり直接的表現を好みはっきり物事を言うという特徴が接触場面でも現れた。

[会話例 4-1. 日本語接触場面② KJ の率直な返答]

01　J2：私は全然ああいう見せるなんか綺麗なスポーツとかなんか＜やったことないんで< >{< >{>}

02　KJ2：そうですね。芸術が好きで、一応バレーもしてて

03　J2：じゃあ、体めっちゃ柔らかそうですね。

→04　KJ2：はい,柔らかいです。あんまり固くならないように毎日…

[会話例 4-2. 日本語接触場面④ KJ の率直な返答]

01　J4：それは「年数」年もいたら、じゃあうまくなるのは当然ですよ

→02　KJ4：どうかな…でも、前あった友達とかと話すと上手になったねって言ってたし

次に、日本語母語話者の自己開示の会話である。相手にほめられて、自分の考えを述べているが、KJ とは異なっていて、そのほめを率直に受けるより、婉曲的に受け入れている例が見られた。[会話例 4-3]は、J6 が韓国に興味があって、韓国に関する話をして、どのような料理ができるかについて話している。そこで、01 行目 KJ6 がそれについて評価をしていて、02、04、06 行目で J が KJ のほめについて返答している。

同じく、[会話例 4-4]では、J2 が医学部であることを知って、それについて J1 が J2 をほめている。J2 は、自分に関する評価を 03 行目でほめに対して返答をしている。

このように、同じ状況ではないが、KJ と J は相手のほめに対する返答に、表現の相違が見られた。

[会話例 4-3. 日本語接触場面⑥ J のほめに対する返答]

01　KJ6：すごい。色々韓国についても知ってて料理も作れたり

→02　J6：いや、まだ韓国語も勉強中でハングルとかも

03　KJ6：うんうん

→04　J6：やっぱり定期的にちょっとずつやらないと忘れちゃうので

05　KJ6：うんうんうん

→06　J6：あんまり分からないですよ。

[会話例 4-4. 日本語母語話者⑤ J のほめに対する返答]

01　J2：はい。医学の 2 年生

02　J1：あ[→]へ[→]医学とかすごいですね

→03　J2：あまり、いや全然勉強してないです[↓]

04　J1：＜笑＞全然,,

日本語母語話者は、ほめの返答として、「打消し」や(柏木 2017)、回避(横田 1986)を使い返答をすると指摘されている。金(2012)は、日本人は韓国人よりも否定的な返答を多く使用することを報告している。また、韓国人は肯定的な返答をする比率が日本人よりも高く、また肯定の内容も積極的な「自己ほめ」をすると指摘されている。本研究でも、相手のほめに対する自己開示の表現にその特徴が見られている。

4.5.2 感情や考えの具体的な述べ方

下記の 2 つの会話は、感情や考えを具体的に述べる会話である。[会話例 4-5]では名前をどのように呼んでほしいかという話がなされており、韓国では苗字ではなく下の名前でよく呼び合うので、KJ3 は下の名前で呼ばれるのが好きだと 01 行目で自己開示をし、J3 の相手がその理由を聞く前になぜ好きなのか具体的に自分の考えを述べている。

[会話例 4-5. 日本語接触場面③　KJ の自己開示の具体性]

01　KJ3：下の名前で呼ばれるのが＜好き＞

02　J3：ふん[→]

→03　KJ3：なんかやさしそうな??そういうイメージがして,無意識中にこの人が

＝＝私のことをよく考えてくれる??なんかそういう感じがするんですよ。

次に、日本語母語話者の会話である。[会話例 4-6]は、[会話例 4-5]のように、名前について話をしている。[会話例 4-6]は、名前について説明はしているが、考えや理由を具体的に述べてはいないことが分かる。

[会話例 4-6. 日本語接触場面④ J の自己開示の具体性]

01　KJ4：「名前」ってどういう意味ですか？

→02　J4：すごく昔で、きれいな物って意味だったんですけど…

03　KJ4：あ、へ[→]

→04　J4：自分で言うの恥ずかしいんですけど…

05　KJ4：そういうの、自分で言うの恥ずかしいですよね

→06　J4：それで、内面が綺麗な子に育ってほしい、ほしいなっていう

次に、[会話例 4-7]では、将来について話をしている。KJ6 が留学を終えた後に、帰国する理由を 01 行と 03 行で述べている。最初 KJ5 が帰国後、何をするかという質問を始め、相手が質問した内容以外について、徐々に自分の考えを具体的に述べ始めている。

[会話例 4-7. 韓国語母語場面⑥ KJ の自己開示の具体性]

→01　KJ6：어차피 제가 정착 할 사회는 한국 사회이고 앞으로를 <생각해서> 한국

どうせ、定着する社会は韓国社会で、今後も考えて韓国の

02　KJ5：<음[→]음[→]>

うん[→]うん[→]

→03　KJ6：==대학원에 들어가서 연줄을 쌓아야 된다고 생각해요 개인적으로는…

大学院入ってコネを重ねていかないといけないと考えていて個人的には

金(2012)は、韓国語母語話者は、自分の意見や感想を詳しく述べ相手に伝えようとする傾向が強いことを指摘している。このように、[会話例 4-5]、[会話例 4-7]からも、自己開示をして相手に伝える様子が窺える。

4.5.3 直接的な表現の使用

下記の会話は、直接的[21]な表現を使っている例である。[会話例 4-8]は、ある授業の先生に関する話をしている。01 行目で、「すごく好きな」と直接的な表現を使い感情を表している。その次に 02 行目で KJ2 が「授業すごく下手ですよ」と自分の感情を直接的な表現を使って表している。また 03 行目 KJ1 は、KJ2 の意見に反することをきちんと伝えて自己開示をしている。

[会話例 4-8. 韓国語母語場面① KJ の直接的表現の自己開示]

→01　KJ1：그 쌤 내가 되게 좋아하는 센세

その先生私がすごく好きな先生

→02　KJ2：아 진짜요?아 진짜 좋은데 수업을 되게 못해요

あ、本当に？あ、本当にいいけど、授業すごく下手ですよ。

→03　KJ1：흠 아닌데 나는 수업 엄청 재밌게 들었는데

ふ[→]ん、そうじゃなくて、私はものすごく面白かったですよ。

04　KJ2：아 그래요? 일본어로 들으신거 아니에요? 그거?

---

[21] 本研究では、婉曲的ではないこと、物事についてはっきりいうことを直接的とする。

あ、そうですか？日本語で聞いたのではないですか? それ?

同じく、[会話例 4-9]は、KJ7 と J7 が先生に対して話している。KJ7 と J7 は、共通に知っている先生がいて、その先生がどのような人と感じるかについて自己開示をしている。KJ のように否定的な表現で感情を直接的に表す表現は J には見られない[22]。

[会話例 4-9. 日本語接触場面⑦ KJ の直接的表現の自己開示]

01　J7：え、先生誰でしたっけ

02　KJ7：「名前」先生です。

03　J7：あ、先生なんだろう授業とかあんまり受けたことなくて、分かんないんですけど、結構厳しんですか？

→04　KJ7：うん、めっちゃ怖いですよ

05　J7：あ[→]、、「名前」は結構一緒に悩んでくれる感じ

06　KJ7：うんうんうん。

任栄哲(2006：13)は、「韓国人の話し方は、日本人の目にはストレートで攻撃的にとらえられる」ことを指摘している。[会話例 4-8]、[会話例 4-9]のように、「韓国語母語話者は、ほめたり評価をする時は、直接的な表現を用いる(金 2012：11)」ことが考えられる。今回の会話から、J には自己と関係するものに対する否定的評価は見られていない。日本人学生は、他者からの評価や反応を気にして、言葉遣いを慎重に選ぶ(一二三 2010)ことと、親しい間柄ではなく、初対面場面であることが影響していると考えられる。

以上の[会話例 4-1]から[会話例 4-9]から本節では、韓国人日本語学習者に現れた特徴

[22] 今回の調査は、初対面場面を対象にしているため、親しい間柄での会話からは出現することが考えられる。

を日本語母語話者の会話と比較しつつ記述した。本節の結果は、ほめや、評価など特定の現象に焦点を当てていないため、会話の事例に限りがあり、数値的に比較はできなかったが、KJ の自己開示から、自分の評価について率直に言い、感情や考えを具体的に述べること、そして直接的な表現を使うことが見られた。大崎(1998：173)は、「日本人は感情を抑えるところに美を感じる一方、韓国人は感情を発散する奔放さに美を感じる」と述べている。また、井出・任(2004)では、韓国人同士の会話において、率直な発言は必ずしも失礼にならず、むしろ相手への積極的関心が親しみを表す表現になると指摘されている。自己開示を行うことが相手と親密になるための過程であることを前提として捉えると、井出・任(2004)の指摘通り、使われる表現にも積極的に関心を表す表現が見られたことが考えられる。

4.6　KJ と J の自己開示に関わる意識と問題

本研究では会話収録後､相手の対話者の受け手としての返答にどのような意識を持ち、どのような問題が現れるかを明らかにするため記述式質問紙[23]に回答してもらった。

4.6.1 記述式質問紙調査の目的と方法

調査の内容は、初対面に対する意識、配慮、相違点が中心になっている。質問紙は、全て日本語で質問を設けて、母語場面と接触場面の両方について回答をしてもらった。KJ、J それぞれ同じ項目を設定して回答を求めた。調査後、不明な点については追加調査として回答者に直接インタビューをした。韓国語で回答されたものは、筆者が翻訳をした。そして、本研究の趣旨と関係ない回答は除外した。

[23] 調査に使われた質問紙は、本研究の添付資料 p.152 を参照

4.6.2 回答コメントの内容

4.6.2.1 KJ の初対面に対する意識

KJ は以下の回答のように、初対面だということを強く意識する人 3 名、意識する人 2 名、計 5 人が意識をしていた。すべての回答は日本人に対してのコメントである。その中で、意識をした理由としては、プライバシーに関する話に気を付けるためや、あまり相手に深入り[24]をしないためなどの回答があった。

・*初対面であることに強く意識した(KJ4、KJ5、KJ7、KJ8)*

・*初対面であることにあまり意識しなかった(KJ1、KJ6)*

・*特に日本人と話す時、初対面だということを意識した(KJ2、KJ3)*

4.6.2.2 KJ の接触場面と母語場面における自己開示に対する回答内容

次に、自己開示に関する回答になる。自己開示に関する回答は、ほとんどのコメントから相違点について気付いていることが窺える。そして、「深い話ができない」ことに否定的な印象を抱いているコメントも見られ、特に内容に注目していることが分かる。また、同国の人と自己開示をして話すことが共感できることも多く、親密度が上がることが分かった。

・*深い話は日本人とできない(KJ1、KJ2)*

・*深い話が日本人とはできないので残念(KJ5)*

・*韓国人とは深い話、悩みが可能、日本人とは客観的話しかできなかった(KJ6)*

・*韓国人とは色々気にせずに話できる(KJ5)*

・*日本人にはプライバシーに関わる話をしないようにした(KJ7)*

---

[24] 調査後、深入りに関して詳しく聞いたところ、特に日本人にはプライバシーに関わる質問をしないように意識をしていたと回答した。

・*同じ国の人に対して自分のことを多く言えた(KJ3)*

・*日本人はあんまり自分の話をしてくれない(KJ6)*

・*日本人は自分の話より質問と聞き役をする(KJ4)*

・*韓国人とは研究や今の暮らしについて話しする時悩みについて考えを話せたけど、日本人とは、研究や興味があることなどを多く話した(KJ8)*

次に、J の回答内容をまとめる。

4.6.2.3 J の初対面に対する意識

J は、KJ に比べ初対面であることを意識してない回答者が多かった。しかし、初対面であることより、相手が異国の人で学習者であることに意識して会話をしていることが分かった。回答のコメントから「標準語を使うようにした」「難しい言葉を使わないようにした」など、初対面であるより相手が学習者であることを意識していた。

・*初対面であることを意識した(J2、J5)*

・*初対面であることを多少意識した(J1、J3)*

・*初対面であることを意識しなかった(J4、J6、J7、J8)*

4.6.2.4 J の接触場面と母語場面における自己開示に対する回答内容

次に、相違点に関するコメントである。J は KJ が気付いた点と異なっていて、内容より「自分から多く話をしてくれる」、「韓国人は話を多くする感じだった」、「多くの話ができるよう引き出してくれた」など、開示の量に注目していることが分かった。そして、自己開示より話題と関係するコメントが見られた。特に、話題に関しては、会話の流れに気を付けようとする回答があった。

・*プライバシーに関わる話について特に気を配っていない(J5)*

・*韓国人と話す時は、多くの話ができるよう引き出してくれてよかった(J4)*

・*日本人とは形式的なやり取りになった(J2)*

・*韓国人は、自分から多く話をしてくれる(J2、J3、J7、J8)*

・*韓国人と話す時、共通話題じゃない話には流れを考えて踏み込まずに、違う部分を拾って話そうとした(J1)*

・*韓国人とは、情報交換がうまくできず、自分の話を多くする感じだった(J6)*

4.6.3 KJ と J の回答における考察

会話後の回答から、KJ と J の意識に差があることが明らかになった。まず、初対面場面であることに両者は大きく異なっている回答をしていた。特に、KJ が初対面であることに強い意識を持つ理由としては、プライバシーに関わる話をしないためであることが分かった。先行研究からも多く指摘されてきたように、私的領域[25]が異なることに気づきがあったことが考えられる。本研究における調査協力者の日本滞在平均年数は 4 年であり、長年日本に滞在している間、J との会話をする機会が多かったため、回答のように気づきがあった可能性が考えられる。

自己開示に関する回答からは、KJ は自己開示の内容に関する回答が多く現れ、J は開示の量に関する回答が見られた。KJ と J の気づきから、否定的な印象を与える要因が異なる可能性が浮かび上がってきた。自己開示に関する日韓の意識の差を明らかにした全(2010b)では、プライバシーに関する概念・自己開示の許容範囲が日韓で異なることを明らかにしている。しかし、今回の調査からも窺えるように、自己開示は社会文化的規範[26]として、量、内容の深さ及び開示状況の要因も相違していることが推察される。ま

---

[25] 聞き手の私的領域とは、聞き手の欲求・願望・意志・能力・感情・感覚など個人のアイデンティティーに深く関わるものである(鈴木 1997:62)。これらは主観的なもので、本来、個人的・私的なものであるため、聞き手はこの領域に触れられると、自己のテリトリーが侵害されたと捉え、丁寧さに欠けると感じる。

[26] 学習の社会性(The sociality of learning)」という Vygotsky(1978)の概念である。社会的・歴史的な集合体の一員が持つ言語慣習の共通基盤知識を示す。

た、自己開示の内容面と心理面の関連性を明らかにした一二三(2013)では、日本人は率先して開示する時、自己開示を通して解放感や安心感のような精神的効果を高めると指摘している。今回の回答から、自ら率先して自己開示をしたか、相手に聞かれて開示したか、開示状況までは把握できないが、一二三(2013)の指摘のようにJは開示の量と、どちらが開示をしているかその仕方を敏感に感じていることが窺えた。よって、自己開示の仕方からも両者には差が見られ、否定的な印象を与える要因も異なることが明らかになった。Berger & Bradac(1982)は、人間関係の形成によるコミュニケーションの初期段階では、相手に対する不安、緊張などの不確実性を減少させようと試みるという。初対面の相手と情報を増やしつつ、不確実性[27](Berger & Bradac1982)をなくすことがコミュニケーションにおける普遍的なものだとすれば、その方法がKJとJは異なるのではないだろうか。すなわち、KJは開示量を増やすことで、Jは相手と自己開示の量を適度に保ちつつ開示していくことで不安や、緊張をなくしていくことが考えられる。

4.7　本章のまとめ

本章では、自己開示の発話と、自己開示の内容を客観的か主観的かに分けて出現した発話数から分析をした。そして、自己開示の数からは見られない内容の特徴と自己開示に関する意識の相違について明らかにした。

まず、KJ、J両方とも、母語場面より接触場面で自己開示が多く現れ、異国の相手に開示しやすい傾向があった。

次に、内容の面から自己開示の出現数を分け、記述的自己開示と評価的自己開示に分けた結果、KJ、Jとも客観的内容である記述的自己開示の方が主観的内容である評価的自己開示より多く出現していた。接触場面と母語場面での差からは、KJ、Jどちらも接

[27] Berger & Bradac(1982)により提唱された理論であり、初対面の人とコミュニケーションを行う場合、相手に確実を持てないことから不安を抱くことである。詳細は本論文の2.1節を参考。

触場面で記述的自己開示も評価的自己開示も多く出現していたが、KJ の評価的自己開示のみ接触場面と母語場面に有意差が認められた。また、表現形式においても、KJ は、自分の評価について率直に言い、感情や考えを具体的に述べ、直接的な表現を使用して、自己開示を行うことが分かった。それに対し、J は自分の感情や考えなどをあまり開示しない傾向があり、同様に表現についても直接的な言葉はあまり使わないことが見られた。

最後に、会話収録後から、初対面に関する意識の差と自己開示を行う時の相違点について気付きに差があった。KJ は、開示の内容とその深さを敏感に感じていて、一方 J は開示の仕方と開示の量に注目していることが分かった。その差から初対面の人と親密になる過程に差があることが考えられる。

自己開示は相手と自分の情報を増やしつつ親密になるため行うものであり(深田 1998)、相手の領域へ近づこうとする行為であることは KJ、J ともに共通していることが考えられる。しかし、KJ と J の相違点をわきまえず相手と自己開示を行うと、期待していたことと異なって誤解や摩擦が起こる可能性がある。

本章でも明らかになったように、KJ と J は自己開示に関する気づきの視点が異なっていて、KJ は自己開示の内容に、J は自己開示の量に注目をしていた。

初対面の間柄は、一方が過度に自己開示をすると返報性が崩壊して、問題となると指摘されている(Cozy1973)。しかしながら、本章では、自己開示の量の差は明らかにできたが、自ら開示したか、相手からの質問による自己開示か開示の状況までは把握できなかった。また、開示の総量が多い場合でも、質問によって多くなった可能性もある。従って、5 章では自己開示の開示状況を考慮し自発的に開示したか、相手からの質問によって開示をしたか、2 つの状況に分けてその量の差と返報性に注目して分析する。

第5章　自発的自己開示と相手からの質問による自己開示

5.1　はじめに

第 4 章では、自己開示の発話を量と内容から検討し、その相違点と類似点を明らかにした。しかし、出現した自己開示が自発的に行われたものか、相手からの質問によって開示かまでは把握できていない。熊野(2002)は、相手に尋ねられると自己開示への抵抗感は低くなり、自己開示をしやすくなると指摘している。また実際の会話において自発的に開示したか相手からの質問によって開示したかで開示の性質が異なる可能性も考えられる。榎本(1997)は、初対面の人との個人的な自己開示が一定のレベルを超えると、それは互いの現在の関係から予期されるものを大きく上まわり、開示者に対する不信感が生ずると指摘している。しかし、会話では聞かれて開示する場合もあり、開示状況によっては必ずしも開示者に対する不信感を生ずる状況が起こるとは仮定できないと指摘している。

西田(1998)は、自己開示は親しい関係か初対面の間柄かで内容が大きく異なり、出会って間もない段階では表面的内容である客観的内容を主に開示し、時間の経過とともに感情、意見などの主観的内容が多く現れると指摘している。知り合って間もない段階に深い自己開示は不適切とみなされ(Berger & Bradac1982)、自己開示の許容範囲を超えた場合、受け手は不信感を抱く(古屋 1987)のである。従って、初対面の者同士の間で主観的内容が多く現れると話者間で一定の距離が保てない可能性がある。

よって、第 5 章では、開示状況[28]による自己開示の総量を分析して、開示状況別による自己開示の量の差と、その量に返報性が見られるかどうかを明らかにする。5.2 節では関連する先行研究を紹介する。5.3 節では開示状況を 2 つに分け、自己開示の出現数の量を接触場面と母語場面で比較する。5.4 節では開示状況別に自己開示の内容による

[28] 本章では、自発的に開示したか、相手からの質問による開示かの 2 つの状況を示す。

差を分析する。5.5 節では 5.4 節の結果を接触場面と母語場面に分け量の差を分析する。最後に 5.6 節では、本章の総合的まとめを記述する。

5.2　研究の対象と範囲

自己開示の量と関連させて質問調査を行った先行研究には、加藤他(2006)と内藤(2011)が挙げられる。

加藤他(2006)は、自己開示の返報性[29]と感情的側面の関連性を、電子掲示板の投稿の返信に対する評価から分析している。その結果、文の形式が書き言葉か話し言葉かによって自己開示の量の返報性に差を認めている。そして、深い自己開示[30]の投稿に対しては返信における自己開示の量が増えることを示した。特に深い自己開示を含んだ投稿に対して、ポジティブに感じる傾向が見られることが明らかになった。よって、開示内容の社会的望ましさ[31]が対人魅力に影響する(中村 1990)ことから、自己開示の内容も視野に入れて検討する必要があると考えられる。

内藤(2011)は、親密さの要因としての対人魅力を自己開示及び非言語行動から分析している。その結果、自己開示の総量が多い場合、相手に同程度の開示を返報する場合に好まれることが明らかになった。そして、初対面の間では日常的開示[32]に返報性が存在し、親しい間柄では内面的話[33]に徐々に返報することが明らかになった。

会話データを分析した小川(2000)は、初対面場面における 2 者間の発話量のつりあい

---

[29] 相手が表面的な自己開示するとこちらも表面的な自己開示をし、相手が内面的な自己開示をするとこちらも内面的な自己開示をしようとすること。自己開示の内面性のレベルに応じて自分も自己開示をしようとする傾向のことを自己開示の返報性あるいは相互性と呼ぶ(榎本 1997)。

[30] 加藤他(2006：9)では、過去に経験した事実に加え、その時に感じた感情を含む自己開示を、「深い自己開示」と定義している。

[31] 社会的望ましい自己開示は、初対面の人に、内面的な深い自己開示をしないこと、自己卑下的な内容を言わないことなどを提示している。

[32] 日常生活での出来事や関心に関わる内容

[33] 対人的な問題や悩みなど自己の内面に関わる内容

と会話者が会話にもつ印象との関係について調査している。その結果、互いに同程度の開示をして、同じくらい質問をし合うと、相手に対して好印象を抱くことが明らかになった。

熊野(2002)では、自発的に自己開示をする場合は、感情的に抑えつけられずに開示し、相手から尋ねられて開示する場合は、尋ねられたという状況に合わせようという規範的な気持ちから開示すると指摘している。

上記の先行研究は、自己開示の返報性、内容の深さと対話者が感じる印象には関連があることを明らかにした点では高く評価できる。しかし、質問紙による結果は実際の会話と異なる可能性もあり、自己開示を自発的にしたか、相手からの質問によってしたか開示する状況によっても異なることが考えられる。また、一方が過度に自己開示する場合返報性が崩壊する(榎本 1997)が、実際の会話では、相手に聞かれて開示をする場合もある。また、自分に似た自己開示傾向を持つ者が好意的に評価される傾向があるという指摘もなされている(中村 1984)。従って、開示した発話量だけではなく、その開示が自発的な開示か、相手からの開示か開示状況と開示量の返報性を分析することは、自己開示の傾向の差を知る重要な手掛かりになる。

本章では、初対面会話データを基に、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自己開示の発話を自発的に開示したか、相手からの質問によって開示したか、開示状況を 2 つに分けて分析する。そして、開示状況に分けた発話内容を 2 つに分けて接触場面と母語場面で比較する。

5.3　KJ と J の開示状況出現数の接触場面と母語場面の比較

本節では、KJ と J の自己開示の発話に焦点を当てて、自己開示の発話が自発的な開示か、相手からの質問による開示かという状況別に分けて検討する。

図 5-1 は、KJ の開示状況別に分けた結果を接触場面と母語場面で示した。図 5-2 は、

J の開示状況別に分けた結果を接触場面と母語場面で示した。

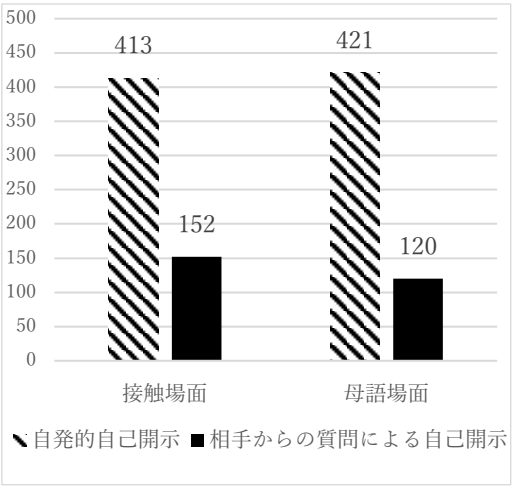


図 5-1　KJ の場面別開示状況別出現数

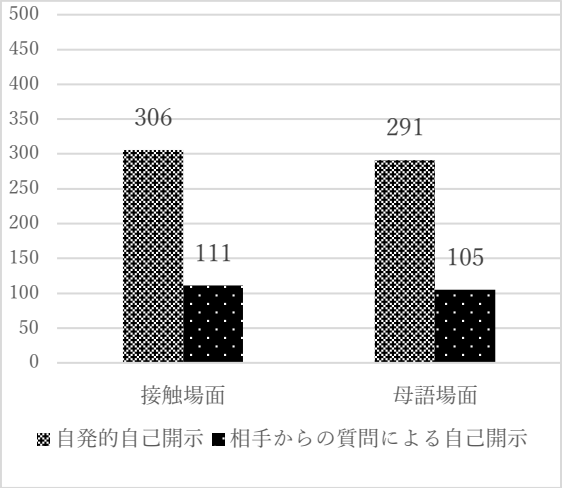


図 5-2　J の場面別開示状況別出現数

図 5-1 は、KJ の結果である。接触場面における自発的自己開示と相手からの質問による自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が見られ、自発的自己開示が多い結果が得られた($t(7)=6.11$、$p<.01$)。同じく、母語場面における、自発的自己開示と相手からの質問による自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が見られ、自発的自己開示が多い結果が得られた($t(7)=5.65$、$p<.01$)。よって、どちらの場面でも相手に聞かれて自己開示をするより、自発的に自己開示をすることが示された。

次に、図 5-2 は J の結果である。J も KJ と同じく、接触場面における自発的自己開示と相手からの質問による自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が見られ、自発的自己開示が多い結果が得られた($t(7)=5.51$、$p<.01$)。母語場面における自発的自己開示と相手からの質問による自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が見られ、自発的自己開示が多い結果が得られた($t(7)=5.79$、$p<.01$)。場面の比較から、KJ も J も自発的に自己開示をすることが示された。

最後に、場面の影響を見るため、KJ 対 J の接触場面での自発的自己開示、母語場面

での自発的自己開示、そして、接触場面での相手の質問による自己開示、母語場面での相手の質問による自己開示についてそれぞれ、対応のない *t* 検定を行った。図 5-3 は、*t* 検定を行った順に表した図である。

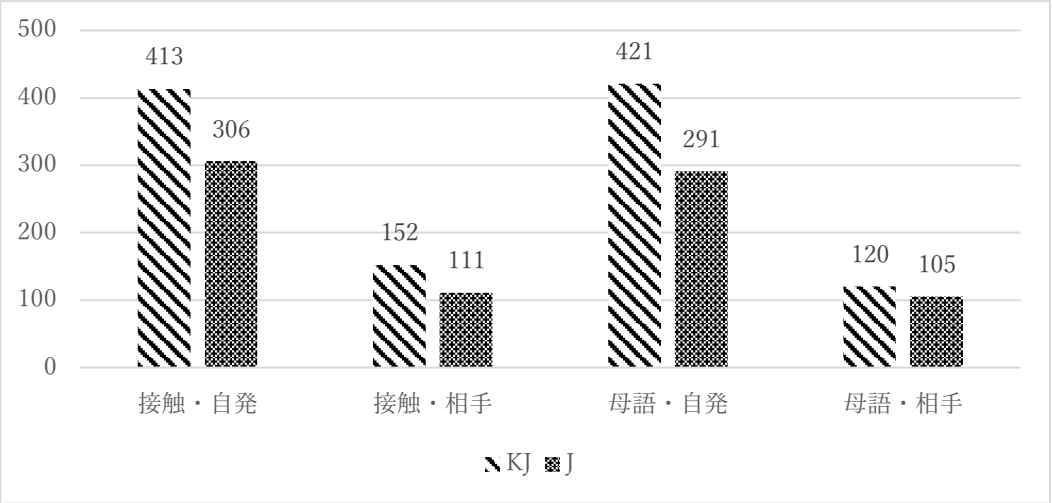


図 5-3　KJ と J の接触場面と母語場面の開示状況別出現数の比較

まず、接触場面における自発的自己開示の KJ と J の対応のない *t* 検定を行ったところ、有意差が認められなかった($t(14)=1.31$、*n.s.*)。同じく、接触場面における相手の質問による自己開示の KJ と J の対応のない *t* 検定を行ったところ、有意差が認められなかった($t(14)=.697$、*n.s.*)。

次に、母語場面における自発的自己開示の KJ と J の対応のない *t* 検定を行ったところ、有意差が認められなかった($t(14)=1.78$、*n.s.*)。同じく母語場面における相手の質問による自己開示の KJ と J の対応のない *t* 検定を行ったところ、有意差が認められなかった($t(14)=-.567$、*n.s.*)。結果、全ての項目[34]において有意差が見られなかった。

以上の結果から、相手からの質問によるより多く自発的に自己開示をするという傾向

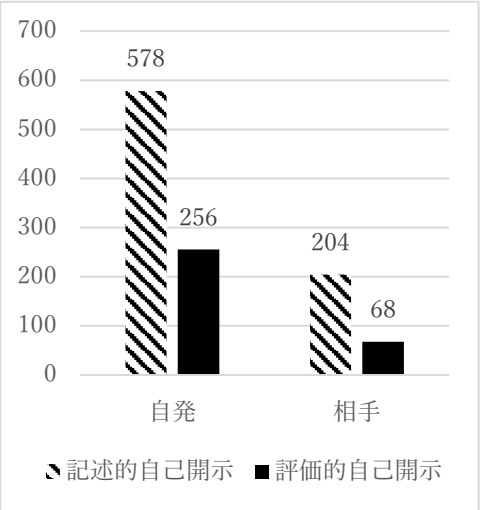
[34] 自発的自己開示と相手からの質問による自己開示は、性質が違うため、全ての項目に対して *t* 検定を行っている。

は、接触場面か母語場面か場面の影響はないことが明らかになった。一二三(2013)では、日本人は自分が率先して開示していくことで、相手との理解の進化、感情浄化など精神的効果が高まることを報告している。また、相手に同程度の開示を返報する場合により好まれ(内藤 2011)、互いに同じくらいの質問をし合うと、相手に対して好印象を抱く(小川 2000)。会話を進行させていく中で、相手の情報を聞き出すことも重要だが、自発的に自己開示をすることで、相手との情報を深めて行くのは、KJ も J も場面に影響せず、共通していることが考えられる。次節では、開示内容の差から検討する。

5.4　自己開示の内容の差から見た開示状況別の KJ と J の比較

5.4 では自己開示を、出現数だけではなく、どのような内容であるかという観点から客観的内容である記述的自己開示と、主観的内容である評価的自己開示に分けて分析する。

まず、KJ、J それぞれの傾向を見るため、自発的自己開示をする場合の記述的自己開示と評価的自己開示、相手からの質問による開示の場合の記述的自己開示と評価的自己開示の出現傾向を検討する(図 5-4、図 5-5 参照)。



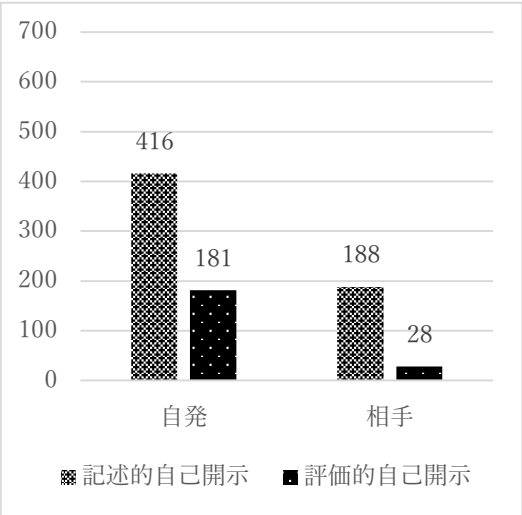


図 5-4　KJ の内容分類による開示状況別結果　図 5-5　J の内容分類による開示状況別結果

KJ の自発的に自己開示をした場合に現れる記述的自己開示と評価的自己開示に対する対応のある t 検定を行った。その結果、有意差が見られ、記述的自己開示が多く現れた($t(7)=3.91$、$p<.01$)。同じく、相手からの質問による場合の記述的自己開示と評価的自己開示に対する対応のある t 検定を行った。その結果、有意差が見られ、相手からの質問により開示する場合も記述的自己開示が多く現れた($t(7)=5.50$、$p<.01$)。

次に、J の自発的に自己開示をした場合に現れる記述的自己開示と評価的自己開示に対する対応のある t 検定を行った。その結果、有意差が見られ、記述的自己開示が多く現れた($t(7)=4.80$、$p<.01$)。同じく、相手からの質問による自己開示の記述的自己開示と評価的自己開示に対する対応のある t 検定を行った。その結果、有意差が見られ、相手からの質問により開示する場合も記述的自己開示が多く現れた($t(7)=3.62$、$p<.01$)。KJ、J どちらも、開示の状況に関係なく記述的自己開示が多く現れるという結果であった。

最後に開示状況と内容の差から、KJ 対 J で自発的に開示する場合と相手から質問により自己開示した場合に、記述的自己開示と評価的自己開示どちらの内容がより出現するかを検討する(図 5-6 参照)。

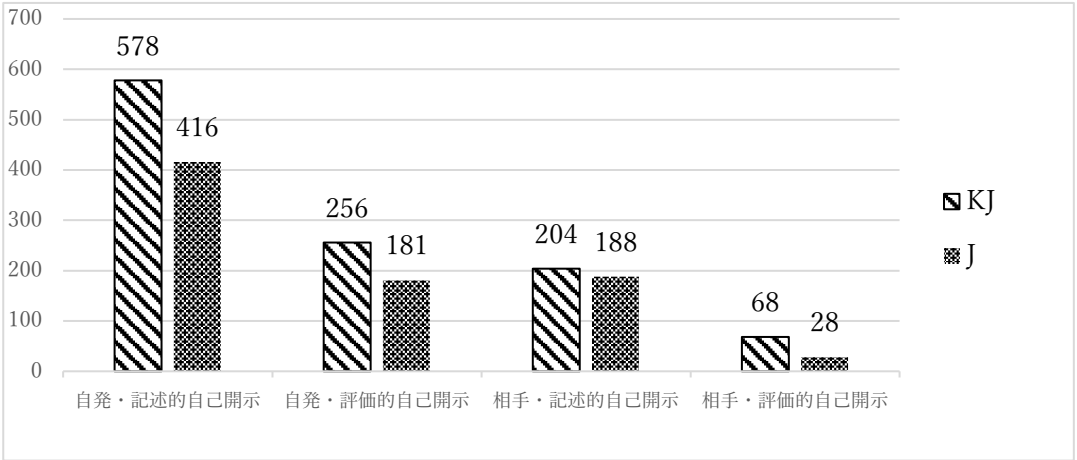


図 5-6　KJ と J の内容分類による開示状況別結果

KJ 対 J の自発的自己開示における記述的自己開示の t 検定を行った。その結果、有意傾向が見られ、KJ の記述的自己開示が多く出現する傾向であった($t(14)=2.05$、$p<.10$)。続いて、KJ 対 J の自発的自己開示における評価的自己開示の t 検定を行ったところ、有意傾向が見られ、KJ の評価的自己開示が多く出現する傾向であった($t(14)=2.05$、$p<.10$)。内容別に分けたところ、記述的自己開示も評価的自己開示、どちらも有意傾向が見られ、KJ が J より多く出現する傾向であった。初対面の間で主観的内容より客観的内容の情報を多く話すことは KJ も J も同じだが、KJ は、内容の差に関わらず相手に自発的に開示をする傾向があると考えられる。そして、KJ 対 J の相手からの質問によって開示した場合での記述的自己開示の t 検定を行ったところ、有意差は見られなかった($t(14)=-488$、$n.s.$)。同じく、KJ 対 J の相手からの質問によって開示した場合での評価的自己開示の t 検定を行ったところ、有意差は見られなかった($t(14)=1.05$、$n.s.$)。開示する内容に関係なく、KJ は J より自発的に開示することが明らかになった。

最後に、全体的な傾向を見るため、記述的自己開示と評価的自己開示はどの開示状況で出現するかを検討する(図 5-7、図 5-8 参照)。

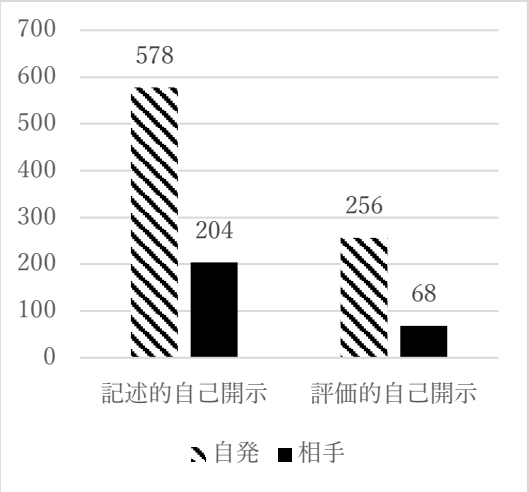


図 5-7　KJ の開示状況による内容の分類別結果

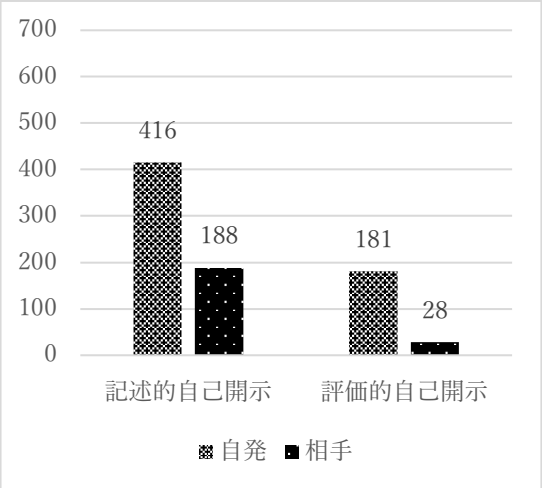


図 5-8　J の開示状況による内容の分類別結果

記述的自己開示と評価的自己開示がどのような状況で現れるかについて、KJ の自発的に開示する場合の記述的自己開示と相手からの質問による記述的自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が認められ、自発的に開示する場合の記述的自己開示が多い結果であった($t(7)=5.76$、$p<.01$)。続いて、KJ の相手からの質問による記述的自己開示と評価的自己開示対応のある t 検定を行った。その結果、評価的自己開示も有意差が見られ、自発的に開示をしている($t(7)=6.35$、$p<.01$)。

同じく、J の自発的に開示する場合の記述的自己開示と相手からの質問による記述的自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が認められ、自発的に開示する場合の記述的自己開示が多い結果であった($t(7)=6.72$、$p<.01$)。続いて、J の相手からの質問による記述的自己開示と評価的自己開示対応のある t 検定を行った。その結果、評価的自己開示も自発的に開示をしていた($t(7)=5.92$、$p<.01$)。

この結果から、KJ、J どちらも開示する内容とは関係なく自発的に開示することが分かった。しかし、どちらも有意差がある反面、数の差から見ると、特に、主観的内容である評価的自己開示は自発的に開示した数が相手からの質問による開示数より KJ は 3.7 倍、J は 6.7 倍で、J の方が大いに差があると考えられる。J は、KJ に比べ、相手に聞かれても評価的自己開示では回答しないことが考えられる。むしろ、自発的に開示しようとすることが分かる。一二三(2013)は、日本人は相手が感想や評価・助言などを開示すると感情を抑制しようとする配慮は低くなり、自分からも相手に対して遠慮なく評価や助言を開示すると報告している。一二三(2013)は、親しい間を対象にしているが、その特徴は、初対面場面でも同じく見られたことが考えられる。

以上の結果から、自己開示の発話数の差は開示状況の差だけはなく、開示の内容によっても初対面の間柄では差が見られた。初対面の人との会話では相手に対する情報がないため、自分に関する属性や情報などを含む客観的内容を自発的に開示して、相手との距離を縮めて行くといえる。同じく主観的内容も、相手からの質問による開示より、自発的に開示し自己の感情や気持ちを開示し互いの距離を縮めて行くと考えられる。しか

し、KJ は J より自発的に客観的内容も主観的内容も開示する傾向があり、特に主観的内容である評価的自己開示において、その傾向が強いことが明らかになった(図 5-4、図 5-5 参照)。自己開示の量と関連させて質問紙調査を行った内藤(2011)では、初対面の間では非内的話は徐々に返報性が見られることを指摘している。しかし、実際の会話からは、自発的に開示をしている状況は非内的話、つまり本章での客観的自己開示に当たる自己開示には返報性が見られなかった(図 5-6 参照)。また、榎本(1997)は、相手が表面的な内容で自己開示をすると表面的な内容で返し、内面的な自己開示をすると内面的な自己開示をすると指摘している。しかし、KJ は客観的な内容も主観的な内容も J に比べ自発的に開示する傾向があり、その特徴は、相手からの質問による時ではなく、自発的に開示をする時に現れやすいことが明らかになった(図 5-7、図 5-8 参照)。自己開示をする際、自発的に開示する時は、自ら望んで開示をしているため、相手からの質問による自己開示より、その特徴がさらに顕著になることが考えられる。そして、KJ は、自ら働きかけつつ考えや意見、感想を開示していくことで、相手との距離を縮めようとする積極性を表していることが考えられる。

5.5　自己開示の内容の差から見た開示状況別の接触場面と母語場面の比較

5.5 では、接触場面と母語場面の比較及び KJ と J の比較を行う。まず、KJ の自己開示の出現数からそれぞれの項目を接触場面と母語場面で比較し、同じく J も項目別に比較、検討する。次に、KJ と J を比較するため KJ 対 J の接触場面での項目別に検討した。同じく、KJ 対 J の母語場面での項目別に検討する。図 5-9 と図 5-10 は、KJ と J の開示状況をさらに内容を記述的自己開示と評価的自己開示に分け、接触場面と母語場面で比較した結果である。

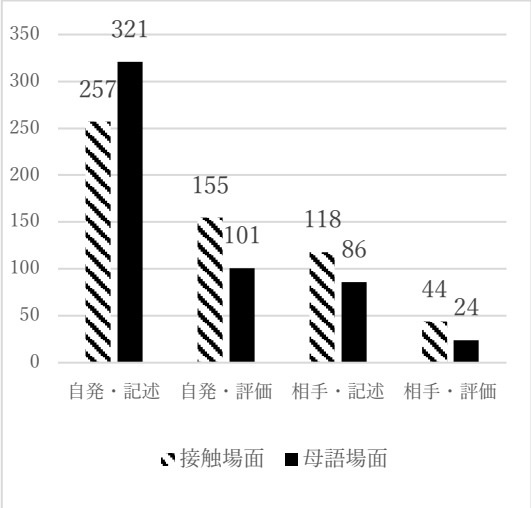


図 5-9　KJ の開示状況と内容別場面の差

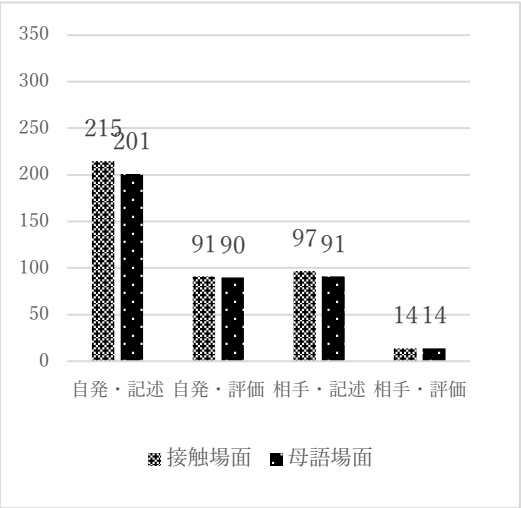


図 5-10　J の開示状況と内容別場面の差

KJ の出現数を場面別に比較するため、自発的に開示した記述的自己開示、自発的に開示した評価的自己開示、相手からの質問により開示した記述的自己開示、相手からの質問により開示した評価的自己開示、全ての項目において対応のある *t* 検定を行った。その結果、いずれの項目においても有意差は認められなかった($t(7)=-1.36$、*n.s.*)、($t(7)=1.20$、*n.s.*)、($t(7)=.720$、*n.s.*)、($t(7)=.691$、*n.s.*)。

同じく、J もすべての項目において対応のある *t* 検定を行ったところ、いずれの項目においても、接触場面と母語場面では有意差が認められなかった($t(7)=.303$、*n.s.*)、($t(7)=.029$、*n.s.*)、($t(7)=.552$、*n.s.*)、($t(7)=.00$、*n.s.*)。項目による場面の差は、KJ でも J でも見られなかった。守崎・内藤(2007)は、日本人同士の方が外国人との間より返報性が高いことを指摘している。しかし、今回の調査で J は母語場面でも接触場面でも一定の開示量が現れた。その理由として、守崎・内藤(2007)の調査は質問紙調査であるため、実際の会話とは異なる結果になったことが考えられる。そして、初対面の間では、評価的自己開示は返報性が見えづらい(榎本 1997)ことが考えられる。

次に、図 5-11 は、KJ と J を比較するため KJ 対 J の接触場面での項目別に検討した結果である。

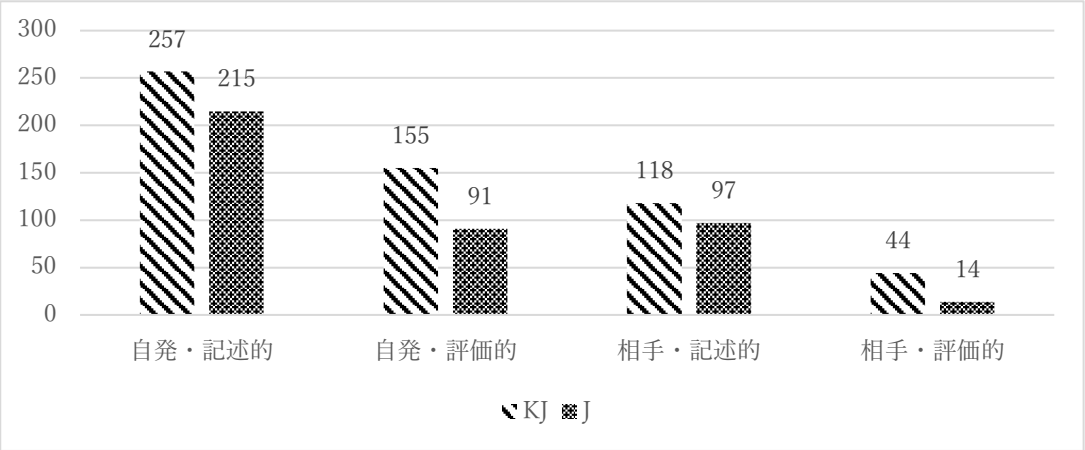


図 5-11　KJ と J の接触場面における開示内容の状況別結果

全ての項目において、KJ 対 J の接触場面における対応のない t 検定を行った。その結果、自発的に開示した評価的自己開示のみ有意傾向であった($t(14)=2.07$、$p<.10$)。つまり、5.4 節でも述べたように(図 5-6 参照)、KJ は J より自発的に開示した評価的自己開示が多い傾向があったが、それを場面で分けてみると、接触場面で多く現れることが分かった。よって、KJ と J の間で返報性が見られない項目としては自発的に開示した評価的自己開示のみであった。横田(1991)は、日本人同士に比べ、留学生と日本人学生との自己開示には返報性が見られないことから、親密化しにくいと指摘している。しかし、実際の会話からは、客観的な内容においては返報性が見られ、主観的な内容においては返報性が見られなかった。自己開示の返報性は、開示する状況や内容によって変わることが窺える。また親しい間で多く現れる主観的内容の評価的自己開示は、相手との親密度によって変わる項目であると考えられる。接触場面で、自発的に開示した評価的自己開示に返報性が見られないことから、J は、異国の相手に自分の感情や考えなどをあまり開示しない傾向があることが考えられる。よって、自発的に開示する状況で、評価的自己開示の項目だけが有意傾向であったと考えられる。

最後に、KJ と J を比較するため KJ 対 J の母語場面での項目ごとに検討した結果である。

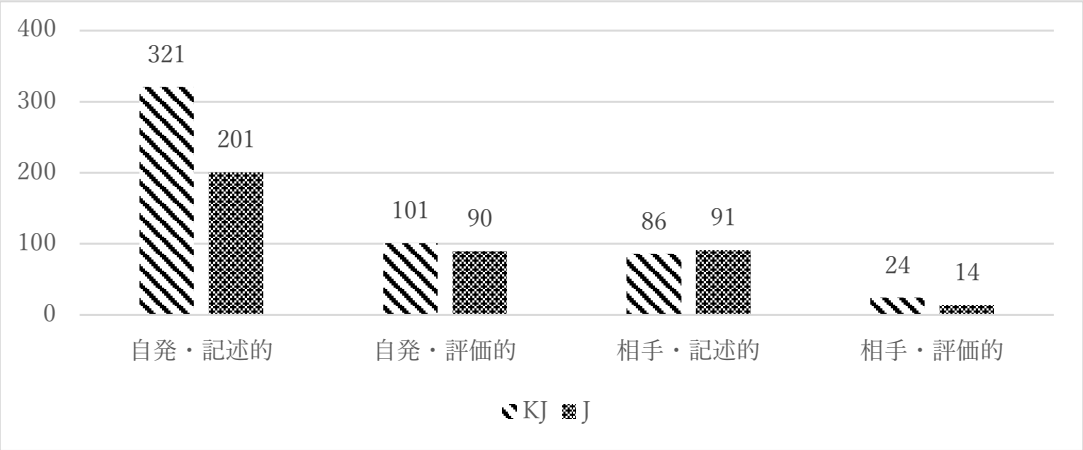


図 5-12　KJ と J の母語場面における開示内容の状況別結果

全ての項目において、KJ 対 J の接触場面における対応のない *t* 検定を行った。その結果、母語場面では、自発的に開示した記述的自己開示は、有意傾向が見られ、KJ が J より母語場面で自発的に開示した($t(14)=2.07$、$p<.10$)。しかし、自発的に開示した記述的自己開示以外は、いずれの項目においても、KJ と J では有意差が認められなかった($t(14)=.55$、*n.s.*)、($t(14)=-76$、*n.s.*)、($t(14)=-54$、*n.s.*)。

この結果から、KJ は、J より母語場面で記述的自己開示が多く開示されることが分かる。KJ は、同国の人との共通点が多いことから、自発的に記述的自己開示をして相手との情報を増やしていくことが推察される。初対面の間柄では、客観的内容が多く開示され(榎本 1997)、J より、KJ は同国の人との時出現することが明らかになった。

5.6　本章のまとめ

以上、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面の会話データを基に、自己開示の開示状況及び開示内容の深さによる自己開示の発話量の差を検討した。

本章の結果をまとめると以下のようである。

(1)KJ も J も、場面の影響はなく、自発的に開示している。

(2)KJ も J も開示の内容に関係なく自発的に自己開示をするが、自発的自己開示の記述的自己開示と評価的自己開示に、KJ と J の間で有意差が見られた(KJ＞J)。

(3)KJ と J の間で、接触場面における自発的に開示した評価的自己開示に有意差が見られ(KJ＞J)、母語場面では、自発的に開示した記述的自己開示に有意差が見られた(KJ＞J)。

多くの研究から質問紙による調査が行われてきたが、実際の会話データを使用することで質問紙とは異なる結果と差が明らかになった。さらに、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の特徴と共通点及び相違点を明らかにすることができたと言える。

本章の結果のように、自発的に自己開示をした場合や相手に聞かれて自己開示をした場合といった状況によっても差があり、どのような内容で開示したか、身上的客観的内容や心情に関わる深い内容でも差があり、場面においても開示する量が異なっていた。J は、開示内容の深さと状況に関係なく、相手の開示の多少に関わらず、一定の量を保つのに対し、KJ は初対面の相手にも関わらず、相手に合わせるより自ら多く開示をした。

本章では、自己開示の開示状況と会話内容に焦点を当てて検討した。初期の段階から相手に対する印象は重要であり、今後維持するためには会話内容のみならず会話後の気持ちとの関連性を考えるのも重要だと考えられる。

次章では、自己開示の発話だけではなく、自己開示の発話を受ける側の発話を中心に分析する。

第 6 章　自己開示後の受け手の発話

6.1　はじめに

Farber(2006)は、自己開示を行う者は相手にも同様の自己開示を求めるものであり、相互的自己開示がなされることによって相手との対等性、信頼、親密さが形成されると指摘している。しかしながら、従来の研究では自己開示をする側にのみ焦点が当てられており、自己開示後の受け手側に焦点を当てた研究は十分に行われていない。自己開示の発話には文化の差があることが指摘されてきたが、発話だけではなく、その受け止め方が文化によって異なる可能性があり、かつ期待している返答ではないと誤解が生じる可能性もある。

本章では、受け手の発話の相違点と類似点を明らかにするため、自己開示後の受け手の発話を分析した。自己開示は、会話のやり取りの状況によって、受け手側の発話にも成り立つことがある。本研究では、受け手は流動的であり、自己開示後の受け手の発話であっても、その発話が新たな自己開示になる場合、その次の発話も受け手のものとみなし分析する。6.2 節では関連する先行研究を紹介し、受け手の定義と分類基準を示す。6.3 節では受け手の発話の全体的傾向を示す。6.4 節では受け手の発話をカテゴリー別に分けて、発話数と実際の会話例を基に分析する。6.5 節では会話終了後行った記述式質問紙に関する回答を述べる。6.6 節では本章の総合的まとめを記述する。

6.2　研究の対象と範囲

申(2006)は、韓国語母語話者と日本語母語話者の初対面の母語場面を対象に、相手の情報に関する発話に対する受け手の発話に焦点を当てている。情報のやり取りの中で、情報を受信する側の言語行動が両言語においてどのように違うのかといった点に注目し、受信側の発話を明らかにしている。申(2006)は相手の情報の発話に対する受け手の発話

を以下の 3 点にまとめている。

①日本語母語話者は発話の途中であいづちを打ちながら、相手の話を聞いていることを示し、相手の情報を促す。韓国語母語話者は発話が終わってからあいづちを打ち、理解表示とともにターンを取る。②日本語母語話者は相手の領域を侵すことに対し控えめな態度を取り、韓国語話者は話題展開のための情報要求を多く行う。このことが韓国人は質問好きと思われる原因である。③日本語母語話者は相手に自分の知っている事実を述べ、相手の発話に対する感想を提示するのに対し、韓国語母語話者は相手に積極的に自分の意見を述べる。これらの結果から、日本語母語話者は相手に情報を提供するように仕向ける共話的スタイルであり、韓国語母語話者は直接情報を引き出し、積極的に談話展開に参加する対話的スタイル[35]であることが明らかにされた。

上記の先行研究を踏まえた上で、本研究では申(2006)の受け手の発話分類の仕方を基にこれを修正し、分析する。申(2006)は、情報交換における受信側に注目して日韓の比較をしていることから、本研究の受け手の分類に大いに参考になるだろうという判断である。

会話は「ひとつの発話を必ずしも一人の話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていく(水谷 1993 : 6)」ものである。詩だがって、本研究では実際の会話データを基に、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自己開示後の受け手の発話に焦点を当て分析する。

6.2.1 受け手の定義

受け手の定義は「対話者の自己開示後に発話する人」とした。本研究における受け手は流動的であり、自己開示後の受け手の発話であってもその発話が新たな自己開示にな

[35] 水谷(1993)は、2 人の話し手がそれぞれ自分の発話を完結させてから相手の話を聞く形で、2 者間で問い、答えるというような話し方を「対話」と指摘している。

る場合、その次の発話も受け手とみなし、分析した。

6.2.2 受け手の分類基準

申(2006)は初対面の場面を対象に、相手話者の発話に対する受け手としての発話に焦点を当てている。受け手の発話を①情報受信(あいづち詞、繰り返し、言い換え)②情報要求(話題提示要求、話題展開要求)③情報提供(事実、感想、意見)に分類している。申(2006)での受け手の発話は、話題ごとに区切った各やりとりから、受け手の発話者が定められている。そして、情報提供者の情報をどのように受けているかという観点から、受け手としての働きを分析している。本研究では、情報提供[36]後の受け手の発話に焦点を当てていることから、申(2006)の分類は大いに参考になると考えられる。従って本研究では、受け手の発話分類は申(2006)の分類を修正したものを用いる。分類の修正は、本研究の会話を考慮して、申(2006)の分類に現れてない項目と、本研究の目的に合致する項目(情報要求、情報提供)に修正を加えた。以下、受け手の発話の分類を表 6-1 にまとめておく。

表 6-1　受け手の発話分類基準

情報受容	あいづち詞、笑い、繰り返し
情報交換	情報要求、情報提供
情報共感	共視、意見、感想

以下にそれぞれについて解説をし、実際の例を示す。会話例は本研究の会話データから抜粋した。

[36] 申(2006)の情報提供には、自己に関する情報自己開示ではない情報もある。しかし、情報に関する受け手として、あいづちや質問をする日・韓の会話スタイルは類似していると報告している。本研究でのデータからも類似した傾向が見られる。

①情報受容

情報受容には、「あいづち詞」[37]「笑い」「繰り返し」がある。相手の自己開示に対し、その情報を受容したことを示す発話である。まず、あいづち詞には、「はい」「ええ」「ん」「そう」「ほんと」「なるほど」「そうですね」などがある(堀口 1997：40)。本研究では堀口(1997)と松田(1988)に従い、応答詞「あ、そうですか」、感動詞「えっ」「ほー」などもあいづち詞と捉えて分析する。笑いは、相手の開示後の発話ではなく、笑いで返答している場合である。繰り返しは、相手の開示の発話を繰り返して返答しているものである。それぞれの例文を上げ提示する。→矢印の発話が該当する。

[例 1-1 日本語接触場面④ あいづち詞]

01　J4：私「場所の名前」でバイトしてて

→02　KJ4：へえ[→]

[例 1-2 日本語接触場面⑧ 笑い]

01　KJ8：学校の中にも入ってほしいな[→]

→02　J8：＜笑い＞

[例 1-3 日本語接触場面④ 繰り返し]

01　J4：語学研修で、学部の時に夏休みの時

→02　KJ4：学部の時

②情報交換

情報交換には、「情報要求」と、「情報提示」がある。情報要求は、相手の自己開示後

[37] あいづち詞は共感を現すために使うこともあるが、本研究ではあいづち詞の機能を見るものではないため、情報受容として分類する。

にさらに詳しく聞きだす発話である。情報提供は、相手の自己開示に自分の情報を自己開示する場合である。以下、情報要求と情報提供の例である。→矢印の発話が該当する。

[例 2-1 日本語母語場面② 情報要求]

01　J4：そういうディジタル媒体なものの読書行為について＜研究したいなって思ってて,,＞

→02　J3：読むっていうのはどういう??

[例 2-2 日本語接触場面⑥ 情報提供[38]]

01　KJ6：試験の時だけ＜勉強して,,＞

→02　J6：分かります。私もフランス語ちょっと 1 年、2 年生の時やって

③情報共感

情報共感には、「共視」「感想」「意見」などがある。相手の自己開示後に自分の考えや事実に関する発話をした場合、これを情報共感とみなす。共視は、相手の立場に立って同意することを事実で述べるものである。感想は、自分が考えていることを感想として相手の自己開示に返答をするものである。意見は、相手の自己開示に対して自分の考えを述べるものである。→矢印の発話が該当する。

[例 3-1 日本語接触場面⑧ 共視]

01　KJ8：すごいよね。私もね、なかなかそこまで行くのが＜大変で＞

→02　J8：<駅だし>

[38] 会話例 2-2 のように、受け手の発話が情報受容のあいづち詞と情報提供が現れる場合はは、発話の内容がより重要であるため、情報受容ではなく情報提供として分類した。また、あいづち詞だけの発話と違って、後ろの情報提供の発話の前置きのように見られたことも分類の根拠である。

[例 3-2 日本語母語場面④ 感想]

01　J7：私ももうそうだったんです。

→02　J8：ほんとコツコツやれる人がすごいですよね。

[例 3-3 日本語接触場面④ 意見]

01　KJ4：多分学校の方も先に見て、こう雇ってくださったのか＜なって。＞

→02　J4：＜そうですね＞きっと需要がありますよね。

受け手の発話については、韓国語母語話者 2 名、日本語母語話者 2 名に協力してもらった。4 人には文字化したスクリプトと音声を渡して、自己開示後の「受け手」の発話を判定してもらい、筆者と彼らで分類の判定を行った。まず自己開示後の受け手の発話かを判断してもらい、筆者と一緒に自己開示後の受け手の発話だけを選別した。その後、受け手の分類を提示して説明した後、判定してもらった。その結果、日本語のデータの場合は一致率が 94%、韓国語のデータの場合は 95%であった。判断が一致してない部分については筆者と協力者の間で意見交換をして最終的な判断を行った。一致率の計算は、一致数/(一致数＋不一致数)x100 で計算した。

本章では、初対面場面の会話データを基に、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自己開示後の受け手の発話に焦点を当て、発話に見られる量の差を分析する。そして、会話終了後実施した記述式質問紙調査[39]の回答における結果について考察する。

6.3　KJ と J の受け手の発話出現数の比較

6.3 では、6.3.1 で自己開示後の受け手の発話出現数結果を KJ と J に分けて、全体的な傾向を見る。そして、6.3.2 で接触場面と母語場面それぞれの結果を示す。

[39] 調査に使われた質問紙は、本研究の添付資料 p.152 を参照。

6. 3. 1 KJ と J の受け手の発話出現数の比較

図 6-1 は、KJ と J の受け手としての発話数である。

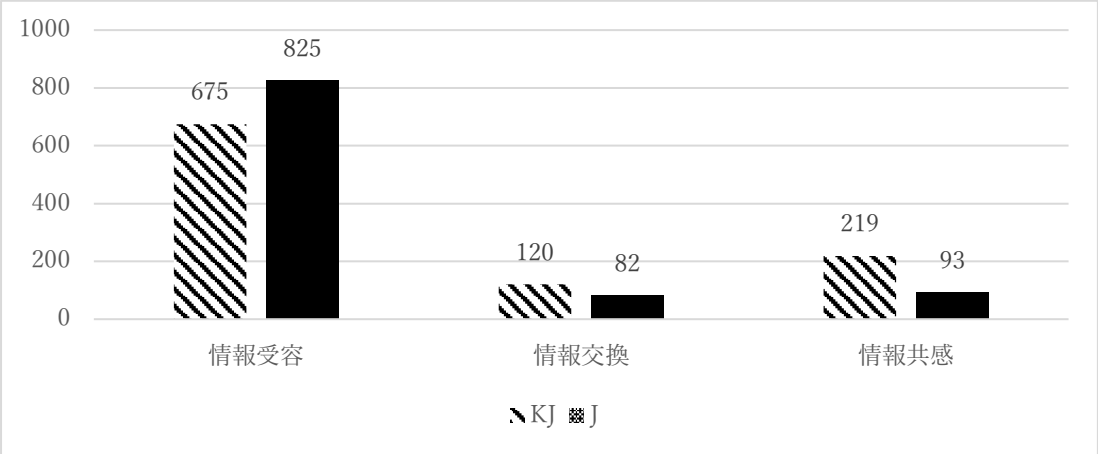


図 6-1　受け手の発話の出現数

まず、KJ と J の使用率の傾向を見ると、KJ は「情報受容」の次に「情報共感」「情報交換」の順に多く使われている。J も「情報受容」「情報共感」「情報交換」の順で使用数が高かった。

次に、情報受容の出現総数を見ると、KJ は 675 回、J は 825 回で J が KJ より 1.2 倍多く出現していた。次に多く出現した「情報共感」では、KJ は 219 回、J は 93 回で、KJ が約 2.3 倍多い結果であった。「情報交換」では、KJ は 120 回、J は 82 回と KJ が約 1.4 倍多い結果であった。

使用数の差を見るため、「情報受容」、「情報交換」、「情報共感」の項目別にそれぞれ KJ 対 J の対応のない t 検定[40]を行った。その結果、「情報受容」では、有意差が認められ、J が多用することが分かった($t(14)=3.11, p<.01$)。他方、「情報交換」は有意差が認められ、KJ に出現する傾向があるといえる($t(14)=2.68, p<.05$)。最後に、「情報共感」は有

[40] 本章では、項目の使用順と項目ごとの関係ではなく、各項目の KJ と J の平均の差から論じるため、それぞれの項目に関する t 検定を行った。

意差が認められ、KJ が J より「情報共感」を多用することが分かった(t(14)＝2.02,p＜.01)。つまり、「情報受容」以外は KJ がより多用しているということである。申(2006)の指摘通り、日本語母語話者は相手に情報を提供するように仕向ける共話的なスタイルをとるため、「情報受容」が多く出現して、会話を進行させていた。本研究の結果でも同じく、J は「情報受容」が多く出現していた。しかし、「情報受容」以外は、KJ と J の間に差が見られ、KJ が多用することが分かった。また、日高(2012)は、日本語母語話者はあいづち詞で表現することで相手への「心配」「共感」を現す「察し合い」の談話構造を取ると指摘している。よって、KJ は、「対話」的なスタイルをとるため、あいづち詞より整った言葉で返答をし、共感するのに対し、J はあいづち詞で応答することが「共感」へとつながることが KJ と J の返答の差から窺える。

6.3.2 KJ と J の受け手の発話の接触場面と母語場面の比較

次に、受け手の発話を接触場面と母語場面に分けて、その差を比較する。図 6-2 は KJ の結果で、図 6-3 は J の受け手としての発話出現数である。

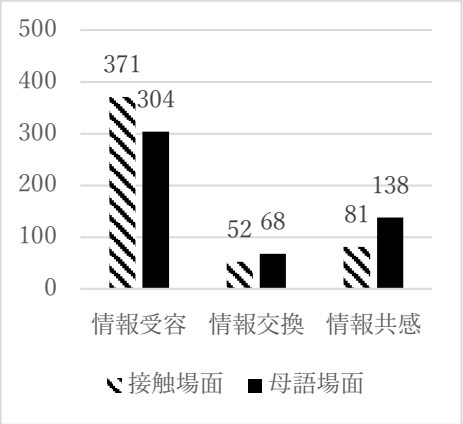


図 6-2　KJ の場面別の受け手の発話数

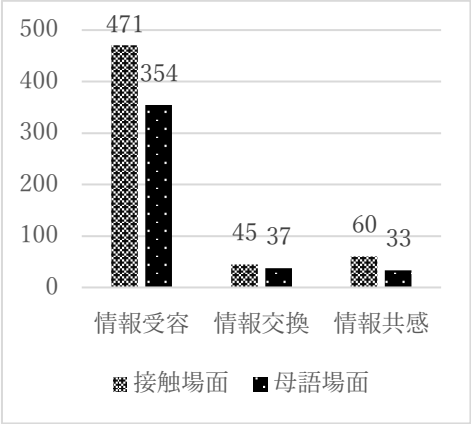


図 6-3　J の場面別の受け手の発話数

まず、KJ の受け手としての発話を見る。接触場面と母語場面の差を見るために、KJ

の「情報受容」「情報交換」「情報共感」それぞれの項目における対応のある t 検定を行ったところ、「情報受容」は有意差が見られ、母語場面より接触場面で多く使われた($t(7)=2.38, p<.05$)。次に、「情報交換」は、接触場面と母語場面間で有意差が見られなかった($t(7)=-1.44$, n.s.)。最後に、「情報共感」は統計的に有意差が見られ、接触場面より母語場面で多く使われることが分かった($t(7)=6.77, p<.01$)。

次に J の受け手としての発話を見る。J の「情報受容」における接触場面と母語場面の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が見られ、J も KJ と同じく接触場面での「情報受容」が高い結果となった($t(7)=3.23, p<.05$)。「情報交換」は、接触場面と母語場面の間に統計的に有意差は認められなかった($t(7)=-281$, n.s.)。最後に、「情報共感」における接触場面と母語場面の対応のある t 検定を行ったところ、有意差が認められ、接触場面で情報共感がより出現する傾向であることが分かった($t(7)=2.92, p<.05$)。KJ と J は、「情報交換」以外の「情報受容」と「情報共感」に有意差が認められた。

以上の結果を踏まえると、母語場面と接触場面の量の変化は、J は KJ が多用する「情報受容」が接触場面で増加し、KJ も接触場面で J が多用する「情報受容」が増加した。自己開示の受け手としての発話は、KJ、J ともに母語場面と接触場面での差が発話ごとにあり、特に接触場面で KJ は J が多用する「情報受容」が多くなった。それに対し、J も接触場面では KJ が多く使う「情報共感」が増加することが分かった。佐々木(1998)で指摘されたように、相手の発話方略が自文化の人と異なると気づき、調整[41]されたことが考えられる。また、この結果はネウストプニー(2005)によって提案された外国人と日本人との接触場面においてどのような言語規範が適用されるかという観点から見ると、相手の規範に合わせる「相手規範」の項目に当てはまることが考えられる。ネウストプニー(2005)は、日本語学習者にとって、相手の日本人が持っている規範は「相手規範」になると指摘している。KJ は J に対して相手の規範に合わせようとして「情報受容」が接触場面で増加している様子が窺えたと考えられる。

[41] 詳細な内容については、本章の 6.5 節、会話後の記述式質問紙の回答で説明をする。

6.4　受け手の発話項目別の結果と考察

6.4 では、接触場面と母語場面を合わせた結果に基づいて受け手の発話を考察する。受け手の発話別の出現数と実際の会話例と共に述べていく。

6.4.1 情報受容

「情報受容」は、相手の自己開示に対して内容がある発話で返すより、相手の話を聞いていることだけを表す発話とも言える。図 6-4 は KJ と J の情報受容の様子を下位項目ごとに分けて表した結果である。

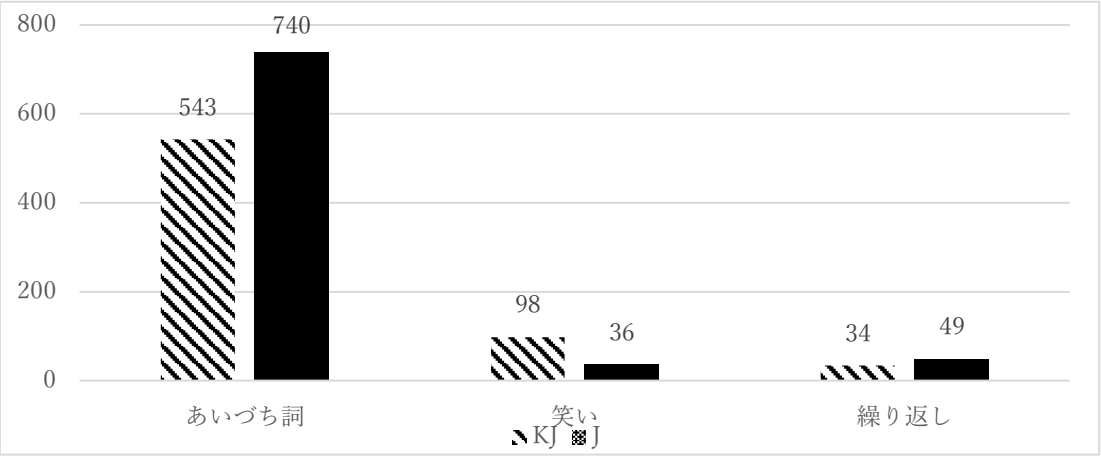


図 6-4　KJ と J の情報受容発話の出現数

KJ は、「あいづち詞」の次に「笑い」、「繰り返し」の順に使用数が高い。J は、「あいづち詞」の次に「繰り返し」、「笑い」の順で現れている。項目ごとに、KJ と J の対応のない *t* 検定を行った。その結果、「あいづち詞」は、KJ と J の間に有意差が見られ、J が多用する結果であった($t(14)=1.27, p<.10$)。次に、「笑い」は有意傾向が見られ、KJ の方に出現する傾向であることが分かった($t(14)=3.12, p<.05$)。最後に、「繰り返し」は、KJ と J の間に有意差が認められなかった($t(14)=-753$, n.s.)。

「あいづち詞」を多く使う J は、対話者に協調する形をとり、相手の自己開示を聞い

ていることを言葉ではなく、話が途切れないようあいづち詞で応答することが考えられる。「笑い」は、KJ と J における対照的特徴があった。J は発話中に「笑い」が多く現れるのに対し、KJ は応答で「笑い」が現れ、相手の自己開示を受容していた。

[会話例 4-1]の J の会話は、話し中に「笑い」が出た例であり、笑いとあいづちが共に出現[42]している。むろん KJ の会話においても、[会話例 4-1]のような例は見られたが、[会話例 4-2]のように相手の自己開示に言葉はなく笑いだけで応答する例は J には見られなかった。しかし、笑いを応答として受け止めないと、話をながされていると誤解[43]をされる恐れがあると考えられる。以下、実際の会話例を示す。矢印(→)の発話が該当する。韓国語の会話は、日本語訳を会話の該当する会話文の下に表記した。

[会話 4-1.　日本語母語場面④「笑い」]

01　J8：他は、なんか…お茶とか頭いいから＜笑い＞{< >{>}}

==だから、実家近いしいいかなって＜思って＞

→02　J7：＜笑い＞＜うんうんうん

[会話 4-2.　韓国語母語場面③「笑い」]

01　KJ6：작년까지는 별로 아무런 생각이 <없었거든요,,>

去年までは何も考えていませんでした。

→02　KJ5：＜웃음＞

＜笑い＞

03　KJ6：근데 참 좀 생각을 많이 해봐야 되는거 같애요

でも、ちょっとよく考えなければなりません

→04　KJ5：＜웃음＞　＜笑い＞

---

[42] 受け手の発話が笑い、あいづち同時に出現した時すべてカウントした。

[43] 6.5 節では、会話後行った記述式質問紙調査の結果から詳しく述べる。

次に、繰り返しは KJ、J ともに同様の結果であった。実際の会話データにおいても、相手の自己開示に対して、確認や興味を表す驚きを示す際などに出現していた。相手の自己開示に対して、聞き直す場合や、驚くなど情報に対する感情を現す時、使用される方法であると考えられる。

[会話例 4-3.　日本語接触場面⑧ 聞き直しの「繰り返し」]

01　KJ8：お住まいは？

02　J8：宿舎です。

→03　KJ8：宿舎？

[会話例 4-4.　日本語母語場面① 驚きの「繰り返し」]

01　J1：あ、でも解剖の実習とかするんですね。え、解剖って動物の？

02　J2：人間の解剖。

→03　J1：人間の解剖??

6.4.2 情報交換

「情報交換」は、相手の自己開示を聞いて受け手として自分も自己開示をして相手に「情報提供」をする場合と、さらに情報を要求する発話がある。図 6-5 は、KJ と J の「情報要求」と「情報提供」の出現数である。

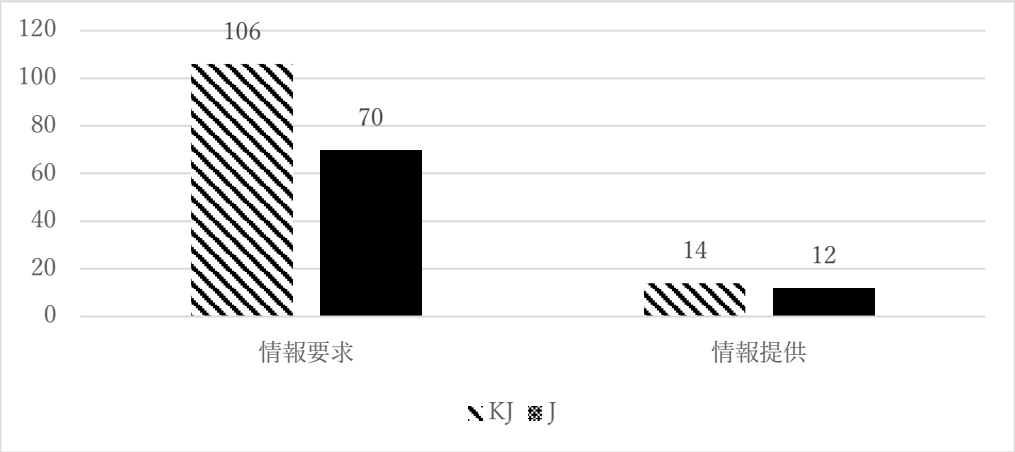


図 6-5　KJ と J の情報交換発話の結果

まず、数から見ると「情報要求」は KJ の方が J より約 1.5 倍多い結果であった。「情報提供」にはあまり差が見られない。情報交換の項目である「情報要求」と「情報提供」、それぞれ KJ と J の対応のない *t* 検定を行ったところ、「情報要求」は、有意傾向が見られ、J より KJ に出現する傾向であった($t(14)=3.38, p<.10$)。「情報提供」における KJ 対 J の *t* 検定の結果は、有意差が認められなかった($t(14)=.607$, n.s.)。「情報要求」発話は、相手の自己開示に対し、情報をさらに詳しく聞く、あるいはそれと関連する質問をすることで情報に関する興味を示していると考えられる。特に「情報要求」は、同じ「情報要求」と分類されるものであっても KJ と J の発話に相違点が見られ、KJ に特徴的な事例があった。J は相手の開示による情報や会話の内容から情報をするのに対し、KJ は開示された内容より深く聞きだす事例があった。[会話例 5-1]のように、住まいの話をしている時、J4 が家の近さについて質問して、通いで学校に来るのかと次々と情報要求をする。しかし、その情報要求は住まいと関連していて徐々に新たな情報を聞き出すように見える。以下、実際の会話データ例を示す。矢印(→)の発話が該当する。

[会話例 5-1. 日本語母語場面②「情報要求」]

01　J4：えっと、アパートですか？

02　J3：いえ、実家が「場所名」にあるので…(自己開示)

03　J4：あ～どこですか？

04　J3：あの、イオンから近いんですが　(自己開示)

→05　J4：通いですか？

それに比べ KJ の場合は[会話例 5-2]のように、留学のきっかけを話していた KJ3 に対し、いきなり KJ4 は誰と同期なのかという前の話と関連しづらい情報要求を突如受け手として質問する。韓国語の会話は、それぞれの会話文の下に日本語訳を示した。

[会話例 5-2.　韓国語母語場面②「情報要求」]

01　KJ3：아 네 게네는 10 학번 저는 고등학교 끝나고 바로 온…

あ、はい。彼らは、10 年に入学、私は高校終わってすぐ来た…(自己開示)

→02　KJ4：그럼 누구랑 동기가 되는 거에요?

じゃあ、誰と同期ですか？

[会話例 5-3]も同様、共通の知人の話をしている最中、KJ2 がどのように共通知人と知り合ったのかを 01 行目で自己開示するが、02 行目で KJ2 の自己開示に対する情報要求ではない質問をしていることが窺える。

[会話例 5-3.　韓国語母語場面①「情報要求」]

01　KJ2：언니랑 네 1 학년때 제가 들어왔을때 언니도 같이 오셨으니까 그 때 처음 봤어요.들어온지

彼女とは、はい。1 年の時私が入学した時、彼女もいっしょに入学したので、

その時初めて会いました。入学して　**(自己開示)**

→02　KJ1：근데 한국 분들이랑 잘 안노시죠？

ですが、韓国の方々とあまり会いませんよね。

韓国語母語話者は、自分から積極的に質問をしていく「攻め」の手法で会話を進め(井出・任 2004：49)、相手の私的領域に深く立ち入ることが関心を表明するための行為と指摘されている(奥山 2005)。本研究の KJ の会話例からも相手の自己開示に対してさらに深く聞き出し、相手の自己開示に対して「情報要求」を多くすることで、開示を促し会話を進行させる様子が窺えた。本研究の結果は、井出・任(2004)、奥山(2005)の結果を裏付けるものと言えよう。また、申(2006)では、情報要求は話題展開のため使われていると指摘されたが、自己開示後の情報要求は、話題の展開よりは相手の発話に興味を持ち要求をする発話だと考えられる。

最後に、「情報提供」については、KJ と J の間に顕著な差はなかった。しかし、「情報提供」は受け手の発話として見なすこともできるが、情報の内容によって自己開示になる可能性もある。出現数としてはあまり変わりないが、内容としては、KJ は評価的自己開示[44]の内容である情報提供が見られ([会話例 5-4]を参照)、それに比べ J は記述的自己開示[45]の内容に当たる情報提供が見られた([会話例 5-5]を参照)。[会話例 5-4]は、01 行目で J7 が発表をする時とても緊張するタイプだと自己開示をし、KJ7 が 04、06 行目で、自己の感情や感想で応答していることが分かる。KJ にはこのように、相手の自己開示に対し、自分の言葉で自己の感情に関わる表現が含まれた情報提供が見られた。一方、J の会話には[会話例 5-5]のように、01 行目で KJ6 が自分の勉強のスタイルについて自己開示をしたのに対し、02 行目で J6 も自己の客観的内容で情報を提供している。このように J の「情報提供」には、自己の経験などの客観的内容が現れていた。

---

[44] 評価的自己開示は、感情、気持ち、感想、評価などの自己の主観的な内容を示す。

[45] 記述的自己開示は、情報、事実、経験などの自己の客観的な内容を示す。

[会話例 5-4.　日本語接触場面⑦ 評価的自己開示の「情報提供」]

01　J7：いや～めっちゃ緊張するんですよ私　**(自己開示)**

02　KJ7：私多分発表の時、あ…修論発表会の時めっちゃ、＜手が震えてて,,＞**(自己開示)**

03　J7：そうですか＜笑い＞

→04　KJ7：そのポイントあるんじゃないですか、<u>めっちゃ震えててやばいと思ったんですけど</u>

05　J7：ふるふるしますよね[→]

→06　KJ7：私めっちゃ緊張するので、<u>学会だとどうなってしまうのかって感じる。</u>

[会話例 5-5.　日本語接触場面⑥ 記述的自己開示の「情報提供」]

01　KJ6：試験の時だけ勉強して＜笑い、、＞　**(自己開示)**

→02　J6：分かります。私も、フランス語ちょっと 1、2 年生の時ちょっとやって。**(自己開示)**

6.4.3 情報共感

「情報共感」は、相手の自己開示に対し言葉で表す形で受け手として発話をしている。相手の自己開示に共感をして自分の意見を述べるたり、感想を言ったりする発話になる。図 6-6 は、KJ と J の「情報共感」の項目別に示した発話の数である。

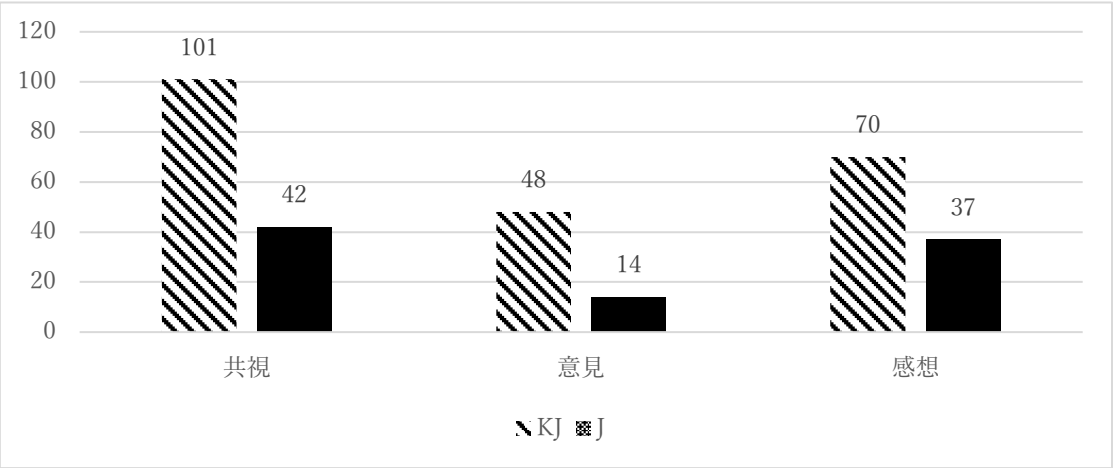


図 6-6　KJ と J の情報共感発話の結果

「情報共感」の項目の数は、KJ が J に比べ全ての項目で多く使用していた。項目別に KJ と J の対応のない *t* 検定を行ったところ、「共視」、「意見」、「感想」全ての項目で KJ と J の間に有意差が見られ、KJ が J よりいずれの項目でも多い結果であった(共視：$t(14)=3.38, p<.01$、意見：$t(14)=2.76, p<.05$、感想：$t(14)=2.22, p<.05$)。

受け手としての「共視」の発話は、KJ、J ともに相手の自己開示の視点に立って感情移入をして言い直すような事例があった([会話例 6-1]、[会話例 6-2]を参照)。[会話例 6-1]では、KJ3 が研究誌に関して語っており、KJ4 が聞き手として応答しているが、あいづち詞ではなく、KJ4 の情報を言い直しつつ受け手としての発話をしている。このように、相手の話を受け止めていることを言葉で表す事例が見られた。

次に、J の会話を[会話 6-2]に示す。KJ2 は、大阪旅行に行ったことを語っており、食べ物がおいしかったことを話している。それに対して J2 が、受け手として J2 が 04 行目で、KJ2 と同じ視点に立って言い直していることが分かる。以下、実際の会話データ例を示す。矢印(→)の発話が該当する。

[会話 6-1.　韓国語母語場面②「共視」]

01　KJ3：그 저희 같은 경우에는 잡지 투고...잡지 그 근데 사독이 있고 그런거 같아요

あの私たちの場合雑誌投稿…雑誌あのそれに査読があったみたいです。

（自己開示）

→02　KJ4：요즘에 sci 그런데 등재 되어 있는 저널이면 더 인정해주고

응응

最近 sci それに搭載されているジャーナルだともっと見てくれて

==うんうん

03　KJ3：저널 들이 저널이 있으니까

ジャーナルがジャーナルがあるから

04　KJ4：우리는 아에 그런게 없어가지고

私たちは全くそういうのがなくて

[会話 6-2.　日本語接触場面「共視」]

01　KJ2：本当によかったんです　**（自己開示）**

02　J2：はいはい。

03　KJ2：本当においしかったんです　**（自己開示）**

→04　J5：うんうん。なんか同じお好み焼きでも、大阪と違うやつだよね。

次に、「意見」は KJ が J より 3 倍近く多く現れた。KJ の「意見」には、相手の自己開示に対して自分の考えによる意見でかつ積極的に応答しようとする特徴が見られた。それによって、受け手としての発話ではあるが、それが自己開示にもなる発話が多く、相手の悩みに深く共感し自分の意見を述べている([会話例 6-3]を参照)。[会話例 6-3]では、KJ7 が 01 行目、自分の研究法について考えを述べて、02 行目で KJ8 が KJ7 の意

見に対して自分の意見を積極的に述べようとしている。このように、KJ の会話には、受け手としての意見でありながら自分の考えに言及しようとする事例が見られた。

[会話例 6-3.　韓国語母語場面④「意見」の応答]

01　KJ7 : 트랜드가 아주 중요하다고 근데 저는 트렌드는 커녕 따라가기도...

トレンドがとても重要だと、でも私はトレンドどころかついていくのも

(自己開示)

→02　KJ8 : ＜웃음＞.아니 근데 갑자기 그 트랜드에 맞출 수는 없으니까 어떤 흐름을　분위기잡아가면서,,타면서 거기에 가야 하는거죠.

＜笑い＞。でもいきなりそのトレンドに合わせるのはできないから、なんか流れを雰囲気、、見ながらそこに合わせて行かないといけない。

03　KJ7 : 네 따라가는거죠

はい。ついて行かないと

一方、[会話例 6-4]は、[会話例 6-3]のように J の会話に現れた悩みに関する会話である。01 行目から J6 が研究に関する悩みについて続けて語っている会話である。しかし、J5 は、あいづち詞で J6 の考えについて頷いているように聞いて自分の意見や考えはあまり出していない。このように、J の会話からは、他にも悩みに関する自己開示が現れる会話から受け手は意見よりあいづち詞で相手の発話を受けている会話が見られた。

[会話例 6-4.　日本語母語場面③「意見」に対する応答]

01　J6 : ただ、どのレベルで踏み込むかっていうレベルでっていうか、あまり深くやりすぎるとほんとにテーマが広がり＜すぎる＞｛＜＞｛＞｝と思うので

(自己開示)

→02　J5 : ＜はい＞

03　J6：どこまで踏み込むかっていうのも、ほんとに＜今＞｛＜＞｛＞｝考えているところでまさに　**(自己開示)**

→04　J5：＜へー＞

05　J6：なんかデータを取ったりするとかいうのではなくて＜実験も＞｛＜＞｛＞｝考えたんですけど　**(自己開示)**

→06　J5：＜そうですね＞

次に、[会話例 6-5]は、J に見られた「意見」である。J の「意見」の発話は、KJ の「意見」とは異なって、あまり自分の意見を長々と語る発話は見られなかった。その例として以下、[会話例 6-5]を示す。KJ4 と J4 は、日本で外国人教師の雇用について話をしている。01 行目と 03 行目で、KJ6 が教師として雇用された理由について語り続けている。そこで、02 行目と 04 行目で J が KJ6 の自己開示に対して、意見を述べているが、KJ の会話のように具体的な内容で意見を述べる事例は見られなかった。

[会話例 6-5.　日本語接触場面④「意見」に対する応答]

01　KJ4：やっぱり、外国人だからこそ教えやすいことがあるって感じがしますね。そういうのがあって雇ってくれたと思います。**(自己開示)**

→02　J4：そう。強みだと思いますよそこが

03　KJ4：言語のひとつとしていくとしたら、ノンネイティブの教師もどんどん必要になって行くだろうし、たぶん学校の方も雇ってくれるだろうなって期待しています。**(自己開示)**

→04　J4：＜そうですよ＞需要があると思います。

最後に、「意見」と同様に、「感想」も KJ が J より約 1.9 倍多く現れた。KJ も J も相手の自己開示を感想で言い返しをしていることは共通していたが、KJ は共感をしつ

つ感想を述べようとする事例があった([会話例 6-6]を参照)。[会話例 6-6]は、KJ8 が KJ7 に地震の経験を語っている会話である。01 行目で KJ8 が地震の経験を話して、02 行目で KJ7 は、共感しつつ感想を述べていることが分かる。KJ7 は、地震の経験をしてなかったのにも関わらず、自分がそういう経験をしたらどう考えるかと改めて言い直すことで共感をしていると考えられる。それによって、KJ8 は、自分の経験の話しに興味を持って話を聞いてくれていると印象を抱くのではないかと思われる。KJ の会話からも[会話 6-6]のように経験の話が現れているが、一方が語りもう一方は受け手として言葉で話を引き出している様子が見える会話であった。KJ は、相手の返答に対する期待として、応答的な返答だけではなく相手の考えや意見を気にしつつ自己開示を行っているのではないかと考えられる。

[会話 6-6.　韓国語母語場面④「感想」]

01　KJ8 : 당연하죠 편의점 갔는데 편의점은 진짜 전쟁난 이후에 그런 사람들 다 이제 식량 가져 가듯이 정말 진열장에 있는 물건들??컵라면 이런거 다싹쓸이 정말 텅텅빈 텅텅비었구요 진짜 무서웠어요.＜웃음＞

当然です。コンビニ行ったのにコンビニは本当戦争の後みたいで、みんなこう食料もって行くように、本当店の棚にある物⁇カップラーメンそんなのすべて一気に本当スカスカ、スカスカでした本当怖かったですよ。＜笑い＞ **(自己開示)**

→ 02 KJ7 : 실감이 안나요 그 때 당시엔 그랬겠지만 저는 얘기를 한번 건너 전해 들으니까 또 되게 먼 얘기 같고 저도 막상 겪으면 되게 실감이 안나요 ＜웃음.＞

実感わかないです。その当時はそうですけど、私は話を聞いただけでなんか他人の話しみたいで私も直接経験したとしてもとても実感がわかない

です。＜笑い＞

次に、J の会話に現れた「感想」の会話例である。[会話 6-7]は、J8 と J7 が留学する周りの人について話をしている。01 行目と 03 行目で、J8 が海外留学に対して思っていることを自己開示する。それに対して、04 行目で J7 は、J8 の自己開示に対して同意しているような感想を言っているが、KJ のようにことばで共感をしつつ感想を言う事例は見られなかった。

[会話例 6-7.　日本語母語場面④「感想」]

01　J8：私だったらまず怖いって思っちゃう。海外が怖いなって(**自己開示**)

02　J7：うんうん

03　J8：環境が違うので溶け込めないだろうなって思っちゃって(**自己開示**)

→04　J7：うん、思いますよね

また、[会話例 6-8]のように、終助詞に、「ね」が現れ、自分の感想を言いきるより、相手の同意も求めつつ感想を言う事例が見られた。終助詞「ね」は、同調・同意を聞き手に求める機能があり(岩畑 2009)、相手に受容的な印象を与えると指摘されている(福島他 2008)。よって、J は、感想を言い切るより、相手からの同意も求めつつ、共感をすることが考えられる。

[会話例 6-8.　日本語母語場面①「感想」]

01　J1：こういうの言ってましたって言うのに、そんなの言ってませんよって言われたり、わ―どうしようみたいな　(**自己開示**)

→02　J2：たぶんそんなことないと思うんですけど、怖いですよね。

以上、KJ と J の受け手としての発話に現れた相違を比較した。本研究での事例は、各項目における事例を数値で示していないため一般化するのは難しい。しかし、KJ にだけ見られた事例もあり、情報要求の仕方、意見や感想の述べ方には KJ と J の間に相違があることが示された。

6.5　KJ と J の受け手としての意識と問題

会話収録後、相手の受け手としての返答にどのような意識を持ち、どのような問題が現れるかを明らかにするため記述式質問紙に回答してもらった。

6.5.1 記述式質問紙調査の目的と方法

調査の内容は、配慮、相違点の中心になっている。質問紙は、全て日本語で質問を設けて、母語場面と接触場面の両方について回答をしてもらった。KJ、J それぞれ同じ項目を設定して回答を求めた。調査後、不明な点については追加調査として回答者に直接インタビューをした。韓国語で回答されたものは、筆者が翻訳をした。そして、本研究の趣旨と関係ない回答は除外[46]した。

6.5.2 回答コメントの内容

KJ の回答の内容は以下のように示される。

6.5.2.1 KJ の母語場面に対する回答内容

KJ は以下のように、母語場面における回答をしている。韓国人との会話に対して肯定的な回答が窺える。

・韓国人と話す時は、私の話に共感をよくしてくれた(KJ7)

---

[46] 相手の日本語の能力やどのような内容であったかの説明などが含まれる。

・*私が話したらそれについて質問をよくしてくれて楽に話せた(KJ5)*

・*韓国人とのやり取りは日本人の時より円滑ではなかった*[47]*(KJ6)*

6.5.2.2 KJ の接触場面に対する回答内容

複数の KJ が J の発話には、回答にあいづち詞が多いことを回答している。しかし、「常に応答はしてくれるが、本心なのかよくわからない」や「リアクションが少ない。あいづちだけする」の回答のように、あいづち詞を多用して相手の開示を受容することが自己開示を行う発話者側にとっては、会話をうまく進めるため行っているだけだと思われ、誤解を生むことが推察される。

・*日本人は、あいづちを多く使う(KJ3、KJ7、KJ5)*

・*常に応答はしてくれるが、本心なのかよくわからない(KJ1)*

・*リアクションが少ない。あいづちだけする(KJ4)*

一方、「日本人は相手の反応をうかがいながら話す」のような回答もあり、相手の配慮に気付きながら会話をしていて、あいづち詞が多いことに会話の流れがよかったと考える回答もあった。このような回答からは、KJ と J に対する相違を把握していることが窺える。また、「日本人とのやり取りは流れがいいが、形式的な感じがする(KJ4)」のように KJ と J の受け手としての相違点を低く評価することもあり、会話の流れに囚われて、内容を深くできず「形式的なやり取り」と感じてしまうことが感じ取れる。

・*日本人は、相手の反応をうかがいながら話す(KJ8)*

・*日本人はあいづちが多いため会話の流れが円滑であった(KJ６、KJ7)*

---

[47] 調査後詳しく聞いたところ、日本人との会話ではあいづち詞による応答が常にあったので、上記のように回答しているが、否定的な意味ではないと答えた。

・*日本人と話す時は、できるだけ応答をスムーズにするよう気を付けた(KJ7)*

・*日本人は反応をよくしてくれて、韓国人は言葉で伝えようとしてくれる(KJ2)*

・*日本人とのやり取りは流れがいいか、形式的な感じがする(KJ4)*

6.5.2.3 J の母語場面に対する回答内容

次に J の回答の内容は以下のように示される。同じく、J も KJ のように日本語母語話者はあいづちが多いという回答が多かった。そして、J との相違点について回答が多かった KJ とは異なって、J は KJ に対して「あまり相違を感じていない」と回答が多い。

・*日本人はあいづちが多い(J1、J4、J8)*

・*日本人はよく共感してくれる(J7)*

・*韓国人と日本人の相違はあまり感じなかった(J2、J4、J5)*

6.5.2.4 J の接触場面に対する回答内容

また、下記の回答のように、KJ の発話に対して肯定的な評価もあり、KJ と J の相違点について以下のような回答があった。

・*韓国人は共感的に聞いてくれて話しやすかった(J3)*

・*韓国人の方は自分の話を聞いてよく言葉で反応してくれて安心して話せた(J5)*

・*韓国人は、私の話しの後に続けて私もこうですと反応してくれて自然に互いが知れた(J8)*

一方、KJ と J の相違点について述べた回答者もいて、笑いの返答に関する否定的な態度が窺える。そして、返答として自己開示をした人より多く話すような意見もあった。

このコメントから言葉で表すことが必ずしもいい印象を与えるわけではないことが分かった。

・*日本人が必ず応答するところを、韓国人は笑いで受け流す傾向がある(J6)*
・*自分が話した内容より返事として多くの話をされて、途中で切るのが難しかった(J2)*

最後に、下記のようなコメントのように、情報要求について質問が多いと感じていて、関連する質問を多くすることから負担を感じていたことが分かった。

・*韓国人は、質問を多くする印象(J4)*
・*次々と関連する質問をして答えないといけないと思って、ちょっと負担になった(J1)*

以上、KJ と J の回答をまとめた。次節では、本節の結果について考察を行う。

6.5.3 KJ と J の回答における考察

以上のように、会話後の調査から、KJ と J が受け手としての発話の相違を意識していて、同時に互いの特徴について気付いていることが分かった。しかしながら、質問紙の回答からも分かるように、その特徴は常にプラスの評価に結びつくわけではない。

本章で明らかになったように、KJ は情報共感を多用し、J は情報受容で返答をする特徴があったが、互いにその特徴について知覚している様子が回答から見られた。そして、その特徴から否定的な評価があった。特に KJ は、相違点について具体的に指摘をして評価をしていた。小宮(2001)は、中国・台湾・韓国人を対象に、日本語母語話者の話し方にネガティヴな印象を抱く原因を分析したところ、韓国人は自国の文化や習慣と異なるとき評価が厳しくなると指摘している。確かに、今回の回答からも「リアクションが少ない、あいづちだけする」のように、あいづち詞での応答だけには不満を持つ様子も

見えた。しかしながら、J も同じく KJ の特徴であった「笑い」の応答に対して、「受け流す傾向がある」のように厳しい否定的なコメントがあった。また、韓国語母語話者に関して「韓国人は質問好き」、「相手の領域に踏み込むことが関心の表し方」(任・井出 2004、奥山 2005)と指摘されたが、質問を多くされることから「次々と関連する質問をして答えないといけないと思って、ちょっと負担になった(J1)」と J に否定的な印象を与えることが分かった。

これらの結果から、個人の問題としても見られるが、文化的な相違によることが否定的な印象を与える可能性があることを排除しきれない。互いの違いに気づくことは異文化を理解する契機となり、異文化の人と会話を行う際の配慮にもつながることが考えられる。

6.6　本章のまとめ

本章では、初対面接触場面における韓国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に自己開示後の受け手の発話について分析をした。その結果、KJ と J が受け手としての発話の傾向は変わりないが、多用する項目と量が異なることが分かった。そして、会話後の回答から、自己開示後の受け手の発話に感じる違和感や気づきなどに差があることを明らかにできた。主な結果をまとめると以下の 3 点になる。

(1) 自己開示の受け手の発話としては、J はあいづち詞を使う傾向があり、KJ は感想や意見を言葉で述べようとする特徴がある。

(2)受け手としての情報交換発話では、情報要求を KJ が J より多用した。

(3)母語場面と接触場面の量の変化は、J は KJ が多用する「情報受容」が接触場面で増加し、KJ も接触場面で J が多用する「情報受容」が増加した。

これまでの自己開示の研究は、質問紙による調査や、会話資料を対象としても自己開示の発話だけに焦点が当てられてきた(西田 1998、奥山 2005、全 2010b、一二三 2013)。しかし、2 者間の会話は互いの相互行為によって成り立つものである。そのため、自己開示後の受け手の発話から次の自己開示にも影響があることが推察される。本章でも明らかになったように、KJ と J の受け手の発話には、相違点が見られた。よって、一方だけに焦点を当てるのではなく、相互の発話に焦点を当てて考察することが重要であることが示された。また、互いの受け手としての発話に対する気づきから、求める反応が異なっていた点、否定的な印象を与える問題点について明らかになった。

本章では、自己開示後の受け手の発話について分析したが、実際に自己開示が会話の展開にどのような働きをしているか、断片的な会話だけではなく、談話全体を視野に入れて、7 章で分析する。

第 7 章　話題展開に見られる自己開示

7.1　はじめに

話題としてどのような内容を出すか、どのような内容で自分の情報を与えるか、話題とその内容は自己開示と密接な関係にある。自己開示の量の程度は、どのような話題が出るかという話題の出現傾向と関連している(中山 2003)ように、会話を進行する中で、互いに自己開示を通して情報を交換したそのまとまりが話題になるためである。話題の研究には話題選択のスキーマ、話題導入、話題の展開、話題終了など様々な観点からなされたものがある(宇佐美・前田 1995、三牧 1999、中井 2003a、奥山 2005、楊 2007)。しかし、これらの研究はいずれもある特定の現象に絞られており、話題となった内容全体に焦点を当てた研究は少ない。会話を進めていく中でいかそれが行われているか、その現象を捉えることも重要だが、内容すなわち話題を取り上げその中での自己開示の情報交換を談話全体から分析する必要もあると考えられる。そして、話題を展開して行く中での自己開示のパターンが、やり取りを明らかにする手掛かりになることが考えられる。

本章では、初対面場面の会話において話題の導入、展開とその構造を明らかにすることを目的として、会話全体を視野に入れ、①話題になる導入の仕方と、話題になってからの自己開示と質問の働き②話題の内容③話題展開のパターンの 3 点を中心に分析する。「初対面の相互作用はその後の印象にも影響を与える(小川 2000：174)」重要な場面でもあり、関係構築の特徴を会話全体像から捉えることは有意義がある。

7.2 節では、関連する先行研究と話題の定義、内容の分類、話題展開のパターンのコーディングについて説明する。7.3 節では、話題導入と話題内容を分析する。続く 7.4 節では、話題ごとに区切った自己開示のパターンを分析する。最後に 7.5 節では、本章のまとめを記述する。

7.2　研究の対象と範囲

7.2.1 初対面場面の話題の研究

初対面場面を対象にした話題の研究には、話題開始部、終結、構造、展開方法など特定の要素に注目したものは多くみられるが、焦点が絞られているため全体像が見えにくく、質的に論じられていないのが現状である。その中で、日本語母語話者を対象にした話題の内容に関する研究には、Nakayama(2008)がある。

Nakayama(2008)では、日本語母語話者を対象に初対面時から 8 回もの会話時までにおける話題の種類別出現頻度に関する質的分析をしている。その結果、自己の内面に関する話題が出現した箇所において親密さの高まりがみられることが示されている。

日韓の対照から話題の開始部と内容に焦点を当てた研究には、奥山(2005)、李(2016)が挙げられる。

李(2016)は、日韓の話題提示と導入要素を分析している。質問による話題提示は日本語母語話者の方が多く、自己開示による話題提示は韓国語母語話者の方が多いことが明らかになった。しかし、話題の開始部に焦点を当てているため、話題になってからの流れ、質問と自己開示の役割までは明らかにできていない。

奥山(2005)は日韓の大学生を対象に、実際の会話において話題がどのように導入されるか、40 分の会話から 5 分ごとに区切り自己開示の量と質問形式の 2 点から分析している。質問による話題提示は日本語母語話者の方が多く、自己開示による話題提示は韓国語母語話者の方が多く現れるという結果が得られた。これは、李(2016)と同様である。しかし、自己開示には男女の差が見られ(榎本 1997)、会話調査の対象者が一定してないことが、結果に影響したことも考えられる。

本章では、上記の内容を踏まえた上で、先行研究からさらに視野を広げ、話題の導入部だけではなく、「話題の種類よりも自己開示のやり方や相手への情報の求め方で違和感や誤解が起こる可能性(熊谷・石井 2008：93)」もあるため、話題になってからの自己開示と質問も視野に入れて、話題の展開と構造も考察する。また、本研究においては、

関心は開示動機ではなく情報交換の内容と相互行為の実態解明にあるため、初対面会話の特に冒頭で頻繁にみられる相互に関する情報交換に注目する。

7.2.2 話題の展開に関する研究

話題の展開と構造の研究には大きく、話者と聞き手の話者間交替とみなして分析したものと(宇佐美・前田 1995、楊 2015)、情報提供者と要求者のやり取りから分析したものがある(佐々木 1998、中井 2003a、大谷 2015)。

表 7-1　話題展開の先行研究

分析対象	日本語母語話者対象研究	異文化間対照研究			
先行研究	宇佐美・前田 1995	佐々木 1998	中井 2003a	大谷 2015	楊 2015
分析観点	聞き手/話し手	情報提供/情報要求			聞き手/話し手
話題導入・終了	質問—応答型、相互話題導入型		情報要求—応答、情報提供/同意要求—応答/情報要求		
話題展開		インタビュースタイル、話し合いスタイル		Interactive、Duet、Interactiv・duet 混合型、モノログ	役割固定型、協調的役割交替型、役割回帰型、話し手役割競合型

これらの研究は、日本語母語話者の特徴を明らかにしたものと、言語間の対照を目的に、母語場話者と非母語話者を扱ったものがある。その内、日本語母語話者を対象にした宇佐美・前田(1995)では、会話の参加者を話者と聞き手に分け、話題になってからの話題導入のパターンを「質問—応答型」と「相互話題導入型」の 2 つに分けた。同じく母語話者を対象に、情報提供者と情報要求者に分けて分析した中井(2003a)では、「情報要求—応答」と「情報提供/同意要求—応答/情報要求」を提示している。両研究のパターンの定義は異なるが、日本語母語話者を対象にした研究では、いずれにおいても 2 つのパターンが提示されている。しかし、話題の導入と終了部に焦点を当てているため、話題を展開する過程でのやり取りまでは検討されていない。

次に、言語間の対照と接触場面の話題展開の研究には、佐々木(1998)、大谷(2015)、楊(2015)が挙げられる。

楊(2015)は、聞き手と話し手の観点から日本語母語話者と中国語母語話者を対象に分析している。話題の展開を聞き手、話し手に分けて分析し、聞き手と話し手が固定されている「役割固定型」、聞き手と話し手の役割を切り替えた「協調的役割交替型」、聞き手と話し手の役割を交渉するやり取りを経て、最終的に元の役割に戻る「役割回帰型」、参加者たちが競合して話して役割を取ろうとしている「話し手役割競合型」、4 つの展開パターンを見出している。そして中国語母語話者には話し手役割競合型が多く現れ、初対面の距離の取り方が日本語母語話者とは異なり、相手との距離に配慮するより親しさを強調するストラテジーを使うと指摘している。

本研究の分析視点と類似している佐々木(1998)では、質問をする人と応答をする人が分かれる「インタビュースタイル」と、話題について互いに意見を述べ合う「話し合いスタイル」の 2 つにまとめている。また、大谷(2015)は、日本語母語話者と英語母語話者を対象に、3 人の会話参加者が話題展開にどう貢献するかを実際の会話から分析している。展開パターンには、「働きかけ型」の interactive、duet、混合(interactive と duet)、「非働き型」のモノログ、4 つに分けている。4 つのパターンの中から、日本語母語話者

は interactive 型が最も多いいと指摘している。しかし、佐々木(1998)と大谷(2015)はいずれも日本語母語話者と非母語話者を対象にしており、非母語話者の言語については統制されていない。また、情報提供と要求の観点から分析しているが、話題関与の方法からの分析であるため、情報提供者つまり自己開示と見られる観点からの検討は十分とは言えない。会話を進行させる上で、話題を維持、遂行するためには情報提供や質問、応答は必要不可欠である。よって、展開していくパターンを話者交替や情報の提供、要求者の視点からだけではなく、話題のまとまりになる自己開示の働きからも詳しく見る必要があると考えられる。

7.2.3 定義と認定基準

7.2.3 では定義と分析方法を示す。7.2.3.1 は話題の定義、7.2.3.2 は話題導入の認定について、7.2.3.3 は、話題導入後の自己開示と質問の認定、7.2.3.4 は話題の内容分類、7.2.3.5 は話題展開パターンのコーディング方法を提示する。

7.2.3.1 話題の定義

話題は談話における概念である。本研究では話題の流れと話題に現れる全ての項目を捉えるため、村上・熊取谷(1995)、楊(2007)、河内(2009)、三牧(2013)と同じ立場から「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」を話題とする。導入された後に展開されなかった項目は除外した。

7.2.3.2 話題導入の認定

話題の導入には、質問や自己開示によるものが多いと指摘されている(中井 2003a、奥山 2005、李 2016)。話題導入の認定は、新たな話題になってからの導入を考察している。具体的な例は以下の通りである。例(1)は、話題導入の質問である。例(2)は、話題導入の

自己開示の例である。例(1)では、01 行目で住まいについて話をしているのに続けて、05 行目から生活の話について J6 が新たな話題を導入している。この 05 行目は、話題導入質問になる。例(2)は、01 行目から 04 行目まで自己紹介の内容が終わり、05 行目から J2 が自己開示で話題導入をしている例である。

(1)話題導入質問

01　J6：へえ[→]私も「場所名」住んでて、学部の時なんであの辺は飲食店がいっぱい

02　KJ6：そうですよね

03　J6：あそこってなんかありますよね。韓国料理屋さん、焼肉屋さんだったかな

04　KJ6：あ、はいはいはい

→05　J6：バイトとかしてますか？　　(話題導入質問)

06　KJ6：あ、してないです。

(2)話題導入自己開示

01　KJ2：何年ですか？

02　J2：2 年生です。

03　KJ2：うん、、自分は 4 年生です。

04　J2：4 年

→05　J2：自分は、もう 3 月に卒業します。(話題導入自己開示)

7.2.3.3 話題導入後の自己開示と質問

奥山(2005)と李(2016)は、日韓を対象に話題開始時の導入だけに焦点を当てているため、話題になってから後の相互行為による自己開示と質問の役割までは分析できていない。従って、本研究では話題導入と話題になってからの役割まで視野に入れて分析する。話題導入後の自己開示と質問は、すべての自己開示と質問ではなく、話題になってから1 つの大話題を変えないまま、小話題に派生させるために情報を増やしていく中で現れた自己開示と質問を対象とする。

例(3)は、話題導入後の小話題を派生のために用いられた質問になる。例(4)は、話題導入後、大話題を派生させるための自己開示に含まれない例である。

(3)大話題から小話題と派生していくため現れた自己開示と質問

次の事例では、大きな話題すなわち大話題は留学である。留学という大話題の枠から留学のきっかけ、留学した場所についてなどの小話題[48]に分けられていく。

まず、01 行目から、留学のきっかけについて話が始まる。そして、大話題は変わらず留学先について話し合うが、06 行目から留学先の中で行ったことがある場所について話が出る。留学先であるロシアという大きな話題からは変わりないが、ロシアの何について話すか話題を派生させていく例である。

→01　J6：留学したんですっけ？　　**(話題導入質問)**

02　J5　：そうですね。モスクワに 1 年

03　J6　：私この間行ってきました。

04　J5：あ、そうなんですか⁇

…中略

05　J6：あ、そうなんだ。

---

[48] 7.2.3.4 節、話題の内容分類で詳しく説明する。

→06　J5：どこか行きました？　　**(小話題質問)**

07　J6：私は、10 月に「場所名」で「場所名」のあの 20 人ぐらい、毎年行っていて

08：あ、毎年

(4)自己開示、質問ではあるが分析対象にならない自己開示と質問

01 行目で話題が開始して次に 02 行目で返事として自己開示をしているが、これは質問に対する答えであって、話題を広げるための自己開示ではないため、話題派生のための自己開示には含まない事例である。

→01　KJ2：家族と一緒に住んでますか？　**(話題導入　質問)**

→02　J2：あ、今は「場所名」に住んでて　　**(自己開示)**

7.2.3.4 話題の内容分類

話題は階層性があり、複数の関連する話題がより大きな話題としてのまとまりを形成する(村上・熊取谷 1995、河内 2009)。従って、大きな 1 つの話題から次の話題に移る前に、大きな話題の内容が広がって形成される場合もある。そこで、大話題から派生した話題、即ち 1 つの話題が派生していくことを考慮して分析するため 1 つの話題を大きな談話とみなして、その中での大話題とそれに関連して派生した小話題に分類して分析した。本研究では、1 つの話題が複数の小話題から構成される場合、その連鎖のまとまりが大話題になる。以下の表 7-2 は大話題と小話題の例を示す。

表 7-2　題の分類

大話題		小話題
1	日本の学校の暖房	
2	韓国の学校生活	レポート
		レジュメの書き方
		本
		製本
		プリント

表 7-2 は、2 つの大きな話題がある。大話題は日本の学校生活と韓国の学校生活になる。日本の学校生活については、暖房の話が出てきて互いに学校の暖房の話をする。2 つ目の大話題は韓国の学校生活である。韓国の学校生活でのレポート、韓国の学校生活でのレジュメの書き方、韓国の学校生活での本、韓国の学校生活での製本、韓国の学校生活でのプリントについて話されている。ここでは韓国の学校の生活と関連した内容が小話題になり、次々と韓国の学校の生活に関連する話が出て大話題が続いていく。このように、大話題からの小話題を見ることで、1 つの大話題が派生していく様子を見ることができる。

7.2.3.5 話題の構造パターンのコーディング

本研究でのパターンは、大話題から次の大話題までのやり取りを扱う。しかし、大話題が小話題で派生する場合、小話題になった話題を 1 つの話題とみなし分析した。以下の会話は、発話のコーディングの例になる。→のように、質問か自己開示を認定した後、パターンを分析した。あいづち、応答の発話はラベリングをしていない。

→01　J2：え、なんか趣味とかありますか？　**質問　（話題導入）**

→02　KJ2：あ、趣味⁇趣味は、運動が好きで、、　**自己開示**

　03　J2：はい。

→04　KJ2：一応、ピギュアスケートやってるんですけど　**自己開示**

→05　J2：え、すごい。え、サークルとかは？　**質問**

→06　KJ2：入ってないんです　**自己開示**

→07　J2：自分でとか？　**質問**

→08　KJ2：うん。昔から韓国でやってたから　**自己開示**

本章では、以上の認定方法に基づいて、初対面場面の会話データの、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の話題導入と展開に焦点を当てて分析する。

7.3　話題導入方法と内容の特徴

本節では、7.3.1 で母語場面における話題導入の質問と自己開示について、7.3.2 で接触場面における結果を示していく。

話題導入と内容分類の判断には、韓国語母語話者 2 名、日本語母語話者 2 名に協力してもらった。4 人には、文字化したスクリプトと音声を渡して、判断してもらった。まずは、話題の定義と認基準を説明して、前後の関係から大話題として中に小話題を含んでいるものについて説明した。その後、話題の導入部と話題の切れ目、話題のタイトルを書いてもらった。2 人以上が一致したものを話題として含め、判定した。その結果、日本語のデータの場合、一致率が 90%、韓国語のデータの場合、92%であった。判断が一致してない部分においては､筆者と協力者の間で意見交換をして最終的な判断をした。

7.3.1 KJ と J の母語場面における話題導入と内容の特徴

話題導入を自己開示と質問の 2 つに分けた上で、KJ の母語場面における話題導入及び大話題から小話題が派生する時に現れた自己開示と質問の出現数を表 7-3 に示した。表 7-4 は、同じく KJ に現れた大話題と小話題の内容である。

表 7-3 から KJ の母語場面の結果を見ると、話題導入の自己開示が 17 回、話題導入の質問が 35 回と、話題導入の際には、質問の出現数が多い。つまり、話題導入の時は、自己開示より質問が多く現れ、奥山(2005)、李(2016)と同様の結果であった。また、大話題が複数の小話題に派生されていく場合に現れた自己開示と質問の出現数を見ると、小話題導入自己開示が 9 回、小話題導入質問が 11 回と、合計 20 回出現している。KJ の自己開示と質問の出現数は、話題導入の時が 52 回で、小話題へと派生させていく時の 20 回より約 2.6 倍多いという結果であった。

表 7-3　KJ の母語場面における自己開示と質問

	KJ1,KJ2	KJ3,KJ4	KJ5,KJ6	KJ7,KJ8	合計	
話題導入自己開示	5	4	4	4	17	52
話題導入質問	8	9	10	8	35	
小話題導入自己開示	3	1	2	3	9	20
小話題導入質問	2	4	3	3	11	

表 7-4　J の母語場面での大話題

構成	話題	構成	話題
KJ1,KJ2	1自己紹介、2共通友人、3大学、4授業、5高校時代、6留学、出身7学校、8運動、9韓国の運動選手、10交換留学、11料理 12日本生活：①居住地②人間	**KJ5,KJ6**	1自己紹介、2*留学、3日本の生活、4買い物、5専攻、6卒業、7日本のアパート、8生活の苦悩、9奨学金、10自殺 11*研究①方法②内容③投稿

	関係③苦痛$_{13}$日本人：①性格②考え方(大話題：13 項目、複数の小話題：2 項目)		$_{12}$進路①悩み②就職先(大話題：14 項目、複数の小話題:2 項目)
KJ3,KJ4	$_{1}$自己紹介、$_{2}$苗字、$_{3}$歌手、$_{4}$小学校時代、$_{5}$アイドル、$_{6}$高校時代、$_{7}$共通知人、$_{8}$専攻、$_{9}$*研究[49]、$_{10}$卒業、$_{11}$論文 $_{12}$Kpop:①好きな人②好きになったきっかけ $_{13}$研究：①投稿②方法③支援金(大話題：12 項目、複数の小話題：2 項目)	**KJ7,KJ8**	$_{1}$自己紹介、$_{2}$専攻、$_{3}$*指導教員、$_{4}$共通知人、$_{5}$日本の生活、$_{6}$趣味、$_{7}$映画、$_{8}$地震、$_{9}$大学 $_{10}$指導教員：①研究分野②厳しさ$_{11}$研究：①テーマ②方法 $_{12}$日本の生活：①苦痛②出来事(大話題：12 項目、複数の小話題：3 項目)

次に、表 7-5 から J の母語場面の結果を見ると、話題導入の自己開示が 4 回、話題導入の質問が 15 回と、話題導入の際には、質問の出現数が多い、奥山(2005)、李(2016)と同様の結果が得られた。そして、大話題が複数の小話題に派生していく時に現れた自己開示と質問の出現数を見ると、小話題導入自己開示が 37 回、小話題導入質問が 12 回と、合計 49 回出現している。この結果から、J の自己開示と質問の出現数は、話題導入の時が 19 回、小話題へと派生させていく時 49 回と、小話題へと派生させる時に約 2.5 倍多い結果であった。以上の結果から、KJ は、話題を導入するために自己開示や質問が現れ、J は、話題を派生させていくために自己開示と質問が現れることが分かる。

[49] *は、2 回現れている話題である。

表 7-5　J の母語場面における自己開示と質問

	J1,J2	J3,J4	J5,J6	J7,J8	合計	
話題導入自己開示	2	1	1	0	4	19
話題導入質問	4	5	2	4	15	
小話題導入自己開示	6	10	12	9	37	49
小話題導入質問	5	2	3	2	12	

表 7-6　J の母語場面における大話題

構成	話題	構成	話題
J1,J2	1自己紹介、2住まい、3生活 4*専攻：①選んだ理由②選んだ経由③内容④入学試験⑤先生 5部活：①活動②公演③練習④部員⑤場所公開⑥利用方法 (大話題：6 項目、複数の小話題：2 項目)	J5,J6	1自己紹介、2専攻：①内容②選んだきっかけ3留学：①きっかけ②場所③天気④料理⑤泥棒⑥人の性格⑦泥棒経験⑧大統領⑨政治⑩環境⑪まつり⑫物価⑬ファッション (大話題：3 項目、複数の小話題：2 項目)
J3,J4	1自己紹介、2生活、3通学 4研究室①国籍②使い方③雰囲気5研究①内容②方法③調査 6論文①投稿②発表③内容④補助金⑤実験⑥資格(大話題：6 項目、複数の小話題：3 項目)	J7,J8	1自己紹介、2専攻 3出身地：①有名人②方言③場所④料理⑤天気⑥祭り 4将来：①就職先②悩み③職業④卒業時期⑤予定(大話題：4 項目、複数の小話題：2 項目)

以上、KJ と J の話題導入に現れる自己開示と質問、大話題が小話題に派生する時に

現れる自己開示と質問の数、話題の内容について分析した。

まず、話題導入に現れる自己開示と質問は、KJ には導入するために多く現れ、J では話題を派生していくため現れている。奥山(2005)では、韓国語母語話者はごく早い段階で質問による話題導入を駆使し、相手に関する情報をできるだけ多く入れ、その後は話題をじっくりと絞りこみ深めて行く一方、日本語母語話者は安定した話題導入を意識しながら会話を遂行していると指摘している。本研究の結果でも、KJ は導入のために自己開示と質問を行い、J では導入時より話題を派生させる時に自己開示と質問が多く現れることから、奥山(2005)を裏付ける結果であった。

次に、話題の種類は、KJ は合計 53 項目、J は 19 項目で、KJ が J の約 2.7 倍であった。そして 1 つの大話題を小話題へと派生し話題の数は、KJ も J も 9 項目と同様であったが、大話題の数から比較すると KJ は 53 項目の中 9 項目、J は 19 項目の中 9 項目である。この結果から、KJ は話題を進行させていくよりも相手の新情報を多く収集しようとする特徴があり、それに伴って自己開示の数も多くなることが考えられる。一方 J が、話題を多くして相手の情報を収集するより、話題の数は少ないが、1 つの話題から相手の情報を徐々に進展させていくことが考えられる。よって、KJ が初対面の場面から相手と親密になるため距離を保たず接しようとすること、J は徐々に会話を進展させていくことから、自己開示の働きに差があり、話題を形成していくプロセスが異なっていることが考えられる。

最後に、話題の内容は、韓国語母語話者と日本語母語話者の母語場面を比較した三牧(1999)の指摘のように、大学所属という類似した所属の人が会話をしているため、KJ と J の話題の内容には共通している話題が多かった。しかしながら、評価的自己開示に当たる内容に着目すると、J では、1 組(KJ7、KJ8 の会話)だけが悩みついて話している一方、KJ の 4 組の中 3 組から、苦悩(KJ1、KJ2 の会話と KJ7、KJ8 会話)や悩み(KJ5、KJ6 の会話)といった話題で会話を行っていることが観察された。初対面から関係形成に至るまでの会話における話題を分析した谷(2011)では、日本語母語話者は初期の段階

ではプライベートな話題を選択しないと指摘している。また Hall(1966)は、文化が異なればその距離感覚も変化すること、さらには、文化や民族によって「公共」や「プライベート」という概念そのものまで異なる可能性があると述べる。本研究では、話題の種類においては KJ と J は類似しているが、話題の選択よりもその話題における内容が重要であり、その内容によってプライベートな話題にも成りうることが示された。この結果から、KJ と J が考えるプライベートな内容は異なる可能性が考えられる。次節では、接触場面における結果を示す。

7.3.2 KJ と J の接触場面における話題導入と内容の特徴

表 7-7 から J の接触場面の結果を見ると、話題導入の自己開示が 20 回、話題導入の質問が 46 回と、話題導入をする際、質問の出現数が多い。また、大話題が複数の小話題に派生していく場合に現れた自己開示と質問の出現数を見ると、小話題自己開示が 21 回、小話題質問が 44 回と、合計 65 回出現している。この結果から、接触場面の自己開示と質問の出現数は、話題導入の時が 66 回で小話題へと派生させていく時が 65 回と、顕著な差は見られなかった。

表 7-7　KJ と J の接触場面における大話題

		KJ1 J1	KJ2 J2	KJ3 J3	KJ4 J4	KJ5 J5	KJ6 J6	KJ7 J7	KJ8 J8	合計		
話題導入 自己開示	KJ	3	2	2	4	3	2	1	3	13	20	66
	J									7		
話題導入 質問	KJ	4	6	5	5	7	6	7	6	20	46	
	J									26		
小話題 派生 自己開示	KJ	2	3	3	3	3	2	2	3	9	21	65
	J									12		
小話題 派生質問	KJ	5	6	5	4	6	7	5	6	19	44	
	J									25		

表 7-8　KJ と J の接触場面における自己開示と質問

KJ1, J1	1自己紹介、2日本生活、3韓国、4旅行5*留学：①理由②試験6大学入試：①様式②生活③塾④難しさ⑤時期(大話題：7 項目、複数の小話題：2 項目)	KJ5, J5	1自己紹介、2住まい、3出身地、4韓国男性、5韓国語、6アパート①契約②不便さ7*研究①内容②方法③悩み8食べ物①韓国料理②有名なお店9就活①悩み②時期(大話題:10 項目、複数の小話題:4 項目)
KJ2, J2	1自己紹介、2日本語、3専攻、4食べ物、5高校時代6趣味：①お金②場所③種類7部活：①内容②時間③活動8専攻：①内容②選んだ理由③先生の研	KJ6, J6	1自己紹介、2留学、3言語、4ドラマ、5俳優、6食べ物①韓国料理②日本料理7就職①悩み②活動③時期8将来①先生②会社③進学④住む場

	究(大話題：8 項目、複数の小話題：3 項目)		所(大話題：8 項目、縮数の小話題：3 項目)
KJ3, J3	1自己紹介、2苗字、3作名法、4韓国の習慣、5論文6研究室①人数②雰囲気③机7研究①内容②調査③分量④悩み⑤進み具合(大話題：7 項目、複数の小話題：2 項目)	KJ7, J7	1自己紹介、2論文、3携帯、4テレビ5学校生活①食堂②授業6*指導教員①研究テーマ②業績③授業7学会①発表②内容(大話題：8 項目、複数の小話題：3 項目)
KJ4, J4	1自己紹介、2住まい、3通学、4方言、5専攻、6出身地①場所②食べ物7*留学③理由④場所⑤お菓子8研究⑥内容⑦方法(大話題：9 項目、複数の小話題：3 項目)	KJ8, J8	1自己紹介、2発音、3漢字、4住まい5生活①睡眠②習慣6*バイト③場所④内容⑤時間7旅行⑥場所⑦食べ物8留学⑧理由⑨試験(大話題：9 項目、複数の小話題：4 項目)

接触場面では、話題導入の時と、大話題を小話題へと派生させるための自己開示と質問には顕著な差は見られなかった。しかし、話題を導入する時も、話題を派生する時も自己開示より質問が約 2 倍現れていた。

次に、話題の内容からは、母語場面で現れなかった話題が見られていた。話題の数は合計 66 項目で、1 組当たり平均 8 個であった。また、1 つの話題を派生する様子は接触場面でも見られたが、KJ と J の母語場面のように顕著な差は見られず、話題を提示して新情報を増やすこと、1 つの話題を派生させ情報を増やすこと、いずれの進行も平等に使われている結果であった。

この結果から、接触場面では質問を通して話題を導入し、また派生することが明らかになった。異文化同士の会話は、同文化の人との会話と異なって、互いに持つ共有知識が母語場面の時より少ないことが考えられる。また、情報を増やすことを自己開示ではなく質問をすることで、接触場面では意識的に相互理解を確立する責任を母語話者が働

かせて(ファン 2006)、J が質問で KJ に働きかけたことが考えられる。また、それによって、KJ は J の影響を受け、母語場面での特徴が接触場面では調整されたことが考えられる。次の 7.4 では話題ごとに区切った自己開示のパターンを分析する。

7.4 KJ と J の話題別に区切った自己開示のパターン出現数

本節では、実際の話題がどのように展開して構造をなしているかを分析する。そのために、談話全体を分析対象として話題ごとの構造の変化、特に本研究ではどのように話題になって会話を展開させていくか、情報の「要求」と「提供」、つまり質問と自己開示の観点から話題の展開に関わる変化を分析する。話題導入を「質問」か「自己開示」のどちらで行い、その話題がどのように展開され、話題を存続しているか、質問と自己開示の発話の相互行為から構造を見る。話題展開パターンの判断は韓国語母語話者 2 名、日本語母語話者 2 名に協力してもらった。4 人には、3 つのパターンを説明した後、文字化したスクリプトと音声を渡して、判断してもらった。その結果、日本語のデータの場合、一致率 89%、韓国語のデータの場合、93%であった。判断が一致してない部分においては、筆者と協力者の間で意見交換をして最終的な判断を行った。

7.4.1 話題展開のパターン

会話参加者の話題への関与方法には大きく 3 つのパターンが見られた。これら 3 つのパターンは参加者の相互行為のあり方に基づいて認めることができる。以下にそれぞれのパターンの会話を示す。

(1) 自己開示一方型

まず、「自己開示一方型」である。このパターンは、一方の参加者によって話題が導入され、もう一方がその応答として自己開示を続けて連鎖し、話題を導入した方はあいづ

ちをして相手の話を聞いているというものである。このように、片方の話者が「話し手」となって自分の情報を語っていくパターンである。このパターンでは、話題について自己開示をし続ける「話し手」と、その自己開示を促す「聞き手」といった明確な役割がある。

[自己開示一方型の会話例] (相手に自己の情報を一方だけが語る)

→01　J1：どちらですか？　**質問　(話題導入)**

→02　J2：私は、まさにここで、、　**自己開示**

03　J1：あ、そうなんですね。

→04　J2：ずっとここに住んでて、今は、車で通っているんですが、前までは、自転車で通ってて、、　**自己開示**

05　J1：へ～そうなんだ。「大学名」に行くぞみたいな

→06　J2：なんかそこまで考えてはなかったんですけど　**自己開示**

07　J1：ふ―ん

→08　J2：なんか日本語勉強したいって思って、で、私は「大学名」全然詳しくなくて、ま、大学あるのは知ってたんですけど、、　**自己開示**

09　J1：うんうん

(2)　質問一方型

次に、質問一方型形式は、片方の話者が相手に質問をし続け、相手話者はそれに対する応答として自己開示をするパターンである。具体的には、片方の話者が自己開示をして、それについて片方は質問をすることで会話が進んでいく。このパターンでは、相手の情報があまりない時に、相手の自己開示に対して質問をすることで、相手の情報を引き出すことができる。

[質問一方型の会話例] (相手に質問をし続ける)

→01　J2：え、なんか趣味とかありますか？　**質問　(話題導入)**

→02　KJ2：あ、趣味⁇趣味は、運動が好きで、、　**自己開示**

03　J2：はい。

→04　KJ2：一応、ピギュアスケートやってるんですけど　**自己開示**

→05　J2：え、すごい。え、サークルとかは？　**質問**

→06　KJ2：入ってないんです　**自己開示**

→07　J2：自分でとか？　**質問**

→08　KJ2：うん。昔から韓国でやってたから　**自己開示**

(3)　自己開示双方型

自己開示双方型は、自己開示を交互にし続け話題を派生させている例である。このパターンは、互いの情報を交互に交換して話題を成立させていくため、最も互いの情報を収集できるパターンと見られる。

[自己開示双方型の会話例] (互いに自己開示をする)

→01　KJ3：한국에서는 덕질을 할 수 없다는 나는 지금도 하고 있는데 저는「歌手名」좋아해요　**自己開示　(話題導入)**

(韓国では強烈なファンとかできない。私は今もやっています。「歌手名」が好きです。)

→02　KJ4：나도 좋아해요　**自己開示**

(私も好きです)

→03　KJ3：저는 만화 제일 처음에 나왔을때　**自己開示**

(私は漫画で一番最初に出た時から好きだった)

04　KJ4：엄청 오래됐네　(長いね)

→05　KJ3：저는「年」년 정도 부터 좋아했어요　　**自己開示**

(私は「年」ぐらいから好きでした)

→06　KJ4：저는「年度」년에 1 년 휴학하고 돌아왔을때 낙이 없는거에요 그래서 시작 했다는　　**自己開示**

(私は「年度」1 年休学して戻ってきたら楽しみがなくて始めるようになって)

→07　KJ3：대박이다「歌手名」놔두고 이러면 안되는데　　**自己開示**

(すごい「歌手名」がいるのに、こんなことしていちゃいけないのに)

08　KJ4：에이 괜찮아요 뭐어때 (そんなのいいですよ。構わなくて)

以上の 3 つのパターンを基に、7.4.2 では KJ と J の母語場面、7.4.3 では接触場面における展開パターンの出現数を比較する。

7.4.2 KJ と J の母語場面と接触場面における話題展開パターンの出現数

表 7-9　母語場面の展開パターン出現数

	KJ	J	検定
自己開示一方型	18(25%)	43(63%)	**
質問一方型	20(27%)	15(22%)	
自己開示双方型	35(48%)	10(15%)	**
合計	73(100%)	68(100%)	

**：p＜.01

まず、母語場面の総合的な使用率を見ると、KJ は、「自己開示双方型」(35 回、48%)が最も多く、J は「自己開示一方型」(43 回、63%)が最も多く使用されていた。佐々木(1998)では、日本語母語話者は「インタビュースタイル」つまり、本研究での「質問一方型」を多く使用すると指摘している。しかしながら、本研究では自己開示を一方的に行う語りのようなモノローグ(大谷 2015)がもっとも多く、43 回・63%を示していた。KJ と J の話題展開パターンの出現頻度において、カイ二乗検定で分析したところ、有意差が見られた($\chi^2(2)27.9, p<.01$)。特に、有意差が見られた「自己開示一方型」と「自己開示双方型」に注目したい。KJ の場合、「自己開示双方型」以外のパターンは「質問一方型」が 20 回 27%で、「自己開示一方型」18 回 25%と、「質問一方型」と「自己開示一方型」には顕著な差が見られない。一方 J は、「自己開示一方型」の次に「質問一方型」(15 回、22%)、「自己開示双方型」(10 回、15%)と、「質問一方型」を除いて、KJ と J の間で多用するパターンが逆転していることが分かる。

KJ に最も多く現れた「自己開示双方型」のパターンは、話題を導入した後、互いに自己開示をしつつ話題を成立させていくことであり、互いに情報を収集できるパターンである。自己開示を互いにして話題になることから、両者が積極的に情報を交換していると考えられる。一方、J に最も多く現れた「自己開示一方型」のパターンは、聞き手としてあいづち詞、感嘆発話で応答し、相手に自己開示を要求することもなく、自己開示をすることもない共話的スタイル[50](申 2006)のパターンである。互いの情報は収集できないが、一方が自己開示を連続して行うことになるため、1 つの話題における一方の情報を次々と得ることができるパターンと考えられる。これらの結果から、KJ は積極的に情報を交換して話題を展開させ、J は 1 つの話題から多くの情報を増やすことで話題を展開させていくことが明らかになった。次に、KJ と J の接触場面に現れた展開パターンの結果を表 7-10 に示す。

---

[50] 申(2006)は、日本語母語話者は情報提供者に協調する形を取り、情報提供者自ら多くの情報を開示していくような仕向けをすると指摘している。

表 7-10　接触場面の展開パターン出現数

	接触場面		検定
自己開示一方型	46(35%)		
質問一方型	60(46%)	KJ 25(42%)	*
		J　35(58%)	
自己開示双方型	25(19%)		
合計	131(100%)		

*：p＜.05

接触場面でのパターンは、「質問一方型」が最も多く現れている。接触場面における話題展開パターンの出現頻度についてカイ二乗検定で分析したところ、有意傾向が見られた($\chi^2(2)10.2, p<.05$)。KJ と J の母語場面では、「質問一方型」には KJ・J 間の差があまり見られなかったが、接触場面では最も多い使用率を示している(60 回、46%)。その次に使用率が高いのは、「自己開示一方型」(46 回、35%)、「自己開示双方型」(25 回、19%)の順である。ここでは特に、有意差が見られた「質問一方型」に注目したい。「質問一方型」は、KJ と J、合わせて 60 回出現している。そこで、どちらの方から「質問一方型」で話題を展開しているか見たところ、KJ は 25 回 42%、J は 35 回 58%使用されていた。俣野(1996)は、接触場面性に対する意識が強い場合、母語話者は非母語話者をリードすることが生じると指摘されている。また、佐々木(1998)は、異文化間コミュニケーションの場面で、母語話者が非母語話者に質問をして情報要求をしていく「インタビュースタイル」を取る傾向があると指摘している。今回の結果からも、「質問一方型」で話題を展開させていくことから、俣野(1996)、佐々木(1998)を支持する結果であったと考えられる。母語場面では、KJ は「自己開示双方型」が最も多く、J は「自己開示一方型」を最もよく用いるという結果であったが、接触場面では、J が「質問一方型」でリードする様子が窺えた。J は、接触場面で相手の情報を集めてから共通話題を探そうとする

こと、KJ の自己開示を引き出して話題を広げていくことが考えられる。

以上話題展開のパターンを自己開示と質問の連鎖から分析した。KJ と J の母語場面で最も異なった点は、KJ では「自己開示双方型」が多く現れて、J では「自己開示一方型」が多く出現したことである。韓国語母語話者と日本語母語話者の話者交替のターンの数と発話数を比較した姜(2005)は、韓国人は積極的に発言を行い、話し手になることが多く、日本人は相手の話を聞く聞き手に回ることが多くターンの取り方に差があると指摘している。また、「自己開示双方型」は、相手と親密になるために深い自己開示をし、同程度の開示をする(深田 1998)ことから、初対面の会話から急速に相手との距離を進展させようとして現れたパターンだと考えられる。一方、J が多く使用した「自己開示一方型」は、相手の話をさえぎることも、その領域を犯す危険もなく相手のネガティブ・フェイス[51]を守る(大谷 2015)ことができるため、相手との対話的スタイル[52](申 2006)を重視する KJ とは異なって、多く現れたと考えられる。

相手と親密になろうとすることは、同文化の人でも異文化の人でも同じであるが、KJ と J は初対面の場面からその意思を表す方法が異なることが明らかになった。互いに関係形成の仕方は異なるが、親密になろうとしていることは共通しており、その差は初対面の場面で顕著に現れることが考えられる。しかし、接触場面では話題を展開するパターンが異なり、一方が自己開示を行う、互いに自己開示を行うより、一方が聞き手になって相手からの情報を聞き出し、情報を増やしていくことが明らかになった。

---

[51] 相手の領域に踏み込むことや直接名指すことを避け、遠隔化的表現と間接的表現によって、相手を遠く置き、事柄に触れないようにする「表現の敬避性」を特徴とする(滝浦 2008)。

[52] 申(2006)では、韓国語母語話者は相手に直接情報を引き出し、それについての自分の考え方をはっきり表現しながら積極的に談話展開に参加すると指摘している。

7.5　本章のまとめ

本章では、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の母語場面及び接触場面での話し方から、話題導入と話題になってから話題を派生していく中での自己開示の働きと、話題の展開パターンを明らかにした。その結果、KJ と J の間で話題を派生させていく方法と話題の展開パターンに差が見られた。具体的な結果は次のようになる。

自己開示と質問を KJ は話題導入のため多く使い、J は話題になってからその話題をさらに派生させるために多く使うという違いがあった。また、KJ は話題の種類も多く、話題を進行させていくより、相手の新情報を多く収集しようとする特徴があった。一方、J は、話題を多くして相手の情報を収集するより、話題の数は少ないが、1 つの話題から相手の情報を徐々に進展させていくことが推察された。しかし、接触場面では、母語場面に出現した話題が同様に出るが、互いの共通点を探すため母語場面では出現しない話題の内容を取り上げようとすることが推察された。

話題を展開する際のパターンは、KJ は相互の情報を多く集められるパターン「自己開示双方型」を多く使用して、J は相手の情報をじっくりと収集していくパターン「自己開示一方型」を多く用いていた。KJ と J は、情報を集めて話題を進行させる仕方が違うことが明らかになった。以上の結果から、KJ は会話を急速に進行させること、J は安定的な進行をすることが明らかになった。しかし、接触場面では「質問一方型」が多く出現して、KJ と J の母語場面での進行とは異なり、相手に質問をして働きかけるように情報を集め、話題を展開していくことも明らかになった。

自己の情報を相手に言葉で与えることである自己開示が、複数の発話が集まって 1 つの話題として成り立っていることは KJ も J も共通している。しかし、本章で明らかになったように、話題を進行させていく中で自己開示にはパターンがあり、多く使われるパターンが両者で異なっており、特に初対面場面でそれが顕著に現れる。このような KJ と J の相違点から、どのような開示の進行型がより心地よく感じられるのか、また、ど

のように互いに情報を集めつつ開示して会話を進めていくのかを知ることが異文化間のコミュニケーションの理解につながって行くのではないかと思われる。

KJ と J の母語場面での様子は異なり、さらに接触場面と母語場面では異なる会話構築のスタイルが見られた。異なる文化を背景に持つ相手と会話をする際には、このような違いを把握し、理解しておくことが必要であり、この理解に基づいて会話を相互に構築していくことが重要だと考えられる。

第 8 章　本研究のまとめと今後の課題

第 8 章では、本研究の分析をまとめ、総合的な考察を行い、最後に今後の課題を述べる。

8.1　本研究のまとめ

本研究では、韓国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に、自己開示の発話と自己開示後の受け手の発話、談話の中での自己開示の機能とパターンを分析した。以下、各章における議論をまとめ、概要を示す。

まず、第 1 章「研究の背景と目的」では、本研究における背景と目的を述べた。コミュニケーションにおいて自己開示がなぜ重要なのか、そして異文化間の自己開示の研究について述べた。最後に、各章の概要と本研究の構想図を示した。

第 2 章「先行研究と本研究の位置づけ」では、コミュニケーションにおいて普遍的な要素と考えられる「不確実性の理論」を紹介した。そして、自己開示の分析に対するアプローチとして心理学、異文化コミュニケーション、社会言語学・談話分析の関連性を説明した。次に、自己開示の研究範囲とその測定法に関する先行研究の知見をまとめ、本研究との関連を示した。最後に、本研究と関連する先行研究を振り返り、それらを踏まえた本研究の位置づけを行った。

第 3 章「研究方法」では、本研究で扱うデータを紹介し、その収集方法と自己開示の分類基準を提示した。本研究では、母語場面の時と接触場面の差が言語に反映される様子を捉えるため、初対面時の会話を 1 人当たり 2 回収録した。こうしたデータの設定は、母語場面と接触場面の比較に有効である。

第 4 章「自己開示の発話」では、自己開示の発話に注目しその量と内容から考察した。ここでは初対面の実際の会話データを用いて、自己開示がどれぐらい出現するのか検討した。また、出現した自己開示の内容を 2 つに分けて分析した。そして、内容に現れる

表現の特徴についてデータを用いて分析した。最後に、会話後の記述式質問紙調査の結果から KJ と J の意識の相違を明らかにした。そこから KJ は J に比べ自己開示の量も多く、評価的自己開示も多く開示することが判明した。そして、同国の人を相手にした場合よりも、異文化の人を相手にしたときに、自己開示の量が増えていたことも指摘された。表現形式について言えば、KJ は自分の評価について率直に言い、感情や考えを具体的に述べ、直接的な表現を多用し自己開示を行う。一方、J は自分の感情や考えなどをあまり開示しない傾向があり、同様に表現についても直接的な言葉はあまり使っていない。会話後の気づきから、KJ は開示の内容とその深さを敏感に感じていて、一方 J は開示の仕方と開示の量に注目している。

第 4 章の主張は以下の通りである。

(1)KJ は開示量も多く、開示内容も主観的内容が多く見られ、その表現には直接的な表現を使用して、感情や考えを具体的に述べる特徴がある。

従来の自己開示に関する多くの研究では、自己開示をする内容と開示量が注目されてきた。開示する言語表現の特徴と、自己開示の気づきへの意識の差の結果は、初対面の場面で自己開示をする際、互いに相違点を考慮すべき点について提示できたと考えられる。以上の結果からさらに、開示状況別に見た自己開示の量の差を明らかにした。

第 5 章「自発的自己開示と相手からの質問による自己開示」では、KJ と J を対象に、実際の会話データを基に、開示状況による自己開示の量の差と開示内容を分類し、開示状況の差を分析した。その結果、KJ も J も相手の質問による自己開示よりも自発的自己開示が多いことが明らかになった。特に KJ は J よりも自発的に自己開示をする傾向があった。KJ は J よりも客観的内容も主観的内容も自発的に開示をし、特に主観的内容において KJ と J の間に大きな差が見られた。J は開示状況と場面に関係なく一定の量を開示し、KJ は開示状況と場面によって開示量に変化が見られた。

第 5 章の主な主張は以下の通りである。

(2)初対面の人と自発的に開示をすることは共通している。

(3)KJ は内面的な自己開示を積極的に自発的にして相手との関係を深めようとする。

(4)J は、一定の量を保ち相手との距離を重視しつつ開示する。

本研究の主たる研究対象は自己開示であるが、会話の特徴として 2 者間のやり取りを考え、自己開示後の受け手の発話にも注目して第 6 章で考察した。

第 6 章「自己開示後の受け手の発話」では、自己開示の発話だけではなく、自己開示後の受け手の発話に焦点を当て分析した。また自己開示の受け手としての発話の使用傾向を明らかにした。その結果、自己開示の受け手の発話としては、J はあいづち詞を多用し、KJ は感想や意見を言葉で述べようとする特徴があることが観察された。そして、情報要求発話で J は、相手の開示による情報や会話の内容から情報を要求するのに対し、KJ は相手の自己開示の内容より深く聞き出す特徴があった。情報共感の発話では、KJ は相手の自己開示を自分の考えで言い直し、積極的に共感を示そうとしていた。

第 6 章の主な主張は以下の通りである。

(5)自己開示の受け手の発話として、J はあいづち詞を使う傾向があり、KJ は感想や意見を言葉で述べようとする特徴がある。

(6)J は相手の自己開示を促すことを重視し、KJ は自己開示への興味表示を重視する。

第 7 章「談話構造に見られる自己開示の機能」では、会話全体を視野に入れ、内容に焦点を当てて、話題導入の仕方と、展開に現れる自己開示に注目し、その働きとパターンを分析した。そして、話題の内容とその変化という 3 点を中心に検討した。その結果、自己開示と質問を KJ は話題導入の時に多く使い、J はある話題をさらに派生させるために多く使うという違いがあった。話題の内容は、J は話題を多くして相手の情報を収

集するよりもむしろ、話題の数は少ないが、1 つの話題から相手の情報を徐々に進展させていくことが見られた。一方、KJ は初対面の時から相手の情報を多く収集しようとし、話題の種類も多く、話題の展開が早いことが明らかになった。しかし、接触場面では、母語場面に出現した話題が同様に出るが、互いの共通点を探すため母語場面では出現しないような話題を取り上げることが観察された。本研究から、話題を展開する際に、KJ は互いの情報を多く集められるパターンで話題を展開させること、J は、一方は聞き手の役として、もう一方の情報を徐々に増やしていくという傾向が明らかになった。しかし、接触場面では、J が KJ に働きかける様子が見られ、共通話題を探して情報を深めて行くことが明らかになった。

第 7 章の主な主張は以下の通りである。

(7)KJ は話題の導入のため自己開示を行い、日本語母語話者は、1 つの話題を派生させるため自己開示をする。

(8)J は 1 つ話題について徐々に開示していくのに対し、KJ は多くの情報を交換しようとする。

(9)KJ は相手との距離を急速に縮めようとする一方、J は徐々に進展させていこうと数する。

第 4 章から第 6 章までは、「自己開示」と「受け手」の発話に焦点を当てたが、第 7 章は、1 回の発話だけではなく、談話全体における「自己開示」のやり取りを分析することで、より総合的な考察ができたと考えられる。

以上、第 1 章から第 7 章までを概観した。本研究では、初対面場面に現れる異文化コミュニケーションの相違を捉えるため、自己開示に焦点を当てて考察した。初対面の相手と親密になろうとすることは共通しているが、その特徴と過程には運用の仕方が異なることが明らかになった。このような結果は、両言語の話者に示唆するところが大きい

と思われる。

従来の言語行動の研究は、ある特定の発話に焦点を当てた研究が多く、相手との関係形成に必要不可欠である情報交換、いわゆる「自己開示」の実態を会話を通して捉えた研究は少なかった。本研究では、実際の会話に現れた「自己開示」を発話に限らず様々な角度から分析し、同一人物が相手の母語によってどのように振る舞いを変えるのか、その変容を考察した。さらに、自己開示をする側だけではなく受ける側、そして自己開示が談話の中でどのような働きをして、展開していくか、対人関係を進展させていく相違も記述できた。

このようなコミュニケーションの研究は、よりよい関係形成へとつなげることが可能になる。日本語学習者にとっても、相手との文化の差による誤解を起こさないために、自文化との相違点や類似点を知ることが重要である。例えば、韓国語日本語学習者は、開示量が多く、自ら深い開示をしようとすることは、相手への関心表明に繋がり、日本語母語話者が初対面の相手と距離を保つため自己開示の量も、展開の仕方も異なっていることを理解することで、互いに対人関係調整の仕方の習得につながると考えられる。

従って、本研究の結果は、初対面の間で情報を交換する際、互いに関係を作って行くにあたって欠かせない知見であると考えられる。

8.2　今後の課題

自己開示は、心理学で多く研究されているが、言語の観点から実態を調査した研究はまだ少ないのが現状である。限られたデータではあるが、本研究は多角的視点から言語間の対照研究行い、また場面による差があることを提示できたことに意義があると考えられる。

しかし、本研究では初対面の間柄に焦点を当てているため、親しい間柄との自己開示の相違は見られていない。自己開示の内容を本研究では 2 つに分けているが、2 つの分

類は初対面に適しているため、深い自己開示における細分化をした分析までは追及できなかった。また、会話例のように、内容は評価的自己開示でも、表現によって自己開示の深さに相違がある可能性があり、言語面からのその実態を解明していく必要があると考えられる。また、質問紙における会話後のコメントから、相手の自己開示や受け手の発話に対する否定的な評価をする様子が窺えている。よって、発話だけではなく、発話後の意識と結び相関を見ることで､具体的な考察に結びつくことが考えられる｡そして、自己開示は、性差があることから、本研究では会話協力者を女性に絞り分析したが、男性同士もしくは男女にも差があることが予想される。また、本研究における結果からも示されるように、実際の発話に現れる差と、意識の相違があることから、日韓以外の言語・文化において同一な結果が見られるのか比較、分析する必要があると考えられる。

本研究では、日本語の上級者を対象にしているため、日本語での会話に慣れている学習なのでその傾向を示した可能性も考えられる。それによって、接触場面における結果が影響されたことも考えられるため、今後、学習者のレベルを調整して再調査をする必要性が求められる。そして、日本語が話せない韓国語母語話者と韓国語を学習する日本人韓国語学習者のデータを追加調査して比較することで、さらに実態の解明に繋がると考えられる。

自己開示という言語行動の研究は、異文化間のコミュニケーションの仕方や対人関係の原理の解明に迫る研究へと発展することが可能になるのではないかと考えられる。今後は上記の課題を踏まえた上で、データの数や話者の属性のバリエーションを補い本研究の結果を検証しつつ、研究を進めたい。

［参考文献］

＜日本語で書かれた文献＞

阿部洋子・井上文子・真田信治・関正昭・増田幸子・松井嘉和（2004)『文化・社会・地域』佐治圭三・真田信治（監), 凡人社

安藤清志（1981)「自己開示と対人認知―自己開示行動が開示者の被開示者に対する印象に与える影響について―」『東京大学教養学部人文科学紀要』72, pp.97-112, 東京大学出版会

安藤清志（1986)「対人関係における自己開示の機能」『東京女子大学紀要論』36, pp.167-199, 東京女子大学

李圭泰（1978)『韓国人の意識構造』東洋図書出版

李善玉（2016）「韓日異性間の初対面会話の話題に関する研究―話題提示方法と話題導入要素を中心に―」『日本語教育国際研究大会予稿集』pp.1-5, 日本語教育学会

石井敏・久米昭基・遠山淳（2001)『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』有斐閣

井出祥子（1998)「文化とコミュニケーション行動―日本語はいかに日本文化とかかわるか―」『日本語学』11, pp.63-77, 明治書院

井出祥子（1998)「シンポジウム社会言語学と理論と方法」『言語研究』93, pp.97-103, 日本言語学会

井出里咲子・任栄哲（2004)『箸とチョッカラク―言葉と文化の日韓比較―』大修館書店

井出祥子・平賀正子（2005)『異文化とコミュニケーション』ひつじ書房

任榮哲（2006)『韓国人による日本社会言語学研究』おうふう

任栄哲（2009)「韓国における日本語の位相―中国語との比較を中心に―」『日本語教育研究』48, pp.127-141, 韓国日本語教育学会

林紋守（2005)「在日留学生と日本人の友人関係親密化課程における異文化間リテラシーの発達―自己開示を伴う相互交渉という視点から―」『言語地域文化研究』11, pp.143-160, 東京外国語大学大学院

岩端貴弘（2009)「日本語の終助詞『ね』を通してみる『共有』と『コミュニケーション』

について」『神奈川大学人文学会誌』167, pp.51-114, 神奈川大学人文学会
宇佐美まゆみ・前田明美（1995)「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン―初対面二者間の会話分析より―」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2, pp.130-145, 名古屋学院大学留学生別科
宇佐美まゆみ（2007)「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』平成 15-18 年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2)研究成果報告書
宇佐美洋（2016)『評価を持って街に出よう：教えたいこと・学んだことの評価という発想を超えて』くろしお出版
榎本博明（1983)「対人関係を規定する要因としての自己開示研究」『心理学評論』26, pp.148-164, 心理学評論刊行会
榎本博明（1997)『自己開示の心理学的研究』北大路書房
大崎正瑠（1998)「日韓異文化コミュニケーション―対人レベルを中心に―」『大妻女子大学紀要』30, pp.107-136, 大妻女子大学紀要文系委員会
大谷麻美（2015)「話題展開スタイル日・英対照分析―会話参加者はどのように話題の展開に貢献するのか―」『日・英語談話スタイルの対照研究 : 英語コミュニケーション教育への応用』津田早苗・村田泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子(編), pp.193-229, ひつじ書房
大津友美（2007）「会話における冗談のコミュニケーション特徴―スタイルシフトによる冗談の場合―」『社会言語科学』10, pp.45-55, 社会言語科学会
小川一美（2000)「初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者及び会話に対する印象の関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』47, pp.173-183, 名古屋学院大学留学生別科
岡崎敏雄（2003)「共生言語の形成―接触場面固有の言語形成―」『接触場面と日本語教育―ネウストプニーのインパクト』宮崎里司・ヘレン・マリオット(編), pp.24-44, 明治書院
岡本佐知子（2006)「日本人の自己紹介における自己開示」『北海道文教大学論集』7, pp.51-61, 北海道文教大学

荻原稚佳子（2014）「韓国語母語話者の韓国語会話での言いさし使用―自己開示の言いさし働きに注目して―」『明海大学大学院応用言語学研究』16, pp.89-99, 明海大学大学院応用言語学研究科紀要編集委員会

奥山洋子（2005）「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話―質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に―」『社会言語科学』8, pp.69-81, 社会言語科学会

尾崎喜光（2008）『言語行動の基底にあるもの』ひつじ書房

釜田友里江（2014）「会話の中で相手に共感できない場合の発話の特徴―相互行為の観点から―」『待遇コミュニケーション研究』12, pp.18-34, 待遇コミュニケーション研究会

柏木厚子（2017）「インタビュー番組におけるほめの返答の日米比較―非言語データも含めた発話分析―」『学苑総合教育センター国際学科特集』19, pp.1-14, 昭和女子大学近代文化研究所

加藤尚吾・加藤由樹・赤堀侃司（2006）「電子掲示板上のコミュニケーションにおける自己開示の返報性と感情的側面に関する分析」『日本社会情報学会学会誌』18, pp.5-19, 日本社会情報学会

加藤好崇（2000）「日本人母語話者と日本語学習者のインタビュー場面における言語管理の研究」『東海大学紀要』20, pp.57-69, 日本社会情報学会

加藤好崇（2006）「接触場面における規範の考察」『高見澤孟先生古希記念論文』26, pp.1-17, 高見澤孟先生古希記念論文集編集委員会

加藤好崇（2010）『異文化接触場面のインターアクション：日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範』東海大学出版会

河内彩香（2003）「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』3, pp.41-55, 早稲田大学日本語教育センター

河内彩香（2009）「日本語の雑談における話題の展開方法」『東京大学留学生センター教育研究論集』15, pp.41-58, 東京大学留学生センター

倉田修（1993）「日本語教育における中間文法(7)―インプット/フォリナートーク 」『言語』22, pp.114-115, 大修館書店

姜昌妊（2005）「母語場面と接触場面における韓国語話者と日本語話者の話者交替」『日本研究』24, pp.539-560, 日本語文学会

金庚芬（2002)「ほめに対する返答の日韓対照研究」『言語地域文化研究』8, pp.179-196, 東京外国語大学大学院

金庚芬（2012)『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房

熊谷智子・石井恵理子（2008)「会話における話題選択の日韓比較」『対人行動の日韓対照研究―言語行動の基底にあるもの―』尾崎喜光(編), pp.197-239, ひつじ書房

熊谷智子・木谷直之（2010)『三者面接調査におけるコミュニケーション：相互行為と参加の枠組』くろしお出版

熊野道子 （2002)「自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違」『教育心理学研究』50, pp.456-464, 日本教育心理学会

熊本智子・石井恵理子（2005)「会話における話題の選択―若年層を中心とする日本人と韓国人への調査から―」『社会言語科学』8, pp.93-105, 社会言語科学会

倉地暁美（1998)『多文化共生の教育』勁草書房

国立国語研究所（2006)『言語行動における配慮の諸相』くろしお出版

顧佩霊（2010）「中国と日本の大学生の対人関係における自己開示のあり方に関する比較研究」『九州大学心理学研究』11, pp.153-163, 九州大学大学院人間環境学研究科

小宮修太朗 （2001)「日本人の話し方に対して韓国人留学生が持つネガティヴな印象についての調査研究」『留学生教育』6, pp.35-55, 留学生教育学会編集委員会

佐々木由美（1998)「初対面の状況に置ける日本人の情報要求の発話―同文化内及び異文化間コミュニケーションの場面―」『異文化間教育』12, pp.110-127, 学術雑誌目次速報データベース由来

佐藤郁哉（2008)『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社

重光由加（2003）『応用言語学事典』小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修(編), pp.221, 研究社

申媛善 （2006)「情報のやりとりにおける受信者側の働き―日本語話者と韓国語話者の比較―」『筑波応用言語学研究』13, pp.85-97, 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域

申媛善（2007)「相互行為からみたスピーチスタイルシフト―聞き手による『同調』に着目して―」『筑波応用言語学研究』14, pp.59-72, 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域

鈴木睦（1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』田窪行則(編), pp.47-76, くろしお出版

全鍾美（2009)「接触場面における話題選択及び話題開始の傾向」『日本語教育学研究への展望―柏崎雅世教授退職記念論集―』藤森弘子・楠本徹也・宮城徹・花薗悟・鈴木智美(編), pp.281-297, ひつじ書房

全鍾美（2010a)「初対面会話における韓国人日本語学習者の自己開示研究」『小出記念日本語教育学会論文集』18, pp.5-21, 小出記念日本語教育研究会

全鍾美（2010b)「初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究―内容の分類から見る自己開示の特徴―」『社会言語科学』13, pp.123-135, 社会言語科学会

滝浦正人（2008)『ポライトネス入門』研究社

田所希佳子（2013)「初対面会話教育における重要項目の選定に関する考察―母語話者・非母語話者に対する意識調査から―」『早稲田大学日本語研究』22, pp.13-23, 早稲田大学国語学会

田中敏・山際勇一郎（1992)『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法：方法の理解から論文の書き方まで』教育出版

谷泰（2004)『笑いの本地、笑いの本願：無知の知のコミュニケーション』以文社

谷智子（2011)「初対面からの継続的対面データに見る話題のデフォルト化―ディスコースレベルのポライトネスの観点から―」『大阪大学言語文化学』29, pp.75-85, 大阪大学言語文化学会

玉村文郎（2002)『日本語学と言語学』明治書院

俵山雄司 （2008)「留学生対象の講義における講師の言語調整行動と意識との関連―留学生向けの教養・専門科目講義の方法を検討するために―」『群馬大学留学生センター論集』8, pp.13-29, 群馬大学留学生センター

津田早苗（1999)『談話分析と文化比較』リーベル出版

筒井千絵　(2008)「フォリナートークの実際―非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違―」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.79-95, 一橋大学留学生センター

筒井千絵（2010)「依頼の接触場面における母語話者の言語調整の特徴」『日本語／日本語教育研究』1, pp.49-65, ココ出版

徳井厚子（2006)「会話における異文化性のダイナミズム―相互行為の分析の視点から―」『言外と言内の交流分野』上田功・野田尚史(編), pp.415-422, 東京大学書林
徳井厚子・桝本智子（2006)『対人関係構築のためのコミュニケーション入門』 ひつじ書房
中井陽子（2002)「初対面母語話者/非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解･印象の関係―フォローアップインタビューをもとに―」『群馬大学留学生センター論集』5, pp.23-38, 群馬大学留学生センター
中井陽子（2003a)「初対面日本語会話の話題開始部/終了部で用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語教育センター紀要』16, pp.71-95, 早稲田大学日本語教育センター
中井陽子（2003b)「話題開始部で用いられる質問表現―日本語母語話者同士及び母語話者/非母語話者による会話をもとに―」『早稲田大学日本語教育研究』2, pp.37-54, 早稲田大学
中井陽子（2004)「話題開始部/終了部で用いられる言語的要素―母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合―」『講座日本語教育』4, pp.3-26, 早稲田大学日本語研究教育センター
内藤伊都子（2011)「親密さの要因としての対人魅力、自己開示及び非言語行動―同性二者間による日本人の友人と異文化の友人の比較―」『ヒューマンコミュニケーション研究』39, pp.5-24, 日本コミュニケーション学会
中川典子（2003)「日本人と韓国人のビジネスマンの自己開示に関する比較調査」『異文化間教育』17, pp.62-77, 異文化間教育学会
中川典子（2011)「日本人と韓国人ビジネスパーソンの自己開示に関する異文化―比較調査面接調査法による質的調査の結果から―」『流通科学大学論集―人間・社会・自然編―』23, pp.25-44, 流通科学大学学術研究会
中村雅彦（1984)「自己開示の対人魅力に及ぼす効果」『日本心理学雑誌』55, pp.131-137, 日本心理学会
中村陽吉（1990)『自己過程の社会心理学』東京大学出版会
中村香代子（2008)「誉めへの返答ストラテジーの日独対照研究：誉めの解釈応答にみる文化的差異」『語学教育研究論叢』25, pp.219-235, 大東文化大学語学教育研究

所
中山晶子（2003)『親しさのコミュニケーション』くろしお出版
中山治（1989)『「ぼかし」の心理―人見知り親和型文化と日本人―』創基社
西坂仰（1997)『相互行為分析という視点』金子書房
西坂仰・串田秀也・熊谷智子（2008)「相互行為における言語使用会話データを用いた研究について」『社会言語科学』20(2), pp.13-15, 社会言語科学会
西田司（1998)「初対面 30 分間の話題に見る日米自己開示」『異文化の人間関係』12, pp.39-54, 高賀出版
西田司（2001)「コミュニケーションにおける不確実性」『国際関係研究』21, pp.131-149, 日本大学国際関係学部国際関係研究所
ネウストプニー. J. V.（1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波新書
ネウストプニー. J. V.（1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
野田尚史（2012)『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版
野原ゆかり（2014)『日本語非母語話者の話し言葉に対する母語話者評価の研究：日本語教育における評価のあり方を問い直す』風間書房
橋内武（1999)『ディスコース談話の織りなす世界』くろしお出版
橋本進吉（1934)『新文典別記文語編』富山房
橋本進吉（1948)『国語法研究』岩波書店
花村博司（2015)「日本語会話における話題転換表現―新出型・再開型・前提提示型という話題転換の形による使い分け―」『社会言語科学』18, pp.75-92, 社会言語科学会
古屋健・鈴木晶夫・大坊 郁夫・白井泰子・斎藤勇（1987)「対人コミュニケーションの心理」『対人社会心理学重要研究集』齊藤勇(編), pp.41-44, 誠心書房
日高水恵（2012)「察し合いの談話展開に見られる日本語の配慮言語行動」『配慮はどのように示されるか』生城直樹・野田尚史・三宅和子(編), pp.91-11, ひつじ書房
一二三朋子 （2002)『接触場面における共生的学習の可能性―意識面と発話内容面からの考察―』風間書房
一二三朋子（2010)「自己開示の前提となる自己観に関する一考察―日本人大学生と中国人大学生の比較を通して―」『文藝言語研究.言語篇』57, pp.61-73, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻

一二三朋子（2013)「女子学生による自己開示の開示内容面と心理面に関する日中対照研究」『文藝言語研究. 言語篇』64, pp.75-94, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻

ファン・サウクエン（2006)「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」『日本語教育の新たな文脈―学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性―』国立国語研究所(編), pp.120-141, アルク

ファン・サウクエン（2010)「異文化接触―接触場面と言語」『シリーズ朝倉＜言語＞の可能性 言語と社会・教育』西原鈴子(編), pp.75-99, 朝倉書房

深田博己（1998)『インターパーソナル・コミュニケーション―対人コミュニケーションの心理学―』北大路書房

福井考三（2013)「接触場面における相互行為プロセスの分析―日本人学生と日本語学習者の会話参加様相の縦断的考察―」『立命館大学大学院言語教育情報研究科』11, pp.78-102, 立命館大学大学院言語教育情報研究科

福島和郎・岩﨑庸男・渋谷昌三（2008)「終助詞“よ”と“ね”の発話が発話者の印象に及ぼす効果」『目白大学心理学研究』4, pp.75-84, 目白大学

豊前貴子・大渕憲一・中村貴子・大淵憲一・中村雅知（1990)「自己開示に関する研究―日本人大学生と留学生の比較―」『東北大学学生相談所紀要』17, pp.43-57, 東北大学学生相談所

許明子（2010)「日韓対照研究と日本語教育―話し手と聞き手との関係から見た日本語と韓国語の言語行動について―」『日本語教育研究への招待』砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹(編), pp.273-288, くろしお出版

堀口純子（1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版

俣野夕子（1996)「接触場面における話者交替」『阪大日本語研究』8, pp.87-106, 大阪大学文学部日本学科

洪珉杓（2007)『日韓の言語文化の理解』風間書房

松井豊（2001)『心の健康をはかる適応・臨床』サイエンス社

松田陽子（1988)「対話の日本語教育学―あいづちに関連して―」『日本語学』7, pp.59-66, 明治書房

水谷信子（1993)「共話から対話へ」『日本語学』12, pp.4-11, 明治書房

三牧陽子(1999)「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー大学生会話の分析」『日本語教育』103, pp.49-58, 日本語教育学会
三牧陽子 (2008)「敬語とコミュニケーションの現在―話題の選択と展開に見るポライトネスディスコースレベルから捉えた相互行為―」『文学』9, pp.32-42, 岩波書店
三牧陽子 (2013a)『ポライトネスの談話分析』くろしお出版
三牧陽子 (2013b)『ポライトネスの談話分析：初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版
三牧陽子 (2016)『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』くろしお出版
三宅和子・野田尚史・生越直樹 (2012)『配慮はどのように示されるか』ひつじ書房
村上恵・熊取谷哲夫 (1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, pp.101-111, 表現学会
メイナード、泉子・K (1993)『会話分析』くろしお出版
メイナード、泉子・K (2001)「話しことばのスタイル―心の変化と話しことばのスタイルシフト―」『言語』10, pp.38-45, 大修館書店
守崎誠一・内藤伊都子 (2007)「同性二者間に見られる自己開示の返報性―親密度と文化の影響―」『異文化間教育』25, pp.74-89, 異文化間教育学会紀要編集委員会
ラオハブラナキット・カノックワン (2012)「非母語話者には難しい母語話者の日本語コミュニケーション」『日本語教育のためのコミュニケーション研究』野田尚史(編), pp.23-42,くろしお出版
山本眞理子 (2001)『人間の内面を探る：自己・個人内過程』サイエンス社
楊虹 (2005)「日中接触場面の話題転換―中国語母語話者に注目して―」『言語文化と日本語教育』30, pp.31-40, お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
楊虹 (2006)「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』8, pp.327-336, お茶の水女子大学
楊虹 (2007)「中日母語場面の話題転換の比較―話題終了のプロセスに着目して―」『世界の日本語教育』17, pp.37-52, 国際交流基金日本語国際センター
楊虹 (2011)「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較―参加者間の相互行為に注目して―」『立命館言語文化研究』22, pp.185-201, 立命館大学国際言語文化研

究所

楊虹（2015)「初対面会話における話題上の聞き手行動の日・中比較」『日本語教育』162, pp.66-81, 日本語教育学会

横田雅弘(1991)「自己開示から見た留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105, pp.629-647, 日本評論社

横田淳子（1986)「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58, pp.203-223, 日本語教育学会

＜韓国語で書かれた文献＞

国語国立院　　標準語国語大辞典　　国立国語研究院

국어국립원（1999)「표준국어대사전」　국립국어연구원

＜英語で書かれた文献＞

Altman, I. & William, W. (1965). Interpersonal exchange in isolation. *Sociometry* 28, pp.411-426.

Altman, I. & Dalmas, A. T. (1973). *Social Penetration: The development of Interpersonal Relationships.* Holt, Rinehart & Winston, Inc.

Berger, R. & Bradac, J. (1982). *Language and Social Knowledge*. London: Edward Arnold.

Berger, R. & Gudykunst, W. B. (1991). *Uncertainty and Communication.* Progress in Communication Sciences.

Barnlund, D. C. (1975). *Public and Private Self in Japan and the United States: Communicative Styles of Two Cultures.* Simul Press.

Cozby, P. C. (1973). Self-disclosure: a literature review. *Psychological Bulletin,* 79, pp.73-91.

Chen, G. (1995). Differences in self-disclosure patterns among Americans versus Chinese: A comparative study. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 26(1), pp.84-91.

Derlega, V. J., Wilson, M. & Alan, L. C. (1975a). *Sharing Intimacy: What We Reveal to Others and Why*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.

Derlega, V. J., Wilson, M. & Alan, L. C. (1975b). Friendship and disclosure reciprocity. *Journal of Personality and Social Psychology,* 34, pp.578-582.

Derlega, V. J. & Alan, L. C. (1976). Norms affecting self-disclosure in men and women. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* 44, pp.376-380.

Farber, B. A. (2006). *Self Disclosure in Psychotherapy.* New York: The Guilford Press.

Hall, E. T. (1966). *The Hidden Dimension*. NewYork: Double day and Company, Inc.（日高敏隆・佐藤信行訳(1970)『かくれた次元』みすず書房）

Jourard, S. M. & Lasakow, P. (1958). Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, pp.92-98.

Jourard, S. M. (1971). *Self-disclosure: An Experimental Analysis of the Transparent Self.* New York: Wiley-Interscience.

Morton, T. L. (1978). Intimacy and reciprocity of exchange: A comparison of spouses and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, pp.72-81.

Nakayama, A. (2008). *The Communication of Closeness in Japanese*. Kurosio: Publishers.

Neustupný, J. V. (1985). Problems in Australian-Japanese Contact Situation. In J. B. Pride. (ED). Cross-cultural Encounters.Communication and Miscommunication. Melbournne: River Seince, pp.44-84.

Neustupný, J. V. (2005). Foreigners and Japanese in contact situations: Evaluation of norm deviations. *International Journal of the Sociology of Language,* 175/176, pp.307-323.

Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in Society: The Development of Higher Psychological Processes.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

各章と既発表論文及び学会発表との関連

第 1 章　研究の背景と目的

新規執筆

第 2 章　先行研究と本論文の位置づけ

新規執筆

第 3 章　本研究のデータと研究方法

新規執筆

第 4 章　自己開示の発話量の比較と表現の特徴

吳晛榮(2016)「韓国人日本語学習者の初対面接触場面における自己開示の研究—自己開示後の受け手の発話を中心に—」筑波大学人文社会科学研究科修士論文

吳晛榮(2016)「韓国人日本語学習者の自己開示の研究—自己開示の発話内容を中心に—」『日本語学研究』49 韓国日本語学会 pp.25-39.

第 5 章　自発的自己開示と相手からの質問による自己開示

吳晛榮(2017)「初対面接触場面における自発的自己開示と相手からの質問による自己開示－韓国人日本語学習者と日本語母語話者の会話データから－」『筑波応用言語学研究』24 pp.39-51.

第 6 章　自己開示後の受け手の発話

吳晛榮(2015)「初対面接触場面における韓国人日本語学習者の自己開示の研究—自己開示後の受け手の発話を中心に—」第 26 回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会（口頭発表）

吳晛榮(2017)「初対面接触場面における自己開示後の受け手の発話 —韓国人日本語学習者と日本語母語話者の会話をもとに—」『日本語学研究』54 韓国日本語学会 pp.139-153.

第 7 章　話題展開に見られる自己開示

吳晛榮(2017)「話題展開に見られる自己開示—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の初対面から 3 回の会話を通して—」『言語学論叢』10 オンライン版 pp.63-83.

第 8 章　本研究のまとめと今後の課題

＜添付資料＞

会話収録後の質問紙調査

所属：

日本滞在年数：

1. 相手が初対面であることに意識しましたか

2. 初対面の相手に自分のことを話す時、意識して気を付けていることはありますか

(それは、同じ国の人と異国の人に対して話す時と違いますか)

3. 初対面の相手と話す時、日韓の違いについて感じたことはありますか。

4. 対話者が日本人の時と韓国人の時、自分から話した後、相手の応答に感じた相違について

5. 会話終了後、初対面の人と話して感じたこと

日本人に対して

韓国人に対して